

# 大界世と本 動乱

392.1  
MA85



\* 0056413000 \*

1

0056413-000

392.1-Ma85ウ

日本と世界大動乱

松尾樹明・著

高倉忠誠堂

昭和17

AJC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



392.1  
MA85

著明樹尾松



570



392.1  
MA85



## 自序

大東亞戦争は、東條首相のいふがごとく一人類史上に一新紀元を畫すべき新たな構想のもとに雄大無比な展開を見つゝあるもので、それはまた米英の搾取からの全東亞の解放戦である。こゝに從來の帝國主義的戦争に終止符がうたれたのであつて、戦争理念の一大變革であるはもとより、世界歴史に畫期的なる革新を企圖したものといはねばならぬ。

大東亞戦争、それは世界新秩序戦を帝國の目的といふ見地から呼稱したものであり、昭和の聖代に生を享けた一億國民はこの未曾有の大戦を戦ひ抜き勝利の榮光に到達しなければならぬ。かくてこそ、日清日露の兩戦役によつてもたらされたわが國運の發展に數倍する飛躍的興隆が大東亞諸民族の上に輝くであらう。





開戦劈頭の十二月八日、太平洋の空を長驅奇襲して、ハワイの米海軍勢力主軸を葬つた精鋭なるわが帝國海軍航空部隊は、ふたたび英國海軍艦列の最先列にある巨艦を寸時にして南洋の底に葬つた。まさに世界の海戦史家をして啞然驚嘆せしめた歴史的大偉勳である。

東太平洋では米海軍勢力の、また西南太平洋では英海軍勢力の、米英兩海軍勢力の主力が、開戦以來わづかに二日目にして共に全滅し、わが帝國海軍がいよいよ世界における無敵艦隊の眞威力をもつて太平洋制海權の完全掌握へと進んでゐるのである。かやうな驚異的大戦果は、いまだかつてその例を見ない赫々たるものである。

次にソ聯との軍事衝突こそいまだ起るに至つてゐないが、ありとあらゆる敵意を日本に向けて世界大動亂の勃發を企圖する陰險極まる策動は、最近益々猛威を加へると共に、東亞の風雲も日に日に險惡ならんとする有様である。かゝる手段と妨害が加はれば加はるほど、日本はむしろこれを大東亞共榮圈確立のために避く可から

ざる事態として、その重積し來る壓力を踏み堪へねばならぬ。而して斷々乎として屈することなく、大死一番の覺悟と氣魄とをもつて闘ひ抜くことによつて、戦争最後の完遂は庶幾し得るのである。

本書は右のごとき主旨を以て一は輝しき戦史を、一はわが警告的豫言を執筆したものであるから、その資料の選擇については慎重なる注意と勞力を拂ひ、また當局の御注意に基きわが方の數字的記述を芟除した。

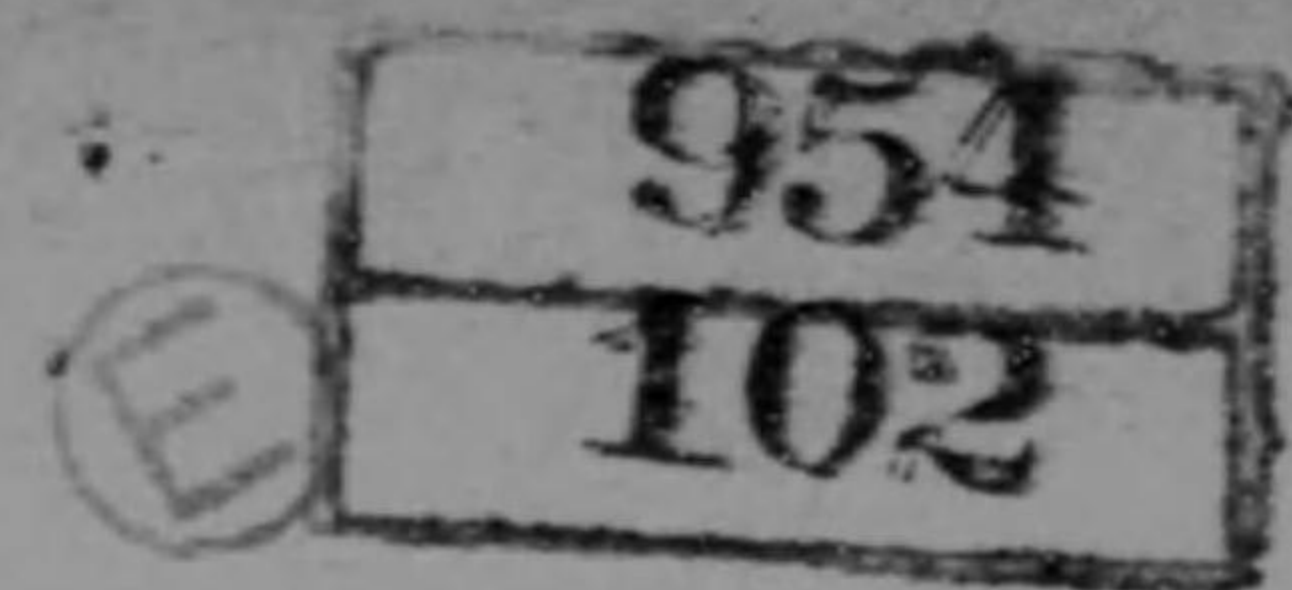
猶本書の出版に當つては、陸海軍當局を始め、海と空社、陸軍畫報、水交社等より懇篤なる御注意御教示を得たること、本書出版を予に勸奨せられたる尾崎楠太郎氏より協力を得たること等、その御好意と御援助に負ふところ極めて多い。

茲に鏤記して深甚なる感謝の意を表する次第である。

昭和十七年陽春

武藏野の僑居にて

著者識





# 日本と世界大動亂 目次

## 一、日米英火蓋を切る

- (一) あの朝の重大發表……………一  
米英軍と戦闘状態に入れり——鐵石の決意——屠れ米英われらの敵だ——米大使と  
英大使の招致
  - (二) 帝國政府の對米英通牒……………七  
中外に開戦理由を闡明——帝國政府の對米英通牒
  - (三) 大詔 換 發……………七七  
宣戦布告の大詔換發——東條首相の政府聲明内容——宣戦の意義
- ## 二、ハワイ大海戦の全貌
- (一) 決死的大空襲……………三五



歴史的十二月八日早朝——荒鷲部隊の奇襲作戦——スル／＼とあがつたZ旗の信號——戦闘準備

(一) 航空母艦から飛び立つ……………四二

決然たる攻撃姿勢へ——みんな絶好の爆撃目標——わが雷撃機隊魚雷をぶツ放す——物凄い艦側の水柱——感激の無電

(二) 見事主力艦に命中、轟沈、撃沈……………四六

彈幕の中悠々旋回——壯烈雷撃機體當り——敵艦悉く傷つく——朝陽浴びて哀れ敗北の残骸

(三) アメリカの狼狽と混乱……………五一

七十餘機の同士討ち——米潜水艦の狼狽——ハワイ敗戦の責任——喧々囂々たる非難の聲

### 三、マレー沖大海戦の全貌

(一) 英國東洋艦隊の撃滅……………五六

プリンス・オブ・ウェールズ號の入港——南支那海の悪天候を冒して——敵艦隊を發見す——各部隊の出發——無念引返す

(二) 敵艦隊と遭遇……………六三

スコールを衝く——潜水艦より飛電一閃——千載一遇の好機——歴史的第一報——マストと擦／＼に——のたうつ敵艦掃射

(三) 雷撃部隊の活躍……………六九

閃く白光、命中だ——レパルス號の轟沈——凄絶火華散る自爆——泣きながら萬歳絶叫——ウェールズ號の撃沈

### 四、兩海戦の解説

(一) 無敵海の荒鷲……………七六

一發必中の氣魄——海鷲不可能を抹殺——彈幕の中を悠々飛行——荒鷲の神技

(二) 無敵陸の荒鷲……………八〇

敵の優秀機殲滅——生かす血の訓練——築く逞しき金字塔——操縦訓練と空中射撃射撃——訓練と必中彈

(三) 轟沈の驚異……………八五

轟沈した米英二戦艦の防禦装甲——不沈戦艦ウェールズ號の正體——米ウエスト・ヴァージニア號の防禦装置——これからの戦艦



(四) 空中魚雷のこと…………… 四〇

英國は世界魚雷界の本山——空中魚雷はアメリカの發明——狙へば巨艦も金縛り——魚雷の走り方

(五) 平出英夫海軍大佐の獅々吼…………… 四四

世界を開く日本——生死超越の戰闘意識——民強くして軍強し——日本軍獨特の自爆——彼我戰闘意識の相違——職域奉公に徹せよ——一勝に安んずるなかれ

## 獨ソ戰とソ聯の解剖

### 一、獨ソ開戰の真相

(一) 獨ソ火蓋を切る…………… 一〇九

不氣味ならみ合ひ——戰火飛ぶウクライナの宿命——ヒトラーの筋書——獨軍の總動員一十萬——獨對ソ宣戰布告——伊も對ソ宣戰布告——ルーマニアも宣戰進軍——フィンランドも行動開始——獨空軍大舉爆撃開始

(二) ウクライナ進入と全歐露の情勢…………… 一一〇

獨軍の先進部隊——覆面戰術の電撃成功——ソ艦隊根據地で殲滅——東プロイセン戰線——ウイストウラ河戰線——オデッサ猛爆——ソ聯の總動員——リトアニアの獨立宣言——プラスコウイツツ將軍の登場——火の海の國境

(三) ソ聯空軍の壊滅…………… 一二四

撃破既に二千機——獨機の奇襲戰法奏功——プレストリウスク占領——リトアニア全土席卷——獨の民族工作——ソ聯の抵抗力——スターリン線の解剖——ウクライナの獨立工作——一日の進撃五十軒——中部戰線の大激戰

(四) ソ聯の長期戰準備…………… 一二九

赤軍捕虜六萬餘——ソ聯密集師團——遷都問題——オデッサ陷落——ヒトラーの戰術とナポレオン——ソ聯の怪戰車隊——ミンスク包圍——芬蘭對ソ戰——獨軍の戰果發表——洪國の對ソ宣戰

(五) 東部戰線のドイツ軍…………… 一三三

大規模の作戰——ソ聯のルーマニア油田空襲——デンマークと佛の對ソ戰——獨戰のレニングラード猛爆——赤軍落下傘部隊——ミンスク陷落——獨機甲部隊の獨進——ソ聯の宣傳戰——モスクワの護り——獨軍楔形の進出



## 二、ロシアの國史と日露戦争

(一) ロシアの發祥……………一三六

スラヴ民族の世界最大の平原征服——カピス海、黒海、バルチック海とロシア民族——ノヴゴロドに都市を築く——リユーリツク家の創立——古代スラヴ民族の社會狀態——商業と都市の發達——大公の權限と權利の平等——ノルマン人の來襲——特有の共産的民主政治——聯邦政治の奇觀

(二) キエフ公朝の全盛期とモスコフ公朝……………一四四

ストヤトスラウ大公の羅馬征伐戰——ローマの狡猾なる布教政策——露西亞の統治者とギリシヤ正教——キエフ公朝の全盛期——分轄制度と諸侯の勢力増大——弱肉強食の弊が浸潤——南露の草原遊牧民の侵入——貴族地主と農奴制——キエフ大公の追放——ウラジミル、ツウエリリヤザン各地の群雄割據——タタール族の蹂躪時代——モスクワ公朝の勃興

(三) イワン烈帝の暴虐政治……………一四八

モスクワ公朝の領土擴張——反軍大討伐と諸侯地の併吞——イワン四世皇帝の出顯——モスクワ公朝の威令露西亞全土に及ぶ——階級制度の劃立——イワン烈帝の暴虐政治——ロシア革命の端緒——革命軍の敗北と國民の不安動搖——ロマノフ王朝

の創立——皇后を七度變へたイワン烈帝

(四) 闇黒時代とペョートル大帝……………一五二

ロマノフ皇帝と貴族僧侶商人農民各階級の代表者——農奴制度からモスコフ一揆——有名なステエンカ・ラージンの亂——ロマノフ王朝の戰爭的失敗——精力と叡智の人ピョートル大帝の大改革——領土擴張と國威の發揚——エカテリナ二世女王の反動政策——農民の危險思想と政府倒壊熱——アガチョフの叛亂——エカテリナ女王の淫奔な日常生活

(五) ロシア最後の大革命……………一五七

パーウエル皇帝暗殺さる——アレキサンドル二世の反動政策と十二月黨亂——ナポレオン軍の侵入を撃退す——ニコライ一世と峻嚴なる警察政策——苛酷な檢閲制度と慘憺たる闘争——バクーニンとヘルツェンの追放——十二世紀後半の煩悶と苦惱と自覺——アレキサンドル二世の地主救済——虛無主義思想の擡頭——逮捕、監禁追放、死刑の連鎖——一少女のトレポフ將軍狙撃——アレキサンドル二世テロリストの爆彈に倒る——ロマノフ王朝最後の皇帝ニコライ二世——大統領と革命の機運——内務大臣ブレウエ暗殺さる——レーニン劃策の大革命——世界大戰の勃發——ニコライ二世の悲惨な最期



(六) ロシアの領土侵略史……………一六二

ワシリー三世——イワン三世——ワシリー四世——イワン四世——フョードル一世  
——ゴツノフ——ワシリーシユスキ——ミハイル——ビョートル大帝——カテリ  
ナ——イワン——カテリナ二世——パーウエル一世——亞歷山——支那全土及び印  
度への野心——ソヴェートの目標と世界赤化の國是——沿海州はもと滿洲の領土

(七) 日露戦争……………一六七

日露の衝突——北事變の清終局——ロシアの滿洲占領計畫——無辜の支那人五千人  
を黒龍江に投ず——暴虐なるロシアの通牒——露支密約協定——日英佛獨の協同警  
告——名みのロシアの撤兵——朝鮮國境を脅かす——朝鮮龍巖浦に砲臺を建設す  
——小村壽太郎とローゼン公使の第一回會見——ロシアの大軍滿韓を壓す——我が  
日露交渉斷絶の公文電調——露國駐日公使に撤退要求——仁川及旅順沖の日露兩艦  
の衝突——日露兩國の宣戰布告——日露戦争始まる

### 三、ソヴェート聯邦の全貌

(一) ソ聯邦の領土及び人口……………一七五

ソヴェート社會主義共和國聯邦——勞農制度の社會主義和國が聯合して一大聯盟を

形成——ソ聯邦の領域は全地球の六分一——人口の分布状態と都市人口の比率——  
民族の數百八十五——最も勢力のあるスラヴ民族——遊牧民族チユクチとサモエド  
——自由解放の美名と異民族の悲哀

(二) ソ聯邦共產黨の解剖……………一七七

その正稱は全聯邦共產黨——現在黨員數約百七十餘萬人——強權に依る壓迫、投獄、  
銃殺等の威嚇——最高機關は黨大會——中央委員會と監督委員會——黨地方委員會  
黨政治部の獨斷專行——共產黨書記長スターリン——資本主義國家の破壊策に腐心  
——共產インターナショナルの成立

(三) ソ聯邦政府の首腦者……………一八〇

スターリン——ソヴェート人民委員會議長者モロトフ——カカノウイツチ——カリ  
ニン——リトヴィノフ——クイブイシエフ——オルジヨニキーゼ

(四) 赤軍幹部の主要分子……………一八八

ウオロシロフ——ブヂヨンヌイ——ウシシリヒト——カーメネフ——エイデマン  
——ブリユツヘル

### 四、スターリンとソヴェートの陸海軍



(一) スターリンの生涯 1.....一九七

鐵の人スターリン——腕白時代の秘密性——戰略家としての彼——神學校に學ぶ——革命運動——粗野な性格——ロベスピエールと彼——ソ聯の結成——肅清事件——威力と權力

(二) スターリンの生涯 2.....二〇一

謎の影武者が七人——全社會主義者の知能の源泉——スターリンの偶像化——スターリンの妻——不屈の實行力と強靱な精神力——世界革命は東方で——スターリンの誤算——ソ聯邦の崩壊へ

(三) ソヴェートの陸軍.....二一〇

ソ聯邦の陸軍——兵役義務の憲法——日本と同じく國民皆兵——赤色陸軍の服役年限——正規軍と民兵軍——ゲ・ペ・ウ軍——ツユウ軍親衛兵——國防航空化學協會と少年少女義勇軍——全赤軍の編制配置——モスクワ軍管區——レニングラド軍管區——北コーカサス軍管區——白露軍管區——シベリア軍管區——極東特別軍——中央亞細亞軍管區——獨立コーカサス軍管區——狙撃師團——聯隊編制——騎兵戰——赤色砲兵團——軍團砲兵——特別砲兵師團——技術兵團——戰車數——裝甲機械化兵團

(四) ソヴェートの海軍.....二二三

現在の海軍力は問題にならぬ——赤色海軍の誕生——赤色艦隊最初の大演習——五十萬噸の大海軍建設——バルチック海と日本海——バルチック艦隊、黒海艦隊、北洋艦隊、極東艦隊——赤色海軍現有勢力——最近の黒龍江艦隊——潜水艦の建造

(五) ソヴェートの主力艦及び補助艦艇.....二二七

主力艦——帝政時代の戰艦が多い、フランスに差押へを食つたアレキシエフ將軍號——巡洋艦戰隊の花形プロフィンテル號——水雷戰隊——潜水艦——特殊艦艇——黒海艦隊の勢力——裏海艦隊の勢力——北洋艦隊の勢力

(六) ソヴェートの新兵器 1.....二三二

全部が優秀とは云へない——戰敗を招く弱點の存在——敗北的國民性——火焰放射器——めざましい火藥の進歩——歩兵の銃器——狙撃力——小銃と自動車小輕——銃機關銃——マキシム式重機關銃——各種の裝甲自動車——驅逐飛行機の防空鐵砲——照空燈——聽測器——各種の算定具——と對戰車防禦砲——四五ミリ加農砲偵察用戰車——輕戰車中戰車——重戰車——水陸兩用戰車——特殊戰車

(七) ソヴェートの新兵器 2.....二四〇

ロシアの新式野砲——列車砲、野砲、騎砲、山砲、十糧加農砲——榴彈砲——野戰



輕榴彈砲、重榴彈、攻城砲、臼砲——高射砲——タチヤンカ機關銃——ラバ式戦法  
——飛行機用機關銃——光學兵器と電気兵器

### 五、ソヴェートの化學戰

(一) ソヴェートの化學戰……………二四二

毒ガスの禁止問題——その惡魔的威力——化學戰部と化學戰特別研究委員會——常設部隊と化學聯隊及同獨立大隊——一般部隊にも毒ガスを裝備す——ソヴェートの國防飛行化學協會の概要——現行化學戰準備施設の大要——ポロシロフの毒ガス讚美

### 六、ソ聯の空軍

(一) ソヴェートの大空軍 1……………二四六

一代の名設計家——第二次五ヶ年計畫後の實勢力——米から航空技術の輸入——實戰の經驗——特殊待遇の空軍——航空擊滅戰と略略戰——目標の攻撃——壊滅した第一線機——イイ十五型、イイ十六型——水冷式の新戦闘機——偵察機エル五型、エルゼット——爆撃機エヌペー型、デーペー型——急降下爆撃機——水上機、ユムペー型、エルニ型——ソ聯の空輸事業——産業部門の飛行機——北極探險飛行——

グライダーの研究——兵員輸送の空中列車

(二) ソヴェートの大空軍 2……………二五一

航空界の發達——二十中隊から二百中隊へ——飛行機は日本の三倍——全航空部隊と空軍本部——伸びゆく戦闘爆撃隊——飛行中隊——大隊と一旅團の内容

### ノモンハン事件の眞記録

(一) ノモンハン事件の戦況……………二五六

陸軍省情報部發表の戦況要旨——ホロンバイル平原の一大會戰——十日間の死闘——ソ軍の機甲部隊——四ヶ月間の大激戰——燦たり日本精神——恨みは深しノモンハン——彼我兵力の懸絶

(二) ハルハ河畔の攻撃……………二五九

ソ聯正規軍の總出動——大和魂の發露——敵戦車の退却——火焰瓶を持った勇士——地雷を無限軌道に投込む——わが肉薄攻撃隊の死闘——〇〇砲隊長の活躍——手榴弾を持つて戦車に肉迫——ソ軍機械化部隊の全滅



(三) ノロ高地の雄結……………二七〇

晝間の猛攻撃——國境戦の戦況——火焰戦車の出現——斷じて行へば鬼神も避く——  
敵陣突破の夜襲戦——彈丸雨霰と降る——敵飛行機の爆撃と地上掃射——立體的  
機械化戦闘——皇軍獨特の軍刀銃劍の突撃戦——ソ軍怖るゝに足らず

(四) ノモンハン空中戦……………二七六

千二百機の敵機を叩き落す——世界未曾有の戦果——一機當千の空中戦士——捨身  
の戦法——撃墜されたイ十六、イ十五號機——逃腰のソ聯空軍——落下傘降下——  
ソ空軍の全滅

# 日本と世界大動乱



## 一、日米英火蓋を切る

### (一) あの朝の重大発表

米英軍と戦闘状態に入れり——鐵石の決意——屠れ米英わられの敵だ——米大  
使と英大使の招致

はた／＼と羽音をたて、二羽の白い鳩が二重橋下のお濠をとびたつた。

大本營陸海軍部發表(十二月八日午前六時)帝國陸海軍は今八日未明西太平洋において米、  
英軍と戦闘状態に入れり。



白い鳩がとびたつたのは重大発表のあつた實にその瞬間のことであつた。

この朝、宮城前に一番乗りしてはるかに至尊に向ひ奉り土下座したのは、上野の泰東商業學校と深川の修徳商業學校の、二百名の勤勞奉仕隊であつた。

「うゝむ」

と、路ゆく人たちはいづれも大きく唸つてゐる。そして、

「オイ、やつたぞ」

と、口々から、或ひは齧詰めの出勤電車の中から、決意のどよめきを、一億一心の合言葉がいまぞ斷乎として發したのである。うら若い産業戰士が輝く眼を見交して、しつかりと手を握り合ひ、その傍を勤勞奉仕の車をひく中學生等が行くと、

「學生諸君、頼むぜ」

「やるよ、しつかりやるよ」

何かは知らぬ涙が滾れさうなのをグツとこらへて牽く手に車が滑つてゆく。蜿蜒と職場に急ぐ人々の鐵石の決意を眉宇に力強い進軍だ。

戸毎々々から流れ出す臨時ニュース「帝國は忍び難きを忍び……」徳、人すべてが、

「さうだ、それでいゝのだ」

と、うなづきながら頬は紅潮する。やうやくわれらの胸も燃える。號外の鈴の音は、勇ましく天空にひびき、民草の熱血とともに遠くこだまする。號外の鈴の音もいつしかぱつたり杜絶えると、

「賣つてるこつちもけふばかしは武者ぶるひが出たぜ」

と、號外賣りのお爺さんが述べ懐する。號外は見事に賣切れたのだ。

宮城へとまた戻る。いつもの勤勞奉仕へと夜明けに家を出た學生等はラジオと號外に胸を沸かせて玉砂利に額いてゐたが、やがて立去つた。と、つゞいて會社員がくる。また、學生が、官吏が、女事務員が、小學生が、老幼男女がすべて低く／＼頭を大地につけてゐる。決意を固めたのである。

十二月八日午前十一時五十分、左の如き發表があつた。

〔大本營陸海軍發表〕（八日午前十一時五十分）わが軍は陸海緊密なる協同の下に今八日早朝マレー半島方面の奇襲上陸作戰を敢行し着々戰果を擴張中なり。



また續いて、

〔大本營海軍部發表〕（八日午後一時）帝國海軍は本八日未明シンガポールを爆撃し大なる戦果を収めたり。

〔大本營海軍部發表〕（八日午後一時）帝國海軍は本八日未明ハワイ方面の米國艦隊並に航空兵力に對し決死的空襲を敢行せり。

おゝ火の玉を抱いて突進せんとするわが國民の總意はこゝに凝集して、この朝の何たる凜烈さぞ？ 山には雪、大地には霜おいて、國民の試煉を求める朝、皇軍はつひに起つたのだ。進め神國大日本！ 午前六時大本營發表から、同七時五分から十五分間の臨時重大閣議、東條英機首相の參内、そしてつひに同十一時、嚴かにも大詔が渙發せられたのである。やがてさしのぼる朝暾、日の神はほゝえましくかゞやきわたり、師走八日、歴史に残る朝は明けて、帝都はまさに日本晴れ、號外が飛散する、鈴がなる。ラジオが時ならぬ樂音を放送する。そして最初の午前七時の臨時ニュースだ。

暁を閉ぢれば西太平洋の海に空に征きに征くつはものゝ姿が浮ぶではないか。隱忍自重の兜の

緒も切れて、われら一億の民草は、皇國百千萬年の運命を切りひらくために、いかなる長期戦をも戦ひ抜かねばならないのだ。百年戦争なんのその、千年戦争覺悟の前だ。勝て、勝て、勝て！ 屠れ米英われらの敵だ！ この戦ひなにがなんでもやりぬくぞ！ 思はず叫ぶ胸のうち、赤子の群はやがて宮城前へ、明治神宮へ、靖國神社へ、決死の祈願である。

この日の滑稽なエピソードを御愛嬌までに記しておく。

傲岸なグルー・アメリカ大使が東郷外相に招致されて麴町三年町の外相官邸に駈けつけたのは午前七時半であつた。

うす茶の大柄なオーバーに、白つぼいねずみ色のソフト、こうした瀟洒ないでたちで、いつものおだやかななかにも人を食つたやうな表情を緊張にひきつらして、あたふたと官邸二階の客室に上つた。

東郷外相は昨夜二時間しか眠つてゐなかつた。

が、六時にはもう床を蹴り、モーニングに着かへると島津秘書官にアメリカ大使館を呼び出させたのだつた。



この二人が朝の光のさしこむ客室のソファアに相對して坐つた瞬間、海のかなたワシントンでは野村、來栖兩大使が、ハル國務長官を訪問し、過去九ヶ月にわたる日米交渉を清算する帝國の「對米通牒」を手交してゐたのである。——同じものがいま大型の封筒におさめられて、東郷外相からグルー大使に手渡された。

介添え役の加瀬アメリカ局一課長の蒼い顔がけさはまた一しほ冴えかへつて清澄だ。が、十數分間の東郷・グルー對談が終ると、加瀬局長は、急に表情をくづして、客室から廻り階段をニコやかに老大使を送り出してきた。平生「太平洋の平和のために全生涯を捧げつくす」と語つてゐたこのグルー大使も、血迷ふホワイト・ハウスの犠牲となつてつひにいまその使命の終結を迎へなければならなくなつたのだ。

外相にも送られ、自動車のドアをあけるこの悲劇の大使の頭髮は雪のやうに白く、強い度の眼鏡の奥にいつもはけつて見られなかつたイラ／＼した光が苦つぽく走つてゐた。

そして音もなく自動車は走り去つた。

つゞいて同八時クレーギー英大使が、黒いソフトに黒のオーバーの喪服のやうな服装であたふ

たと飛びこんで來た。

「對米通牒」と同じ内容の「對英通牒」が参考として東郷外相から提示されたのだが、その封筒をむきだしのまゝ小脇にかゝへて出てくる孤影悄然たるクレーギー英大使の態度も、玄關に送り迎への外務屬がびつくりするほどつゞけんどのものであつた。

## (11) 帝國政府の對米英通牒

中外に開戦理由を闡明——帝國政府の對米英通牒

日本の米英に對する最後通牒は今後は、獨自の見解においても大東亞新秩序建設の目的達成のため、斷乎自主的行動を開始すべく決意したからにほかならないのである。日本は、その開戦理由として、左の五項にわたつて堂々と中外に闡明してゐる。即ち、

一、日米交渉における米國の原則は架空の理念にして多邊的不可侵條約のごとき舊態依然たる構想で東亞の實情と遊離してゐる。

二、英米の帝國主義的搾取が東亞の禍根であつて佛印の共同保障案またその野望の暴露に過ぎ



ぬ。

- 三、援蔣行爲の依然たる繼續は斷じて默視し得ず。
  - 四、英米が敵性諸國家群と通謀日支相鬪はしめんとする策動を排す。
  - 五、英米の經濟壓迫は武力にも増して卑劣きはまるものである。かくして過去八ヶ月間太平洋の平和維持確立のため絶えまなき努力と忍耐とをしてきた帝國政府の希望といふものはつひにうしなはれて、こゝに米英兩軍と戰鬪状態に入つたのであるが、その責任はすべて米英側に存することは勿論のことである。
- この前古未曾有の大東亞戰に關し外務省では十二月八日午前八時半通牒全文および交渉經過を公表してゐるから、戰史の重要記録としてこゝに全文を掲げておきたい。

### 帝國政府の對英米通牒

覺 書

一、帝國政府はアメリカ合衆國政府との間に友好的諒解を遂げ兩國共同の努力により太平洋地

域における平和を確保し、もつて世界平和の招來に貢獻せんとする眞摯なる希望に促され本年四月以來合衆國政府との間に兩國々交の調整増進並びに太平洋地域の安定に關し誠意を傾倒して交渉を繼續し來りたるところ過去八月に互る交渉を通じ合衆國政府の固持せる主張並びにこの間合衆國および英帝國の帝國に對し執れる措置につきこゝに卒直にその所信を合衆國政府に開陳するの光榮を有す。

二、東亞の安定を確保し世界の平和に寄與し以て萬邦をして各その所を得しめんとするは帝國不動の國是なり、さきに中華民國は帝國の眞意を解せず不幸にして支那事變の發生を見るに至れるも、帝國は平和克服の方途を講ずると共に戰禍の擴大を防止せんがため終始最善の努力を致し來たれり、客年九月帝國が獨伊兩國との間に三國條約を締結したるもまた右目的を達成せんがために外ならず。

然るに合衆國および英帝國はあらゆる手段を竭し重慶政權を援助して日支全面和平の成立を妨礙し東亞の安定に對する帝國の建設的努力を控制せるのみならず、或ひは蘭領印度を牽制し、或ひは佛領印度支那を脅威し帝國とこれ等諸地域とが相携へて共榮の理想を實現せん



とする企圖を阻害せり。殊に帝國が佛國との間に締結したる議定書に基き佛領印度支那共同防衛の措置を講ずるや、合衆國政府および英國政府はこれを以て自國領域に對する脅威なりと曲解し、和蘭國をも誘ひ資産凍結令を實施して帝國との經濟斷交を敢てし、明かに敵對的態度を示すと共に帝國に對する軍備を増強し帝國包圍の態勢を整へ、以て帝國の存立を危殆ならしむるが如き情勢を誘致するに至れり。右に拘らず帝國總理大臣は本年八月事態の急速收拾のため合衆國大統領と會見し兩國間に存在する太平洋全般に互る重要問題を討議検討せんことを提議せり、しかるに合衆國政府は右申入れに主義上賛同を與へながらこれが實行は兩國間重要問題に關し意見一致を見たる後とすべしと主張して譲らず。

三、よつて帝國政府は九月二十五日從來の合衆國政府の主張をも十分考慮のうへ米國案を基礎としこれに帝國政府の主張を取入れたる一案を提示し論議を重ねたるが、双方の見解は容易に一致せざりしを以て現内閣においては從來交渉の主要難點たりし議問題につき帝國政府の主張を更に緩和したる修正案を提示したる交渉の妥結に努めたるも、合衆國政府は終始當初の原案を主張し協調的態度に出でず、交渉は依然滯滞せり、こゝにおいて十一月二十日に至

り帝國政府は兩國國交の破綻を回避するため最善の努力を盡す趣旨を以て樞要かつ緊要の問題につき公正なる妥結を圖るため前記提案を簡單化し、(一)兩國政府において佛印以外の南東アジアおよび南太平洋地域に武力進出を行はざる旨を確約すること、(二)兩國政府において蘭領印度においてその必要とする物資の獲得が保障せらるる様相互に協力すること、(三)兩國政府は相互に通商關係を資産凍結前の状態に復歸すること、合衆國政府は所要の石油の對日供給を約すること、(四)合衆國政府は日支兩國の和平に關する努力に支障を與ふるが如き行動に出でざること、(五)帝國政府は日支間和平成立するか又は太平洋地域における公正なる平和確立するうへは現に佛領印度支那に派遣せられざる日本軍隊を撤退すべく又本了解成立せば現に南部佛領印度支那に駐屯中の日本軍はこれを北部佛領印度支那に移駐するの用意あること等を内容とする新提案を提示し、同時に支那問題については合衆國大統領がさきに言明したる通り日支間和平の紹介者となるに異議なきも日支直接交渉開始のうへは合衆國において日支和平を妨礙せざる旨を約せんことを求めたるが、合衆國政府は右新提案を受諾するを得ずとなせるのみならず援蔣行爲を繼續する意思を表明し、次で更に前記の言明に拘



らず大統領のいはゆる日支間和平の紹介を行ふの時機なほ熟せずとてこれを撤回し、遂に十一月二十六日に至り偏に合衆國政府が從來固執せる原則を強要するの態度を以て帝國政府の主張を無視せる提案をなすに至りたるが右は帝國政府の最も遺憾とするところなり。

四、そもく本件交渉開始以來帝國政府は終始専ら公正かつ謙抑なる態度を以て銳意妥結に努め履難きを忍びて能ふ限りの讓歩を敢てしたるが、交渉上重要事項たりし支那問題に關しても協調的態度を示し合衆國政府の提唱せる國際通商上の無差別待遇原則遵守については本原則の世界各國に行はれんことを希望し、かつその實現に順應してこれを支那をも含む太平洋地域に適用するやう努力すべき旨を表明し、なほ支那における第四國の公正なる經濟活動は何等これを排除するものにあらざることを闡明せるが、更に佛領印度支那よりの撤兵についても情勢緩和に資するがため前述の如く南部佛領印度支那よりの即時撤兵を進んで提議する等極力妥協の精神を發揮せるは合衆國政府のつとに諒解するところなりと信ず。

しかるに合衆國政府は常に理論に拘泥し現實を無視しその抱懐する非實際的原則を固執して何等讓歩せず、徒らに交渉を遷延せしめるは帝國政府の諒解に苦しむところなるが特に左

記諸點については合衆國政府の注意を喚起せざるを得ず。

(一) 合衆國政府は世界平和のためなりと稱して自己に都合なるは諸原則を主張しこれが採擇を帝國政府に迫れるところ世界の平和は現實に立脚し且つ相手國の立場に理解を持し相互に受諾し得べき方途を發見することによりてのみ具現し得るものにして、現實を無視し一國の獨善的主張を相手國に強要するが如き態度は交渉の成立を促進する所以のものにあらず。今般合衆國政府が日米協定の基礎として提議せる諸原則については右の中には帝國政府として趣旨において賛同に吝ならざるものもあるも合衆國政府が直ちにこれが採擇を要望するは世界の現状に鑑み架空の理念に驅らるるものといふの外なし。

なほ日、米、英、支、蘇、蘭、泰七國間に多邊的不可侵條約を締結するの案の如きも徒らに集團的平和機構の舊構想を追ふの結果東亞の實情と游離せるものと云ふの外なし。

(二) 合衆國政府今次の提案中に「兩國政府が第三國と締結しをる如何なる協定も本取極の根本目的たる太平洋全域の平和確保に矛盾するが如く解釋せられざることにつき合意す」とあるは即ち合衆國が歐洲戰爭參入の場合における帝國の三國條約上の義務履行を牽制せんとす



る意圖を以て提案せるものと認めらるゝを以て右は帝國政府の受諾し得ざるところなり。

由來合衆國政府はその自己の主張と理念とに眩惑せられ自ら戦争擴大を企圖しつゝありと謂はざるを得ず、合衆國政府は一方太平洋地域の安定を策し自國の背後を安固となしつゝ、他方英帝國を援け歐洲新秩序建設に邁進する獨伊兩國に對し自衛權の名の下に進んで攻撃を加へんとするものなるが、右は太平洋地域に平和的手段により安定の基礎を築かんとする幾多の原則的主張と全然矛盾背馳するものなり。

(三) 合衆國政府はその固持する主張において武力による國際關係處理を排撃しつゝ一方、英帝國等と共に經濟力による壓迫を加へつゝあるところかゝる壓迫は場合によりては武力壓迫以上の非人道的行爲にして國際關係處理の手段として排撃せらるべきものなり。

(四) 合衆國政府の意圖は英帝國その他の諸國を誘引し支那その他東亞の諸地域に對しその從來保持せる支配的地位を維持強化せんとするものと見るのほかなきところ東亞諸國が過去百有餘年に互り英米の帝國主義的搾取政策の下に現状維持を強ひられ兩國繁榮の犠牲たるに甘んぜざるをえざりし歴史的事實に鑑み右は萬邦をして各その所を得しめんとする帝國の根本

國策と全然背馳するものにして帝國政府の斷じて容認する能はざるところなり。

合衆國政府今次提案中佛領印度支那に關する規定は正に右態度の適例と稱すべく、佛領印度支那に關し佛國を除き日、米、英、蘭、支、泰六國間に同地域の領主主權の尊重並びに貿易および通商の均等待遇を約束せんとするは同地域を六國政府の共同保障の下に立たしめんとするものにして、佛國の立場を全然無視せる點は暫く措くも東亞の事態を紛糾に導きたる最大原因の一たる九國條約類似の體制を新たに佛領印度支那に擴張せんとするものと觀るべきものにして帝國政府として容認し得ざるところなり。

(五) 合衆國政府が支那問題に關し帝國に要望せるところは或ひは全面撤兵の要求と云ひ、或ひは通商無差別原則の無條件適用と云ひ、いづれも支那の現實を無視し東亞の安定勢力たる帝國の地位を覆滅せんとするものなるところ、合衆國政府が今次提案において重慶政權を除く如何なる政權をも軍事的政治的かつ經濟的に支持せざることを要求し、南京政府を否認し去らんとする態度に出でたるは交渉の基礎を根柢より覆すものといふべく、右は前記援蔣行為停止の拒否とともに合衆國政府が日支間に平常状態の復歸および東亞平和の回復を阻害す



るの意思あることを實證するものなり。

(五) これを要するに今次合衆國政府の提案中には通商條約締結、資産凍結令の相互解除、圓弗爲替安定等の通商問題乃至支那における治外法權撤廢等本質的に不可ならざる條項なきにあらざるも、他方四年有餘に互る支那事變の犠牲を無視し帝國の生存を脅威し權威を冒瀆するものあり、従つて全體的に觀て帝國政府としては交渉の基礎として到底これを受諾するを得ざるを遺憾とす。

(六) なほ帝國政府は交渉の急速成立を希望する見地より日米交渉妥結の際には英帝國その他の關係國との間にも同時調印方を提議し合衆國政府も大體これに同意を表示せる次第あるところ、合衆國政府は英、濠、蘭、重慶等としばしば協議せる結果、特に支那問題に關しては重慶側の意見に迎合し前記諸提案をなせるものと認められ、右諸國は何れも合衆國と同じく帝國の立場を無視せんとするものと斷ぜざるを得ず。

(七) 惟ふに合衆國政府の意圖は英帝國その他と苟合策動して東亞における帝國の新秩序建設による平和確立の努力を妨碍せんとするのみならず、日支兩國を相闘はしめ、以て英米の利

益を擁護せんとするものなることは今次交渉を通し明瞭となりたるところなり、かくて日米國交を調整し合衆國政府と相携へて太平洋の平和を維持確立せんとする帝國政府の希望は遂に失はれたり、よつて帝國政府はこゝに合衆國政府の態度に鑑み今後交渉を繼續するも妥結に達するを得ずと認むるのほかなき旨を合衆國政府に通告するを遺憾とするものなり。

### 日米交渉の經過

#### 外務省公表

、日米間の交渉は本年春頃よりワシントンにおいて開始せられ四月中旬米國政府より非公式試案の提示ありたるが、右提案の内容は、(一)兩國の抱懷する國際觀念および國家觀念、(二)歐洲戰爭に對する態度、(三)支那事變に對する態度、(四)日米兩國間の通商、(五)太平洋地域における經濟活動、(六)太平洋地域の政治的安定、(七)フィリッピン中立化等の項目を含みこれを太平洋全般の問題に關する一般的協定の基礎たらしめんとするものなり。本案には日本政府において受諾し得ざる點あり。



同案中米國政府は日獨伊三國同盟條約に關しては米國が自衛に名を藉りて歐洲戰爭に參入する場合帝國が太平洋方面において米國の安全を脅威せざることにつき保障を求め又支那事變に關しては米國の容認する基礎條件をもつて日支和平を仲介せんとせり。

依つて帝國政府は五月中旬、三國條約についてはわが軍事援助義務は同條約規定の場合に發動する旨を明かにし又支那事變については米國は近衛三原則、日支基本條約および日滿華共同宣言を了承し、わが善隣友好政策に信頼して重慶に對し和平を勸告すべく重慶において右勸告に聽從せざれば重慶援助中止を申入れありたき旨を要求する等の修正を加へたる對策を提出し交渉を重ねたるところ六月下旬米國政府より前記四月案に比し米國の主張を更に具體的ならしめたる修正案の提示あり、爾後交渉は同案を繞り繼續せられたり。

二、然るに七月第三次近衛內閣成立後間もなく帝國が佛國との間に締結したる議定書に基き佛領印度支那共同防衛の措置を講ずるや米國は帝國に對し資産凍結を行ひ、經濟的壓迫を加へ來れるが帝國は依然平和的解決の希望に促され、八月近衛首相よりルーズヴェルト大統領に對しメッセージをもつて帝國政府の平和的意圖を開陳すると共に危局救済のためには一刻も

速に兩國首腦者會合の必要なる所以を申送たり、これに對し米國は主義上賛意を表したるも交渉中の懸案特に三國條約問題、在支日本軍隊駐留問題および國際通商差別待遇問題に關し先づ合意成立するに非ざればこれを實行に移し難しとの態度を固執し且つ前記六月案を固持して讓歩せざりしによりわが方は九月六日局面打開策を提示し、次で同二十五日に至りこれ等わが方の主張に前記米國側六月案を參酌せる新案を提出し交渉を重ねたるが、十月二日米國はかねてその國際關係の基準とし固持し來れる四原則即ち、(一)一切の國家の領土保全および主權尊重、(二)他國の内政不干涉、(三)通商上の無差別待遇、(四)平和手段によるの外太平洋における現状の不變更なる諸原則の適用に關する帝國の意圖並に前記三問題に關し帝國政府の見解を更に明示せんことを要求し、交渉はこれがため難關に逢着するに至り遂に停頓のまゝ十月中旬第三次近衛內閣は挂冠せり。

かくの如く、兩國の見解對立を來したる所以のものは米國が國際關係處理につき獨善的見解に立脚せる架空の原則的信念を強硬に固執し東亞の實情を顧みずこれをその儘支那その他に適用せんことを主張しをること起因するものにして米國にして右の態度を固持するにお



いては本交渉の妥結は極めて困難なる状況にありたり。

三、現内閣においては太平洋の平和を顧念するため交渉を繼續することに決し公正なる基礎において妥結を圖らんとする見地より當時交渉の主要問題たりし三事項につき、(一)三國條約に關聯する自衛權問題については米國において自衛權の觀念を濫に擴大せざる旨明確にすることを要求し、(二)通商上の無差別待遇原則については右原則が全世界に適用せらるゝに於いては右が支那を含む全太平洋地域に適用せらるゝことに異議なきこととし、(三)撤兵問題については支那事變のため支那に派遣せられたる日本軍隊の一部は日支間平和成立後一定地域に所要期間駐屯すべく爾餘の軍隊は平和成立と同時に日支間協定に従ひ撤去を開始し治安確立と共に撤去すべく又佛印に派遣せられざる軍隊は支那事變解決するか又は公正なる東亞の平和確立するにおいては直にこれを撤去すべしとの案を得、右案により交渉を續行せり、この間政府は日米交渉成立の際は關係事項につき英國その他の諸國とも同時に了解の成立方米國側において斡旋すべきことを要望し尙本件交渉につき萬全の努力を拂はんがため來栖大使を米國に急派し野村大使を援助せしむることとせり。

然るに米國側は日米協定成立せば帝國は三國條約を保持するの要なかるべく右は消滅若くは死文となることを希望する旨反覆力説し通商無差別原則は無條件に支那に適用することを主張し列國共同の下に支那の經濟政策に關する日米共同宣言案を提出せり。依つて帝國政府は右に對し通商無差別原則に就ては帝國は同原則が全世界に適用せらるゝことを希望し右希望の實現に順應して支那に對しても同原則の適用を承認すとの趣旨を答ふるに共に右共同宣言案については支那共同開發提案は支那國際管理の端緒となる虞れあるを以て受諾し難きことを述べ米國側に撤回を求めたり。

四、十一月十七日以來野村大使は來栖大使と共に大統領および國務長官と會見を重ね交渉急速妥結の要あることを力説せるところ大統領は支那問題については日支間和平の「紹介者」たるの用意ありと述べ又國務長官は帝國がドイツと提携しを限り日米交渉は至難なるを以て先づこの根本的困難を除去する必要ある旨を強調し兩三回に互り論議を重ねたるも難關は依然として、三國條約、國際通商無差別待遇問題および支那問題にあること明かとなれるを以て帝國政府は兩國國交の破綻を回避するため最善の努力を竭さんとする考慮に基き樞要且つ



緊急の問題につき公正なる妥結を圖るため十一月二十日左の新提案を提出せり。

(一) 日米兩國政府はいづれも佛印以外の南東亞細亞および南太平洋地域に武力的進出を行はざることを確約す。

(二) 日米兩國政府は蘭領印度においてその必要とする物資の獲得が保障せらるるやう相互に協力するものとす。

(三) 日米兩國政府は相互に通商關係を資産凍結前の状態に復歸すべし、米國政府は所要の石油の對日供給を約す。

(四) 米國政府は日支兩國の和平に關する努力に支障を與ふるが如き行動に出でざるべし。

(五) 日本國政府は日支間和平成立するか又は太平洋地域における公正なる平和確立する上は現に佛領印度支那に派遣せられをる日本軍隊を撤退すべき旨を約す。

日本國政府は本了解成立せば現に南部佛領印度支那に駐屯中の日本軍はこれを北部佛領印度支那に移駐するの用意あることを闡明す。

右に對し國務長官は帝國が三國條約との關係を明かにし平和政策採用を確言するに非ざれ

ば右第四項を受諾し援蔣行爲を停止すること不可能なりといひ又大統領のいはゆる日支間和平の「紹介者」たらんとの提案も日本の平和政策採用を前提とするものなる旨を述べ第四項につき大なる難色を示したるをもつて、わが方は兩大使をして國務長官に對し大統領の紹介により日支直接交渉開始せらるる場合和平の紹介者たる米國が依然援蔣行爲を繼續せんとするは平和成立を妨害するものにしてその態度に矛盾あることを指摘し米國政府の反省を要請せしめたり。

五、然るにこの間米國政府は英濠蘭および重慶代表と協議する所あり、十一月二十二日國務長官は兩大使に對し南部佛印よりの撤兵のみにて南太平洋方面の急迫せる情勢を緩和するに足らずとする旨並に大統領のいはゆる日支間の紹介は時機未だ熟せずと思考する旨を述べたり。

米國政府はその後も前記諸代表と協議を重ねをりたるが二十六日國務長官は兩大使に對し二十日のわが提案については慎重研究を加へ關係國とも協議せるも遺憾ながら同意し難しとて今後の交渉の基礎案として大要左の如き案を提出せり。即ち、



(一) 日米相互間において實際に適用すべき根本的原則として政治關係においては前述の四原則を再述せるが唯その中第四點を紛争の防止および平和的解決並に平和的方法および手續による國際情勢改善のため國際協力および國際調停遵據の原則と改め經濟關係においては主として前記政治的原則の第三通商上の機會均等および平等待遇の原則を敷衍し。

(二) 日米兩國政府の採るべき措置として、(イ)日米政府は英、蘭、支、蘇、泰と共に多邊的不可侵條約の締結に努む、(ロ)日米兩國政府は日、米、英、支、蘭、泰國政府との間に佛印の領土主權を尊重し佛印の領土主權が脅威さるゝ場合必要なる措置に關し即時協議すべき協定の締結に努む、右協定締結國は佛印における貿易および經濟關係において特惠待遇を排除し平等の原則確保に努む、(ハ)日本政府は支那および佛印より一切の軍隊(陸、海、空および警察)を撤收すべし、(ニ)兩國政府は重慶政府を除く如何なる政權をも軍事的、政治的、經濟的に支持せず、(ホ)兩國政府は支那における治外法權(租界および團匪議定書に基く權利を含む)を拋棄し他國にも同様の措置を懲慝すべし、(ヘ)兩國政府は互惠的最惠國待遇および通商障壁低減の主義に基く通商條約締結を商議すべし(生糸は自由

品目に置く)(ト)兩國政府は相互に資産凍結令を廢止す。(チ)圓弗爲替安定につき協定し兩國それゝ半額づゝ資本を供給す。(リ)兩國政府は第三國と締結しをる如何なる協定も本協定の根本目的即ち太平洋全地域の平和確保に矛盾するが如く解釋せられざることにつき同意す、(ヌ)以上の諸原則を他國にも懲慝すること。

を提案せり、右につき兩大使はその不當なるを指摘し強硬なる應酬をなせるが國務長官は讓歩の色を示さず、越えて二十七日大統領は兩大使に對し今なほ日米交渉の妥結を希望せざるに非ざるも暫定的方法により局面打開を計るは兩國の根本主義方針が一致せざる限り結局無効と思考する旨を述べたり。

よつて帝國政府は米國に對し十一月二十日のわが提案は最も公正なる基礎において從來の彼我主張を十分考慮のうへ作成せられたるものなるにも拘らず米國がこれに同意するを得ずとなし、東亞の現實を無視せる新案を提出し殊に支那問題に關しその態度を豹變せるは米國の誠意を疑はしむるものなるにつき米國側において反省せんことを要求せるが、國務長官は從來の態度を固執するのみにて交渉の本質的問題につき更に商議を進めんとする色なく、越



えて十二月二日に至りウエルズ次官は大統領の命なりとて情報によれば最近佛印方面において日本軍隊の移動増強行はれをりとして右に關する帝國の眞意を照會越したり。

よつて帝國政府は右は最近佛印と支那との國境附近において支那軍が頻りに蠢動しをるに鑑みこれに備へんがため北部佛印において一部兵力の増強を行ひたるものなるところこれと關聯して自然南部においても部隊の移動が行はれたるものなる旨を回答したるがこの間米國政府は對日包圍陣を急速に増強すると共に輿論を指導し交渉決裂の場合の地固めをなすに至れり。

六、從て前記米國提案に對し帝國政府は十二月七日附を以て別添「對米覺書」を以てその態度を明にせり。

誰々の短歌の中に「しきしまの大和ごころを人間はば蒙古の使節斬りし時宗」といふのがあ  
る。名歌ではないとしても、六百年前北條時宗の決意そのまゝが、東條首相の決斷となつて發揮  
されたのである。

二千六百年の光輝ある歴史と、一億國民の運命とをかけた決戰の幕は、いまこそつひに切つて  
落されたのだ。世界の全民族を驅つて貪婪飽くなき物質と金權の奴隸たらしめようとしつゝある  
英米に對するわが膺懲戰は開始されたのである。

神代から承けついで天孫民族の血は、脈々としてわれらの血管にながれてゐる。ユダヤ財閥の  
手先きでしかあり得ないルーズヴェルト政權は最後まで日本を物質的打算的に觀測し、よもや立  
ち上りえまいとあまく見くびり、傲慢無禮の限りをつくした。かれらの腐つたこゝろには光輝あ  
るわが國體はわからないのである。かれらの曇つた目には日本民族の眞精神は見えなかつたので  
ある。いまこそおもひ知つたであらう。

### (三) 大 詔 渙 發

宣戰布告の大詔渙發——東條首相の政府聲明内容——宣戰の意義

この日、畏くも、

大元帥陛下には霜凍る早曉にもかゝはらせられず、午前二時御起床の上、御軍装も凛々しく大



奥より宮中表御座所に出御、同三十分緊急参内した東郷外相から日米會談の結果を三十分餘にわたつて御聴取遊ばされた。

陛下には火の氣もなき御座所において深夜の奏上を聴し召されたことは御稀のことである。外相と相前後して木戸内府、百武侍従長らも参内、深夜から未明にかけての大内山には緊張の氣みなぎり引續き午前七時七分には原樞相以下各顧問官、同二十二分には軍裝に緊張の東條首相をはじめ、各閣僚が續々参内、臨時樞密院會議が開催されるなど、長くも陛下には御起床あそばされて以來、御軫念のあまり、御一睡もあらせられぬとうけたまはるもまことに恐懼に堪へない次第である。

而してこの日、長くも宣戰布告の大詔を渙發あらせられた。情報局は、左のごとく發表した。  
〔情報局發表〕（八日午前十一時四十分）唯今アメリカ及びイギリスに對し宣戰布告の大詔が下されました。

## 詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス  
朕茲ニ米國及英國ニ對シ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ  
抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ  
今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇護ヲ恃ミテ兄弟尙未夕牆ニ相閱クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有



ラユル妨害ヲ與へ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ  
朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精  
神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却テ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈  
從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ  
帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲驟然起ツテ一切ノ障礙  
ヲ破碎スルノ外ナキナリ  
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シ  
テ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

昭和十六年十二月八日

各大臣副署

この戦争たるや帝國の生命と權威を蹂躪しようとする米英政府の東亞攪亂の迷夢を覺醒せしめ

るためには残された唯一の途であり、帝國は米英の指導する對日包圍陣を打破し初めて生存と權  
威を確保し、事變處理と大東亞共榮圈の確立を達成しうるのである。軍官民一體となつて國難を  
突破する用意はまつたく成つたのである。

詔勅を拜し奉るや、東條首相は、同日午後零時二十分ジラオによつて左の如き政府聲明を發表  
した。

### 政府聲明内容

恭しく宣戰の大詔を奉戴し茲に中外に宣明す。抑々東亞の安定を確保し、世界平和に貢獻する  
は、帝國不動の國是にして、列國との友誼を敦くし、この國是の完遂を圖るは、帝國がもつて  
國交の要義となす所なり。

然るに、曩に中華民國は、我實意を解せず徒らに外力を恃んで帝國に挑戦し來り、支那事變の  
發生を見るに至りたるが、御稜威の下、皇軍の向ふ所敵なく、既に支那は重要地點悉く我手に  
歸し、同憂具眼の士國民政府を更新して帝國は之と善隣の誼を結び、友好列國の國民政府を承



認するものすでに十一ヶ國の多きに及び、今や重慶政權は、奥地に殘存して無益の抗戰を續くるに過ぎず、然れども英米兩國は東亞を永久に隸屬的地位に置かんとする頑迷なる態度を改むるを欲せず、百方支那事變の收結を妨碍し、更に蘭印を使嫉し、佛印を脅威し、帝國と泰國との親交を裂がむがため、策動至らざるなし、仍て帝國とこれ等南方諸邦との間に共榮の關係を増進せむとする自然的要求を阻害するに寧日なし、其の狀恰も帝國を敵視し帝國に對する計畫的攻撃を實施しつゝあるものゝ如く、遂に無道にも、經濟斷交の舉に出づるに至れり。凡そ交戰關係に在らざる國家間に於ける經濟斷交は、武力に依る挑戰に比すべき敵對行爲にして、それ自體黙過し得ざる所とす。然も兩國は更に與國を誘引して帝國の四邊に武力を増強し、帝國の存立に重大なる脅威を加ふるに至れり。

然るに米國は、徒らに架空の原則を弄して東亞の明々白々たる現實を認めず、その物的勢力を恃みて帝國の眞の國力を悟らず、與國と共に露はに武力の脅威を増大し、以て帝國を屈從し得べしとなす、斯くて平和的手段に依り、米國並に其の與國に對する關係を調整し、相携へて太

平洋の平和を維持せむとする希望とは全く失はれ、東亞の安定と帝國の存立とは方に危殆に瀕せり、事茲に至る、遂に米國及英國に對し宣戰の大詔は煥發せられたり、聖旨を奉體して洵に恐懼感激に堪へず、我等臣民一億鐵石の團結を以て蹶起勇躍し、國家の總力を擧げて征戰の事に従ひ、以て東亞の禍根を永久に芟除し聖旨に應へ奉るべきの秋なり。

宣戰布告とこの政府の聲明、民草はひとしく溜飲のさがるおもひがした。

宣戰布告は、日本では日清、日露と日獨戰爭以來二十八年ぶりに聞くそれであつた。では宣戰とは、一體どういふ意味をもつものであらうか。

宣戰とは相手國と戰爭狀態に在るといふことを、一方的に意思表示すれば、それが國際法上の宣戰で、たとひ兵力の衝突がなくとも戰爭の開始と認められてゐる。

このほか戰爭の開始は最後通牒に時限を明かにして解答をもとめ、應じないときは直に戰爭に入るといふ、宣戰を條件とした通牒を發する場合もあるが、この前例はまれにしかなく、ある點まであまりないと云つたはうがいゝ、むしろ第三の戰爭の意思をもつて、まづ戰鬪行爲を開始



しおもむろに宣戦する場合が多く、今次大戦でドイツが、ポーランド、英、佛、ソ聯などに對して行つたのもこの例である。

なほ、こんどの宣戦の大詔煥發前に、戦争の意志は外交使臣を通じて表示されてゐるから法的にはこれが宣戦となるわけである。

宣戦の場合一つ注意すべきことは、宣戦を行つた後なら實戦は行はなくても戦争状態は開始され、交戦國でなくては行ひ得ない種々の措置が取り得られることで、敵國人を必要に應じ保護收容したり、復仇行爲として敵國が不法行爲をした時は報復も出来るわけである。

前大戦で支那は一九一九年八月ドイツに對し宣戦を行ひ、一回も實戦をなさずに交戦國として講和會議に出席したやうないゝ例がある。こんど戦闘力をもたぬ反樞軸諸國もこの例に入るであらう。

なほ、宣戦と同時に外交使臣である大使や公使は、その特權を失ふが、安全に歸還する權利は有し、旅券を下付した國境或は占領區域を安全に通過出来る安導券といふものをわたすことになつてゐるが、交通機關のない場合はとくにその心配までしてやる必要なく、そこで中立國を介

して双方の使臣が交換されるといふ場合も生じて来る。現にアメリカは彼我の大使の交換を申込んで來てゐる。

## 二、ハワイ大海戦の全貌

### (一) 決死的大空襲

歴史的十二月八日早朝——荒鷲部隊の奇襲作戦——スル／＼とあがつたZ旗の信號——戦闘準備

日英米戦の劈頭、一億の人心を極度に驚喜せしめたのは、ラジオによる大本營海軍部發表の報道と、つゞいて報道された新聞ニュースであつた。

〔大本營海軍部發表〕（八日午後一時）帝國海軍は本八日未明ハワイ方面の米國艦隊並に航空兵力に對し決死的大空襲を敢行せり。



〔ホノル、讀賣新聞特電〕（至急報）日本空軍によるハワイ、眞珠灣の爆撃は偶々ハワイ駐屯アメリカ陸海軍の日曜勤務日に當り兵力が手薄であつたため完全に虚をつかれた觀があつた。日本空軍の爆撃のため眞珠灣上空には爆煙が立ちこめ空襲一時間、大爆撃の音が聞かれた。當地陸軍報道機關では「眞珠灣が日本空軍の爆撃をうけたがなほ詳細不明である」旨聲明した。

〔ニューヨーク七日發同盟〕 ホノル、よりのNBC放送によれば日本軍のホノル、爆撃は熾烈を極めてゐる。しかし、米國陸海軍は今なほ制海空權を握つてゐる。また日本軍の空襲は三時間近く繼續してゐると。

〔ワシントン七日發同盟〕 ルーズヴェルト大統領は日本飛行隊の攻撃はオアフ島のあらゆる軍事施設に向つて加へられた旨發表した。

〔ワシントン七日發同盟〕 ホワイト・ハウス發表によれば日本軍のオアフ島空襲による被害は甚大。

〔ニューヨーク七日發同盟〕 ホノル、よりのUP電によれば眞珠灣西方のバーバーポイント沖に日本軍を積載せる日本船の影が認められたと。

〔プエノスアイレス讀賣特派員發〕 日米開戦の報道は七日午後六時半前後、各放送局によつて放送されたが、眞珠灣の空襲ビックマン飛行場爆破戦艦オクラホマ號（二萬九千トン）の火災、シンガポールの急襲、ロンドン政府の受けた大衝撃などを洪水の如くプエノスアイレス市民の耳にぶち込んだ。

緒戦において日本海軍のために事實アメリカの大艦隊は、殲滅的大打撃を蒙つたのである。しかし、偽はらざるところ、正直なところ、あまりの大戦果にわれらはウソではないか、誤報では



ないかとしはし耳朶をうたがった。が、勝利はわれに、榮光燦たる歴史的十二月八日早朝、わが精銳荒鷲部隊は開戦の巨弾をいだいて曉のハワイ眞珠灣にアメリカ太平洋艦隊を奇襲し、一擧にして太平洋艦隊を全滅し去つたのだ。

世界驚倒のこの偉勳、戦史を飾るハワイ大海戦、なんといふ光輝、感激！

曉闇の強風について勇躍進發する壯烈な情景から勝利を祝福する爽やかな、南海の朝日を浴びて母艦にかへるまで——すべては皇國の興廢をこの一擧にかけ、生死を超越したあくなき海鷲魂の極致であり死闘であつた。

指揮官〇〇中佐は、眞珠灣一番乗りの大編隊群の指揮官で、同中佐によつてあの古今未曾有、全世界を震撼した大戦果の片鱗をきくことが出来たのは、われらの仕合せであつた。

その日、時いたる、決戦のときはいたる。沈黙の日本海軍が忍びに忍んだ堪忍袋の緒をきつて、いまだ世界の驕兒アメリカの頭上に天譴の一擧を叩きつけるときは來たのだ。

涯しなくひろがる太平洋の眞ツ只中を、航空母艦〇〇は決戦のときを求めて、一路東へくと進んでゐた。

靜かにキャビンに寝轉んでゐても、佳き星の下に海のみ民と生れたものゝよろこび、海鷲としてけふこの歴史の日を迎へた幸福が、熱いものとともにふつくと腹の底からこみあげてくる。

(さうだ！ 眞珠灣上空の華と散らう。まさにこれ男子の本懐、思ひのこすことなどさらにな

〇〇中佐はさう泌みくとおもつた。

「全員甲板に集合ツ！」

重い聲が艦内いづばいに響きわたつた。

いよく待ちに待つた攻撃命令が發せられたのだ。全員緊張に双頬をほてらせながら、甲板に整列した。

「わが部隊は只今よりオアフ島を攻撃せんとす」

一語々に力をこめた航空部隊指揮官の聲！

ピン／＼と張りのある聲が全員の腸にしみ透るやうにひびく、舷側に碎ける波音も、ひたと息をのむかと思はれる一瞬、その一瞬、橋頭高くスル／＼と翻つた旗は、あゝ乙旗だ。かつて日本



海の風を孕んで聖將います旗艦三笠の橋頭高くひるがへつたZ旗は、三十七年後のいまふたゞび、太平洋の海風に翻翻とはためいたのである。

はるかな南の風に崇高な大和民族の理想と決意を象徴するかのやうに、ハタ／＼と高鳴るZ旗！

かつてロシア東漸の野望を一舉に打ち砕いたこの旗のもとに、いまわれらは暴戻飽くなき米英撃滅、東亞解放、新世界創造の歩武を進めるのである。雄渾かぎりないこの使命、この誇り、皇國の興廢はまさにかゝつてわれらの双肩にあるのである。

ふり仰ぐ全員の瞳にはキラ／＼と熱い涙がひかつてゐた。

「各員粉骨碎身誓つてその任務を全うせよ」

感激にうちふるへる指揮官の訓辭は終つた。Z旗が静かにおろされると、われらの母艦は全速力で東へ／＼と驍進しはじめた。

ハワイへ！ 艦の速さがはつきり意識される速さである。天候はやゝ不良、艦内は急にいそがしくなつた。戦闘準備がはじまつたのだ。

## (II) 航空母艦から飛び立つ

決然たる攻撃姿勢へ——みんな絶好の爆撃目標——わが雷撃機隊魚雷をぶつ放す——物凄い艦列の水柱——感激の無電

十二月八日〇時〇分、出發命令はつひにくだつた。

「全員突撃せよ」

天候はあひかはらず最悪だ。太陽は死んだやうに灰色にどんよりと曇り、山をも呑むやうな長濤はうねり、母艦ははげしく左右に動揺した。

北東十七メートルの強風が吹き荒び、高度一五〇〇メートルから二〇〇〇メートルにかけて鉛のやうに密雲がとざしてゐる。日頃の演習が訓練だつたら飛行中止の状況だ。

しかし、少しばかりの風がなんだ。雲がなんだ。この日この朝を期してつゞけられてきた血の出るやうな猛訓練ではなかつたか。さうおもふと、全員は極度に緊張した。

午前〇時〇〇分出發のベルが鳴りひびいた。



「頼むぞ！」

整備員たちが贈つてくれた白鉢巻をキリリと額に巻いて座席につく——。

いつさいの感情は吹き消されて、訓練にでも出かける氣もちだ。一機、二機、三機——前後左右に動揺する飛行甲板からつき／＼に搭載機がとび立つてゆく。ほの暗い洋上で編隊を整へた一同は、機首を一路ハワイへ——。

ぴつたりと寄つてくる僚機の姿を見かへればじつに感慨無量であつた。

しかし、行手は渺茫たる太平洋、しかも長航〇〇マイルの航海の後であり、もし母艦の艦位に誤差があれば、全員はオアフ島に到着できないのだ。

——指揮官としてふとそんな不安もかすめた。

間もなく機上で莊嚴な日の出を迎へた。全機の搭乗者が頭をあげて世界史に一線を劃する燦然たる大日輪を仰いでゐる。ぞく／＼するやうな感激であつた。

しかし、下に依然として漠々たる密雲、南洋方面の海上なら普通三十マイルから五十マイル遠望がきくのだが、けふは殆ど見透しがきかないのであつた。

だが、ハワイは標高一千メートルの山を背負つてゐる。少くも到着前二十分ころにはその山の頂きがみえるはずだ。

さうおもつてじつと望遠鏡に瞳をこらしてゐる指揮官〇〇中佐の瞳のうちに、さつと、あきらけく見えるものがあつた。

突如、密雲の中にぼつかりと口をあいた眞珠灣の海岸線が、そこだけいまかすかに雲がきれ、晴れはじめてゐる。

「これぞ天佑神助」

思はず上體を乗り出して見おろす下にはゐる／＼。敵機が悠々と翼を休めてゐるではないか。

「今だ、全員突撃の時は今だ」

編隊は大きく轉回、各隊はそれぞれの任務に従つて或ひは高く、或ひは低く、決然たる攻撃姿勢に移つた。

爽やかな日曜の朝、眞珠灣はまだふかぶかと乳色の朝靄のなかに至つて暢氣さうに眠つてゐる



た。  
紺碧の港内は磨き粉で拭つたやうに穏かで敵艦の煙突からは一本のけぶりも立ちのぼつてはるなす。

整然たる兵舎の並列、山頂にはひ上るまつ白い自動車道路、ズラリと、海岸に並ぶ白塗りの重油タンク、みんな絶好の爆撃目標ならぬはない。

いや、それよりも目を拭つてよく見れば、連なる港内の岸近く二隻づゝ横に行儀よく並んでゐるのは、まさしく敵太平洋艦隊の全主力艦ではないか。

「今にみる」

と、見る間に早くもわが雷撃機隊が亂雲を截つてサツと一直線に突つこんでゆく。

まるで天から投げられた一本の鎖のやうだ。

眞珠灣は浅く狭く編隊の雷撃攻撃には、きはめて困難なため、雷撃機隊は単機になつてとびこんでゆく。

一機は海面スレ／＼に、他の一機は敵戦艦の胴ツ腹二、三百メートルまで接近してこゝぞとば

かりに魚雷をぶツ放した。決戦の第一弾は放たれたのだ。

ツツツツ！ 白線を蹴立てて海面をつゝ走る二條の雷跡、たちまち敵戦艦の艦側からバツとも  
の凄い水柱が舞ひ上る。

「やつた！ 命中だ」

見事敵艦のどてツ腹を撃ち碎いたのだ。水柱は雲の峰までも高く／＼ふき上り、つゞいてあとから／＼と立ちのぼつてゆく。戦ひとはおもへない見惚れるやうな美しくしゝ一瞬の情景であつた。

この間わづかに三、四分、まだ敵の對空砲火は一發も火を吹かず、一機の戦闘機の挑戦さへない。奇襲はあざやかに成功した。

「われら奇襲に成功せり」

母艦にまづ感激の第一報が打電された。

と、つゞいて息もつかせず急降下爆撃機が灣岸の飛行場に突つこんでゆく。

決死の銃爆撃にたちまち格納庫から、廣い飛行場の敵機から、赤黒い火焰がメラ／＼と立ちの



ぼつた。

ハタ／＼と身を震はせて燃える／＼敵の第一線機！

海に陸に雷撃機と急降下爆撃機が、思ふ存分第一撃を加へ機首を立て直してゐるころ、やうやく敵の高角砲弾は、わが機の周囲に炸裂しはじた。

### (三) 見事、主力艦に命中、轟沈、撃沈

彈幕の中、悠々旋回——壯烈雷撃機體當り——敵戦艦悉く傷つく——朝陽浴びて哀れ敗北の残骸

さアこんどはいよいよ大型爆弾のお見舞ひだ。

〇〇中佐指揮官は、隊列の最先頭にたつて眼下の巨艦に狙ひをつけた。この一發、全國民の魂がこもつたこの一發だ。

氣流がとても悪く水平爆撃の照準がきまらな。一回、二回、三回、いら／＼しながら〇〇指揮官は、僚機とともに彈幕のなかを旋回また旋回する。

と、照準器いつばいに敵艦の砲塔が大きく飛びこんだ。

「よしッ、投下！」

その瞬間、ガンと機體にも凄しいショックを感じるのと、爆煙のなかに五〇〇メートルも火柱がつゝ立つたのがいつしよだつた。

空の決死隊とともに潜入した特殊潜航艇の決死の水中攻撃に敵戦艦の火薬庫が爆發したのだ。

いかに不沈の戦艦といへども空から雷撃隊、急降下爆撃隊、戦闘機隊、爆撃隊、それに水中からこの特殊潜航艇と集中攻撃を浴びせられては沈まぬ道理がない。

仕止めたのはアリゾナ型戦艦だつた。すでに艦隊の下半分は水底にけしとんで海面にはブクブクとドス黒い重油が吹き出してゐる。

やがて残つた上半部も濛々と黒煙を吹きあげ海中にのけぞつた。これが對日進攻を豪語したアメリカ戦艦の惨めな最期か。

氣がつくと、わが編隊の周囲には石礫でも叩きつけるやうに敵砲弾が炸裂し、指揮官機の左胴體にも一發喰つて風穴があいた。



後ろをみると五番機がタンクを射ち抜かれたのか、霧のやうに白いガソリンの尾をひいてゐる。

それでも編隊に離れじとびつたりとくつついてくる。爆撃の任務を終れば、悠々と自爆する肚らしい。うたすばやまじとする海鷲のはげしい氣魄がひし／＼と感じられる。

「状況を知らせよ」

と、指揮官が信號を送ると、

「補助タンクのみ」

と、平然たる答へがあつた。

ついで島の中央にある第二の目標、ホイラー飛行場に機首を向けると、こゝでもすでに二百機以上のわが戦闘機と爆撃機が、飛行場の空を蔽つて果敢な低空攻撃を加へてゐる。

飛行場に引き出されてゐた敵機は、パツパツとつぎつぎに火を吹き、格納庫から吹き出す眞つ黒い噴煙は、わが機影をつんで凄烈かぎりない。

敵機はわが電撃に舞ひ上るひまもなく縮み上つてすでに全滅した。いまさら手を加へる必要も

ないのだ。

わが機は、ゆつくりと落着いて、もういちど、敵主力艦の頭上に引返した。

そして二隻づゝ並んでゐるのを一機が片方を狙へば他の一機は残りの片方を襲つた。

まづ一番機が一弾を見舞ふと忽ち百メートルも水柱が立ちのぼる。後続機がそのまゝ突つこめば衝撃で被害をうけるので水柱が消えるまで待たねばならない。

しかも、彼らは高角砲の彈幕を恐れる色もなく爆撃の順序を待つてはつき／＼に巨弾を浴せた。雷撃隊の攻撃をさらに猛烈につゞけられ、飛鳥のやうに海面すれ／＼に敵艦まで近づいては魚雷をブツ放し、なかには機首を立て直すところを敵弾が命中してみる／＼火をふくものがある。

しかも、火達磨になりながら、最後の一發までも凄烈な魚雷發射はつゞけられた。

そしていまはこれまでと、敵艦目がけて眞つすぐに突つこみ、火花とともに自爆するわが愛機もあつた。——世界戦史にかくも悲壯な壯烈な光景があつたであらうか。

攻撃は終つた。



引揚げやうと、ふと、東の空を仰ぐと、燦然たる朝陽が、編隊の大勝利を祝福するかのやうに柔かく山の彼方に照り映えてゐる。

戦場に目を落せば、艦體を貫つ二つに切断されて轟沈した戦艦、見苦しい赤腹をさらけ出して横倒しになつたもの二隻、四十五度に傾いて刻々沈んでゆくのが一隻、炎々と燃え上つてゐるのが三隻。

美しいフォード島海岸の敵艦は、一敗地にまみれてことごとく倒れ、ことごとく傷つき、いま朝陽のなかに哀れな敗朝の残骸をさらしてゐた。

あゝ世紀の凱歌！ しかし、一隊は、燃料の許す限りなほも眞珠灣上空を旋回しつゞけた。

あゝ、出發のとき、生還を期したものが一機でもあつたであらうか。

指揮官〇〇中佐の双眸にはきらりと露がひかつた。

僚機よ、還れ！ この眼ではつきり確認したことはあるが、いまにも自爆した僚機が飛び還つてくるやうな気がしてならない。大東亞戦争の起ち上りの一戦に、眞珠灣頭に散華した忠烈な部下の英雄よ、永へにわが海軍を護り給へ。

と、中佐は機上に祈りつゝ歸行した。

一同無事母艦に歸着すると入れちがひにさらに第二次攻撃部隊が勇躍飛び立つていった。太平洋艦隊の残存兵力に最後のとどめを刺さんがためであつた。

#### (四) アメリカの狼狽と混乱

七十餘機の同士討ち——米潜水艦の狼狽——ハワイ敗戦の責任——喧々囂々たる非難の聲

この急襲によつてアメリカを失神せしめ、米人を狼狽と混乱の底に陥れたことは云ふまでもないことである。

八日のこのハワイ海戦で敗戦と知るや、ワシントンではガスマスクの武装姿も物々しい大統領ルーズヴェルトの護衛やら、機銃群に取囲まれた白聖館など、狼狽ぶりは如實となつて滑稽味さへ帯びて現はれた。

ことにハワイ海戦で、敵航空母艦エンタープライズ號がハワイ沖で大破するや、その艦長は最



後の命令として、

「搭載機は全部陸上基地に歸還すべし」

と、命令すると、艦上機七十餘機は、まさに太平洋の波底に沈まんとする母艦より辛うじて飛立つた。ハワイの基地では、未明の大空襲の悪夢からまださめ切れぬところへ、再び轟音、編隊機が上空に現はれたので、「さてこそ再度の來襲」と、やうやく準備のとのつた地上砲火を米機が低く舞ひ下りたところをねらつて、一齊に浴せかけたのである。

上空の米飛行機は、無電で、

「我は味方なり」

と、發信するが、周章の極に達してゐる地上では聞かばこそ、うつて／＼打ちまくり七十餘機こと／＼／＼同士討の高射砲火のため撃墜されたのであつた。

また、その日、サンフランシスコ附近にあつた米潜水艦は一輸送船を發見した。それをわが艦艇の急襲と早合點して、たちまち魚雷を放つて撃沈した。沈められた米船の乗組員五、六十名は狐につまゝれたやうなばかんとした顔をして、辛うじてボートに乗り移り、陸地に向つて漕ぎ歸

つた。

するとまた海岸の防禦陣では、このボートを發見するや、「日本軍の敵前上陸部隊來襲」と青ざめ、うむをいはず一齊射撃をあげせ哀れにもボートは忽ち海の藻屑と消え去つたのである。

二度までも敵、味方の見わけもなくなつた自國軍の手にかゝつて最後をとげた米船員たちの不運もさりながら、敵の狼狽ぶりこそ世界の笑ひ種ともなつた。

緒戦において日本軍のため殲滅的打撃を蒙つたハワイ眞珠灣における米海軍基地の防備問題に關して米政府は大審院判事オーエン・ロバート（首班）とする敗戦査問委員を現地に派遣して、ハワイ敗戦の責任所在について調査をすゝませてみると、次のやうなことで判明した。

それはこのハワイ敗戦が、キンメル前太平洋艦隊司令長官およびシヨート前ハワイ空軍司令官の職務怠慢に因るものとして、次のやうに斷じてゐる。

キンメルおよびシヨートは昨年十一月二十七日にマシーナル陸軍參謀總長およびスターク海軍部長から、「逸早く日本軍攻撃の危機に關し適宜の處置を講ぜよ」と命令をうけてゐたにもかゝらず、何らの顧慮も拂はなかつた。



もし、キンメルとショートの兩人が、右の警告および命令にしたがつて萬全の措置をとつてゐたならば、災害を未然に防止し得た筈である。

日本軍攻撃の當日即ち十二月七日午前六時三十分、米海軍輸送船アンタレス號は、眞珠灣沖の航行禁止水域内で日本潜水艦一隻を目標とした。海軍哨戒機および驅逐艦ワード號は午前六時四十分この日本潜水艦を攻撃した——この報告は午前七時十二分に當直士官の手もとに達し、同士官は參謀長に報告したが、この報告にもとづきなんらの警報も發せられなかつた。

しかも七日朝には、いかなる義務をも遂行しうる状態にある將兵が十分に存在してゐたのである。

また、ハワイの日本機來襲探知機で勤務中の一士官は、午前七時二分北西百三十哩の上空に多數の飛行機を探知して、同七時二十分に當番士官に報告したが、同士官は未経験であり、且つ米機がそれに該當する時刻その附近を飛行するやの情報を入手してゐたため發見した飛行機を友軍と誤認してなんらの處置もとらなかつた。

眞珠灣の機雷網は、艦船を通行せしめるほかは、通常夜間には閉ざされてをるのであるが、十二

月七日午前四時五十八分に掃海艇二隻を通行せしめるため開放したまゝ午前八時四十分まで閉鎖されなかつた。

こんな真相が判明した結果、米國朝野はいまさらのやうにハワイ敗戦の内幕に啞然とするともにも兩防衛責任者に對して、喧々囂々たる非難の聲のあがつたのも無理からぬことである。

眞珠灣軍港における米國の戦死者は、ノックス米海軍長官のハワイ視察後の報告によれば、海軍側死傷者合計三千三百八十六名、その内譯を戦死士官九十一名、下士官および兵二千六百三十八名、戦傷士官二十一名、下士官および兵六百三十六名と發表したが、それは眞つ赤ないつはりで、事實は大審院判事オーエン・ロバーツ一行が調査し發表した左の報告の方が正しいのである。即ち、

海軍側四千五百、陸軍側一千

この數字によつても、わが海軍部隊の開戦劈頭における赫々たる戦果を嚴として裏書きするばかりでなく、敵の常套手段たる隱蔽戦術がこゝに馬脚を現はしたのであつた。

この戦果、よくぞやつた、有難うと國民の感激をよんでゐる海鷲、その多くはまだ二十歳にな



つたばかりの若武者であつた。

そして、さらにこれらの海の荒鷲、陸の荒鷲たちは、マレー沖においてさんぜんたる大戦果を擧げることが出来た。

### 三、マレー沖大海戦の全貌

#### (一) 英國東洋艦隊の撃滅

プリンス・オブ・ウェールズ號の入港——南支那海の悪天候を冒して——敵艦隊を發見す——各部隊の出發——無念引返す

無敵海軍開戦三日目の十二月十日、大本營海軍部は突如左のごとく發表した。

〔大本營海軍部發表〕（十日午後四時五分）帝國海軍は開戦劈頭より英國東洋艦隊、特にその主力艦二隻の動靜を注視しありたるところ、昨九日午後帝國海軍潜水艦は敵主力艦の出動を發見、時後帝國海軍航空部隊と緊密なる協力の下に搜索中、本十日午前十一時半マレー半島

東岸クワンタン沖において再びわが潜水艦これを確認せるをもつて、帝國海軍航空部隊は機を逸せずこれに對し勇猛果敢なる攻撃を加へ、午後二時二十九分戦艦レパルスは瞬間にして轟沈し、同時に最新式戦艦プリンス・オブ・ウェールズは忽ち左に大傾斜暫時遁走せるもまもなく同二時五十分大爆發を起し遂に沈没せり、こゝに開戦第三日にして早くも英國東洋艦隊主力は全滅するに至れり。

あゝ英國海軍が誇る最精銳戦艦プリンス・オブ・ウェールズ號爆沈し、高速戦艦レパルス號轟沈す！ 開戦劈頭の八日、太平洋の空を長驅、奇襲して、ハワイの米海軍勢力主軸を葬つた精銳なるわが海軍航空部隊は、ふたゝびこゝに英國海軍の最前列にある巨艦を、寸時にして南海の底に葬つたのである。

まさに世界の海戦史家をして、啞然驚嘆せしめた歴史的偉勳である。

從來、支那方面にあつた英極東艦隊の主力が、シンガポール（陥落後昭南島と改名したことは御承知のとほり）に移つてからは、巡洋艦を主力として空陸軍ともに、マレー防衛に専念してゐ



たが、日米關係急迫を告げるとともに、このプリンス・オブ・ウェールズおよびレパルスの二主力艦が急派されたのである。

兩艦が、堂々シンガポールに入港したのは昭和十六年十二月二日だった。——同市の英兵および敵性人は、

「これでマレーの防備は大丈夫だ。さまた見る。」

と、狂喜して大氣焰をあげた。

そして、八日の早曉わが方の電撃的な作戦が開始されるや、イギリス側は愕然とした。

従來の支那事變における日本の作戦は、つねに一歩進みの戦法をとつて、一歩々々ちりちりと、着實に戦果をあげ擴大してきたため、米英は、てつきりこんどもまた日本軍は、

(まづ泰國を通過して、ビルマを衝くくらゐが落ちたらう！)

くらゐにしか考へてゐなかつた。

八日未明、わが海の荒鷲が大舉してシンガポールを急襲したときは、街にはまだ煌々と電燈がついてゐた。燈火管制もない軍港のだらしなさ(筆者は常時といへども軍港附近一帯の地まで燈

火管制を實施すべしと年來主張してゐるものである)

この朝、ハワイ邊とおなじく、氣流の状態はすこぶるわるかつた。雲は南支那海を低く蔽ひ暗澹として視界は不良であつた。

それよりもさきにまだ申上げたいことがある。それは昭和十六年十二月九日のひるすぎである。——〇〇基地の兵舎の一隅では各攻撃隊の指揮官連が汗塗れになりながら作戦を練つてゐた。

シンガポール軍港にある英東洋艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズと戦艦レパルスをいかにして撃滅するかといふのである。だが敵は軍港深く立籠つて出港する氣配もない。一日撃沈がおくれれば、わが方の作戦は一日不利を増すのだ。

部隊長の攻撃命令を待つのみだ、寸刻も躊躇はゆるされぬ、暫らくの沈黙が一座を支配してゐた。

このときだつた。南支那海の氣流のわるい海上の、船團の上空を低くとんでゐたわが荒鷲が、異状なきことをたしかめ、マレー東岸海面へ偵察行をつゞけるうち、突如はるか彼方の水平線上



に幾條かの煙を發見した。

シンガポール海峡にほどちかいところを北進中の艦隊、これこそ敵東洋艦隊にちがひない。雲間をとんで、慎重に偵察するとあるく。堂々たる戦艦二隻、プリンス・オブ・ウェールズとレパルスだ。

やつと一週間前に着任したばかりのイギリス東洋艦隊司令長官フィリップス提督坐乗の旗艦プリンス・オブ・ウェールズは八日夜か九日朝かに、レパルス以下驅逐艦三隻をしたがへてシンガポールを出港、わが敵前上陸部隊輸送船團を襲撃せんものと密かに北上しはじめたのだ。

「敵艦隊を發見す」

との無電はわが偵察機から即刻〇〇基地の爆撃部隊へ飛んだ。

幸運にもまたわが潜水艦のテレスコープにも敵艦は捉へられてしまった。飛雷一閃。

この報告が来たとき、〇〇基地の一同は總立ちとなつた。

つひに來たのだ。この日のため、たゞこの日のため、たゞこの日のためにのみ死よりも苦しい猛訓練を積んできたみんななのだ。

萬歳

疼くやうな喜びがおもはず一同の口を衝いて出た。

「各部隊直ちに出發用意」

の命令は八方へ飛んだ。

「つひに敵艦が出をつたぞ」

云ひ知れない緊張感の流れの中に、いよ／＼待望の敵主力艦の出勤、赤道直下百三十度の汽罐のそばで眞赤になつた機關兵たちがうれしさうにわらつてゐる。

甲板に立つて闇夜をすかしてみると、雲は低く、波頭につらなる視界は茫々、わづかに僚艦の信號燈が、かすかにゆらめき見えるだけである。命令は口から口へとつたへられてゆき、全員武者ぶるひをはじめた。

「敵はちかい」

〇〇艦の艦底まで、丁度鈔のやうに靜かに傳令はながれてゆく。〇〇艦はもう敵の作戦地域に入つてゐるのだ。甲板上の主なる部分は、ハンモックでつくられたマントレットで防護され決戦



の用意はよ。

一方、敵の旗艦プリンス・オブ・ウェールズを先頭に、英艦隊はマレー半島東海岸を北に向つて航行してゐるとき、司令長官サー・フィリップス提督は、旗艦ウェールズ號上から、次のごとき歴史的信號命令を發した。

われらは今日日本艦隊を求めて航行中で、戦艦〇〇と輸送船團より成る日本艦隊を奇襲せんとす、本官は各員その本分を盡さんことを期す。

そして九日になり赤い太陽が西に没せんとするころ、敵英艦隊は、日本艦隊に接近しありとの情報に接して方向を變へた。

その翌朝敵艦隊にとつてはまったく豫期しない悲惨事を起した。十日朝レパルス號に向つて、〇〇フィートの高度で近づいてくる〇〇機の日本空軍を發見したからである。

それもその筈である。前日の夕刻早くもわが荒鷲の第一陣がとび立つてゐた。日没まではわづかに一時間半しかない。目的地點までは相當遠い。日没までに敵を發見出来るかどうかまつたくわからない。だがやつつけるのだ。各部隊は勇躍基地をとび立つた。

## (二) 敵艦隊と遭遇

スコールを衝く——潜水艦より飛電一閃——千載一遇の好機——歴史的な第一報  
——マストと擦れ——のたうつ敵艦掃射

天候はひどくわるく、上つても上つても分厚い雲だ。時々雲の切れまから海がみえる。雲の密度はますます濃くなつてゆく。

雲の下では物すごいスコールが暴れてゐる。南方特有の荒天だ。いつの間にか視界はまったく暗くなつた。何も見えない。たゞとき／＼雲の中に難航する僚機の翼の燈火が烈しく上下するのが見えるばかりだ。

目的地點でスコールを衝いて雲下に出てみたが敵艦隊はすでになく海上はにぶく不氣味に光つてゐるのみだ。視界はまつたく利かず索敵はまつたく絶望、萬事休した！ 隊長機から反轉の命令が出た。

無我夢中であつたのだが歸りの脚は重かつた。



妙に疲れたやうな腹立たしさでいつばいだつた。基地へ歸りついたが、飛行場はまつくらだ。直ちに明朝の攻撃準備だ。操縦士のみはせひとも睡眠をとるべしといふ命令だが、誰も眠れなかつた。

全員晩飯もとつてゐない。だが、誰も食事のことなどは忘れてしまつて明朝の準備と攻撃の計畫に夢中だ。――夜のうちに敵艦がシンガポールに逃げこみはせぬかとおもふと、ちつとして居られぬ焦だたしさに襲はれるのだつた。

十日午前三時四十分、待ちに待つた潜水艦から報告がきた。敵艦は二十節の速力でシンガポールへ逃走中といふのだ。

(今度こそ)

と、誰も目の目にも固い決意が燃え上つてゐた。整備員は燃料積込みに急ピッチをあげる追跡だ。時速二十ノットとすれば、アオンス諸島の南方五十海里位の洋上で追いつける見込はある。

索敵の〇機は夜明けをまたず勇躍出發した。

いよ／＼出發だ。無念眠れぬ涙に濡れて一夜を明かしたわが荒鷲は、けふこそやつつけねばな

らぬと全員はりきりたつてゐる。この顔をもてもう徹夜の疲労など微塵もない。はち切れんばかりの戦闘意欲が顔いつばい満ち溢れてゐる。薄明の基地で出撃の訓示をする〇〇司令の眼は決意と緊張でギラ／＼と光つてゐる。

「千載一遇の好機だ。全力をつくしてやれみんな死んで歸るのだ」

「はい、死んで歸ります」

司令の訓辭に答へるやうにきはめて自然に全員のまなざしがかう答へた。すこしの不自然もなかつた。死といふことがこのときほど容易に當然におもへたことはないやうだつた。

午前七時五十分、〇〇部隊の雷撃隊と爆撃隊が出發、續いて〇〇部隊、〇〇部隊の雷撃隊が相次いで離陸。

上昇する、上昇する。そして大なる決意、大なる確信、それは荒鷲の勇士だけに通じる氣持だつた。空は明るくなつた。雲量はきのふより少ない。

「よし、もう大丈夫だ！」

どの機長にも戦友の嬉しさうな張りきつた笑顔がみえる。雲の間になつかしい教官殿の面影が



チラツと浮んだ。しつかり遣れツと激刺されるやうな教官殿の面影だ。さうだ、けふこそ日ごろの訓練を發揮しなければ——とおもはず齒をギリ／＼と噛んだ海鷲編隊は〇〇メートルの高度を保つて一氣にマレー沖へ飛んでゆく。

だが〇時間も飛び、すでに報告された海上まで来たが、どこにも敵影はない。青い海原が涯しもなくひろがつてゐる。フツフツとかすめとぶ白雲。

各隊が微かな焦躁をおぼえながら、相前後して引返しはじめたころだつた。三番索敵機は眼下に敵艦らしい五つの黒點を發見して、よく確めるため雲下に高度を下げたとき、突然先登の艦上にパツと赤い信號をみとめたかとおもふと、はるか下方でパツと白い煙が上つた。撃たれてゐるのだ。

敵艦だ！

こう直感すると、キイを叩いた。

「敵主力艦見ゆ、北緯四度、東經百三度五十五分」  
午前十一時四十五分、歴史的な第一報だつた。

反轉中の〇〇部隊機はこれをキャッチ一路機首を北方へ向けた。目指すはクアンタン東方五十マイルの洋上である。續いて零時五分、第二報は、

「敵主力は驅逐艦三隻より成る直衛を配す、航行順列はキング・ジョージ型レパルス」と報じてきた。機内には期せずして歡聲があがつた。全搭乗員の目は一ツになつて海上に焼き

ついてゐる。十數分ぐらひたつたときだつた。

〇〇部隊長の率ゐる爆撃機隊は、雲下はるかに南下中の敵主力を發見した。おゝ！ 見よ！  
プリンス・オブ・ウェールズを一番艦にレパルスがこれにつゞきその手前には、一番艦を圍むやうに驅逐艦三隻が三角陣をつくつて先行してゐるではないが、堂々たる單縦陣警戒航行順列だ。各艦の蹴立てる眞白い波がひどく印象的に眼にしみる。零時四十五分、

「突込め！」

の號令が僚機に傳はつた。

高度を下げると敵艦は一齊に防空砲火を撃ちはじめた。機の上左下にすきまもなく高角砲彈が炸裂する。このときウェルズ號は、二十八ノット乃至三十ノットの高速度で遁走をはかり、艦



尾並びに前先端部の砲塔から一齊に高角砲、パンボン砲、高射砲をうち出したが、わが空軍は、まさに神技にひとしい技術と勇敢さをもつて艦上〇〇メートルにまで大膽な低空爆撃を敢行し多数の命中弾を浴せた。

一弾は見事に二番艦レパルスの中央部に命中！ 灰黒色に塗つた胴體から茶褐色の火焰が噴き出した。

爆撃隊はさらに大きく弾幕のなかを旋回し、二度目の爆撃に移らうとしたとき、〇〇雷撃隊の一隊は敢然敵艦目がけて雷撃にうつつてゐた。

左右にわかれた雷撃隊の一隊は右よりウエールズへ、他の一隊は左よりレパルスへ猛烈な雷撃を加へてゐる。巨大な水柱が兩艦から數本あがつた。命中したのだ。

一分間に六萬發の弾丸を發射する二十五聯装の二十ミリポムポム銃三基、二十聯装一基、四十耗の八聯装四基の高角機銃と五・二五インチの副砲十六門、四・七インチ高角砲四門を有するプリンス・オブ・ウエールズはその全防空機能を擧げて、必死の防禦を行つてゐる。

### (三) 雷撃部隊の活躍

閃く白光命中だ——レパルス號の轟沈——凄絶火華散る自爆——泣きながら萬歳絶叫——ウエールズ號の撃沈

ザーツ、ザーツ！ スコールのやうに弾丸の幕が行手をさへぎる。

空いちめん〇〇メートル位の高度に黄ろい硝煙がたちこめ炸裂する砲弾の破片が、海上一面に砂囊を投げつけたやうに物凄いしぶきを立てゝゐる。目も口も開けられぬやうな烈しさである。

つゞいて〇〇雷撃隊の大編隊が、敵團を發見したのは午後一時半ごろだつた。

雲下にチラと敵影をみたかと思つた瞬間、視界は濛々たる亂雲層で斷たれてしまつた。海面〇〇メートルぐらひから〇〇メートルぐらひまでつゞく分厚い雲である。約十分間、夢中でこれに突込んだ。一寸先も見えぬ雲中を僚機は見事編隊を崩さず隨いてきてゐる。一時四十八分、雲が切れた。

下をみると、目指す敵艦の胴體が眼下によこたはつてゐるのだ。隊長機を先登に突込めの態度



がとられた。雲を出ると雨のやうな砲火だ。見る／＼うちに視界は黄色い硝煙で蔽はれてゆく。まづ隊長機が海面すれ／＼まで突込んだ。

つゞいて〇機の全機がプリンス・オブ・ウエールズ號に猛烈におそひかゝつた。と、その瞬間、ウエールズ號の胴體からマストの倍ほどもある水柱が上つた。命中したのだ。

續いて數本水柱があがつた。魚雷發射と同時に各機の巨體は艦橋すれ／＼にウエールズ號をとびこえ、艦橋目がけてはげしい掃射を浴びせかけた。

〇隊〇〇機はこのとき二番艦へおそひかゝつた。轟然！レパルス號の後尾に水柱が上つた。二番機が火達磨となつて海中に自爆したのと同時に二番機の放つた魚雷がレパルス號の真中に命中、二本目の水柱が上つた。

つゞいて艦首すれ／＼に眞紅な火焰が一條の煙幕のやうな帯を引いてはしつた。三番機が自爆したのだ。

「畜生！」

一瞬皆の胸に怒りにちかい感情がこみ上げた。だがそれはすぐ消えて、

「立派だ！ 見事な最期だ」

といふ感嘆にかはつてゐた。

「こんな美しい死方が出来ればそれでよいのだ」

誰の胸にも不思議に同じ氣持がうごいてゐた。

高角砲の目のくらむやうな曳光の中でレパルスの水兵が甲板に倒れてゐる姿がはつきりみえた。わが掃射を避けるやうに右手で顔を蔽つた兵もゐた。機は大きく旋回してゐる。

ふりかへるとレパルスは黒煙につままれて、大きく傾斜し、ウエールズも左に傾き、グツと速力が落ちてゐた。

「萬歳！」

隊長がまづ先に叫びだした。つゞいて機内にはどつと勝鬨が沸きおこつた。

このとき、左前方の驅逐艦が、突然猛烈に爆破し瞬時にして海中に没してしまつた。僚機の放つた魚雷一發が見事に命中したのだ。間髪を入れぬ轟沈であつた。

つゞいて最終隊の〇〇爆撃隊が痛手を蒙つて逃げまどふ敵艦の上空に姿を現はした。痛手を蒙



りつゝも敵の砲火は依然としておとろへない。さすがに海賊上りの英國海軍だ。

おもひきり高度を下げて爆撃にうつつたときだつた。突然機體が竹箒で撫でられるやうな音がした。

砂礫のやうな高角砲弾が命中してゐるのだ。全機プリンス・オブ・ウェールズは直撃を敢行、うち一弾は後部甲板の檣に見事命中したのであらう。轟然たる爆音が起つて茶褐色の火焰が立上つた。

旋回してふり返れば戦艦レパルスがまさに沈没してゆくところであつた。眞黒い煙がこの巨大な戦艦をおし包んだかとおもふと、一瞬にして巨體は海中に没してしまつた。

いまははや海上一面にたゞ黄褐色の油が煙るやうに擴がり、無数の浮流物の漂ふなかに二隻の駆逐艦が救助作業を續けてゐる。最後の止めを刺した〇〇爆撃隊は、かくて全機歡呼のうちに引揚げて行つた。

このころ三番索敵機は第一報を打電して以來依然上空を旋回、二時間にわたる海空の死闘を逐一報告しつゞけてゐたものであつた。レパルス沈没を目撃した同機は、さらに高度を下げた。い

まはウェールズの最期を見とどけるばかりである。

中央と艦尾から濛々たる黒煙を吐き、左に大きく傾きつゝウェールズは八ノツトくらひの速力で走つてゐる。その直後を駆逐艦が一隻追尾してゐる。だん／＼速力がおちてきた。

いよいよ最後かとおもつたとき、駆逐艦はズーツとウェールズの舷側に近づいてきた。

その途端つゞいて二回プリンス・オブ・ウェールズの巨體に大爆發がおこつたと同時に艦尾から不沈戦艦の巨體は徐々に沈みはじめたのだ。

「英國の誇」の名が示すやうに従容として沈んでゆくのだ。約三十秒、沈まざる戦艦はつひにまつたく姿を没してしまつた。附近一面の油の上を強烈な南の太陽がギラ／＼とひかつてゐた。

なぜかひどく物靜かな光景であつた。夕刻近く死闘を終へた荒鷺は續々基地に歸還した。あゝ多年鍛へぬいた海軍魂は遂に不沈戦艦を沈めたのだ。

迎へる〇〇隊司令は泣いてゐた。大任を果した搭乗員も泣いてゐる。

地上勤務の人たちも泣きながら戦友の手を握りしめるばかりだ。何も云へない。何もいへない。たゞ抑へきれぬ感動が嵐のやうに全員の胸中を走り廻るのみだ。



イギリス東洋艦隊主力はつひに全滅した。

沈没の直前、敵駆逐艦が一隻ウェールズ號に横付になつたのが機上から見受けられたが、乗員の一部はそれに乗移つて救助されたらしい。わが方の損害は飛行機三臺だけだつた。

わが無敵空軍が敵の最後をみとめ、機首を揃へたころはるか後方に敵戦闘機八機が遅ればせながらやつて來たのが見受けられたがすべては後の祭だつた。

一方わが〇〇艦では、友軍の荒鷲部隊が追撃を開始したとの報が入つてきたとき、地點を調べてみると、マレー半島〇〇沖の本艦位置からいくらもない。〇〇艦は急スピードを加へた。

三十分、四十分、そして、

「決戦に間に合ひたい、一發でもいゝから横つ腹にお見舞ひしたい」

射手の水兵さんが血走つた眼で、前方をにらんでゐる。と、「レパルス號轟沈」との無電が快報を傳へてきた。

「わアツ！」



と、艦内に歡聲があがつた。續いて、「プリンス・オブ・ウェールズ號は傾きつゝ遁走中」の無電だ。

「萬歳！ 萬歳！」

肩を叩きあつて萬歳を絶叫する。機關兵も射手も、士官も、水兵も、皆ぼろ／＼泣きながら萬歳を叫んでゐる。〇〇基地からの無電が、櫛の齒をひくやうに入ってくる。「レパルス號轟沈！」

「プリンス・オブ・ウェールズ號沈没！」さらに艦名不詳の大型駆逐艦一隻の撃沈だ。海の荒鷲は、けふこそ思ふ存分日ごろの腕にものをいはせたのだ。

「立派だぞ海鷲、うれしいぞ海鷲！ 俺たちは、絶好の獲物を失つて残念だつたが、嬉し涙がポロ／＼出てとまらない！」

眞赤な眼をゴシ／＼とこすりながら、みんな泣いてゐた。泣いてゐた。

翌々日、〇〇隊の一隊の荒鷲は、ふた／＼び激戦場の上空を飛んでゐたが、眼下には何事もなかつたやうに、蒼い波頭が輝いてゐた。



この波頭へ向けて、搭乗員たちは大きな花束を落してやつた。最後までたゞかひ抜いた英海軍の數千の英靈よ眠れ、戦ひにつよい海鷲のやさしい心やりであつた。

おもへば當時の空模様、わが方に極めて有利であつたことは正に天佑といふべきであつたが、それにも増して、この大戦果は、大御稜威の下に不屈の精神力と不斷の訓練によつて築きあげた實力、そして世界に冠絶する優秀な兵器の賜物であつた。

#### 四、兩海戦の解説

##### (一) 無敵海の荒鷲

一發必中の氣魄海鷲——不可能を抹殺——彈幕の中を悠々飛行——荒鷲の神技

たつた一つの荒鷲によつて、果して近代裝備の戦艦を撃沈する可能性があるか、といふ問題は、前歐洲大戦が終つてから航空兵力がやうやく擡頭しはじめて以來の懸案であつた。

そして軍事豫算を計上して軍備を充實する場合、軍艦と飛行機とを、いかなる割合に豫算を配分すべきかの點について、世界各國の軍事専門家の間に意見の相違があつて議論の上では決しなかつた。

第二次歐洲大戦が勃發しても、獨空軍と英艦隊の間ではこの謎は解かれなかつたのである。ところが今次大東亞戦争ではその緒戦においてこの難解の謎を解く鍵をわが海鷲によつてあたへられたかの觀がある。

ハワイの眞珠灣とマレー沖の海戦のごとくわが精銳無比な海鷲の前には、米英の金にあかした戦艦もつひにもゝ哀れを止めてしまった。

だが尨大なる豫算を計上しての數と、機械力ばかりではこの方程式は解けるとはいへない。——要はこれを運用する國家をおもふ熾烈な精魂と猛訓練による實力とがともなはなければならぬのだ。

イギリスの海軍が、獨戦艦ビスマルク號を沈めたとき、イギリスの飛行機は魚雷九本もあてゝおきながら沈没しえなかつた。そこで夜間驅逐艦がうちこみ、巡洋艦がうちこんで、合計三十六



本の魚雷をあて、最後にドウゼットシャといふ巡洋艦がやうやく最後の止めを刺したのであつた。

が、ハワイ、マレー沖の海戦で、わが海軍のは飛行機だけである。一つの魚雷が當つて爆発したその穴へさらに次の水雷が入るといふ命中ぶりであつた。

それだからこそ一分間以内に沈む轟沈といふ神技まであらはれ、全世界を驚倒させたのである。——眞珠灣に米太平洋艦隊を一撃の下に覆滅した殊勳の海軍大編隊を指揮した〇〇中佐の報告を見やう。

「當時の天候はやゝ不良な状態であつた。北東十七メートルの強風がふきささぶ高度五〇〇メートルから二千メートルにかけては漠々たる密雲がたて罩めてゐた。大編隊の飛行機群が母艦を離れてせまい眞珠灣に殺到するには絶好の状態ではなかつた。

日頃の演習や訓練なら飛行を見合はすところだが、この日この朝を期して多年の訓練はつゞけられて来たのである。状態の良不良などは問題にならない。

一發も無駄な爆弾を出してはならぬとおもつてやり直した。高角砲弾の中を一巡りすると後

續部隊も皆われにならつて高角砲弾炸裂の彈幕の中を悠々と旋回してゐる。一發必中の精神力が波うつてゐるとおもふ。一死報國の精神が脈々としてゐるではないか。

マレー沖でプリンス・オブ・ウエールスおよびレパルスを轟沈、爆沈せしめたときの状況も同様である。

わが海軍がおそひかゝつたとき敵艦は、すべての防禦砲火の火蓋をきつて、實に一分間數萬發の彈丸のふすまを張つてふせいだが、わが海の荒鷲はその彈幕の中を悠々しかもまつしぐらに突込んで行つた。

そしてぶちこんだ第一發の魚雷にさしものプリンス・オブ・ウエールスはすさまじい水煙を艦尾左にあげて巨體はよろめき、つゞく魚雷命中につひに爆沈、レパルスはたゞ一分間で轟沈してしまつたのだ。

かゝる米英人たちの考へもおよばない最高の積極的精神力「海鷲魂」の上に猛訓練の技術がつまれてこゝに不可能の三字を抹消した海鷲がドシ／＼とはぐまれてゐるのである。



## (二) 無敵陸の荒鷲

敵の優秀機殲滅——生かす血の訓練——築く逞しき金字塔——操縦訓練と空中射撃——射撃訓練と必中彈

海鷲のみではない。陸の荒鷲とても同様絶対不可能といふことはないのである。シンガポール陥落、南洋諸島の空襲、マレー戦線における目ざましい果敢なる戦闘ぶりを見よ。

今次大戦における空中作戦の第二段階ともいふべき特異性は、わが陸軍航空隊にとつては渡洋作戦につく航空基地の推進作戦であつた。

海洋航空の不利をのぞいて緒戦に獲得した制空権を確保維持し敵空軍の撃滅を期するためには、行動半徑をできるだけ敵空軍據點へのばすことが最大要件であつた。このためにはせが非でも戦場の擴大につれて航空基地を推進せねばならぬ。

もちろん、この基地を獲得するといふ仕事は、地上部隊の活躍にまつのであるが、占領直後の基地は敵が日本軍に使用されることをおそれ、使用妨害を企て、退却にあたつて破壊されてゐ

た。たとひ破壊工作が行はれてゐなくとも、基地設備の不完全なものが普通である。

この占領直後で、しかも飛行場附近ではまだ激戦が展開されてゐる不完全な基地へ推進する仕事は、相當危険な放れわざである。しかるに膺懲の火蓋をきつて、マレー半島東海岸に奇襲上陸を敢行した開戦第一日の十二月八日、勇猛果敢な陸軍航空部隊は、その日のうちにマレー東海岸へ進駐して新しい基地を開設、地上部隊の戦闘に緊密な協力をはたした。

そして開戦當時、シンガポールを重要基地として國境までにいたる英領マレーに配備されてゐた英空軍勢力は約四百五十機とみられてゐたが、これがたちまちにして陸鷲と海鷲の好餌となり、全く摺伏してしまつた。

陸鷲部隊の基地に關するもう一つの苦勞は、敵空軍は平時から設備された優良裝備の基地を利用し、ラジオ・ビーコン等無電裝置を活用して夜間や霧中等に盲目飛行を自由自在に行つて皇軍をなやましたことであつた。この不利な態勢を補つたものは、結局旺盛なる攻撃精神と平素の訓練であつた。

訓練の成果がものをいつて堂々夜間攻撃も敢行すれば、小部隊をもつて敵の大編隊に對して勇



猛な撃滅戦も断行出来たのである。

さらにわが戦闘隊に、徹底的敗北をかさねた英戦闘機スピットファイヤーや、パツファロー、ハリケーンにしても、或ひはビルマ戦線に姿を現はした米のカーチスP40戦闘機にしても、敵がほこるだけあつて、わが戦闘機からみればまさるこそすれ、決して劣らぬ優秀機で、火力装備速力ともに世界戦闘空軍の一等級のものである。

これらに向ふにまはし、見事撃墜破の偉功をたてたのは、實に日本空軍獨特の操縦性能と戦闘技術の威力であつた。

わが陸の荒鷲はどんな訓練を積んだか。

若き戦闘操縦者たちは、異口同音に、「實戦はらくだが、平時の演習の方がかへつてくるしくて困難だ」といふ。

この理由は、どんな優勢なる大編隊の敵と遭遇しても、平時鍛えた訓練とほり喰ひさがつて一機々々叩きおとしてゆけば、邪魔ものはなくなるが、平時の戦闘訓練は、いつまでも敵機が残つてゐるばかりでなく、その敵機（假想敵機）との空中衝突をさけることまで考へねばならないの

で面倒だ、と、うれしい悲鳴をあげるのである。

この言葉は、わが荒鷲だけが吐ける苦情である。これでこそ生死を超越し航空無敵陣がはれるのである。また、このやうにして行はれる訓練は、いかなる場合でも真剣でなければならぬ。空で行はれる訓練であるから一步を誤れば死である。うまく行つても不具者となる。誤つたとおもつて改められるのは地上訓練のことで、空では誤つても改めることがゆるされない。誤つたときにはすでに終止符がうたれるときである。つまり絶対にやり直しが出来ないのである。このことだけでも空の訓練の真剣さがうかがはれる。

この事實は、戦闘訓練でも、航法訓練でも、また爆撃訓練でも同じである。

操縦訓練といふとむつかしく聞えるが、航空教育から見ればごく初步の訓練で、つまり空をとぶことで離陸、航行、着陸の各操作のことであるが、一人前の荒鷲になるためにはとびながら戦闘しなければならぬ。こゝに恐るべき錬成の日が集積されねばならないのだ。操縦だけでは戦場にゆけない。戦闘隊のものは空中戦闘と射撃、爆撃隊のものは爆撃術や空中戦闘射撃といった調子で嚴肅な錬成をつまねばならない。



空中射撃は、自分も動いてゐる上に、相手も高速の動的目標であるところへ氣壓や風速の關係も手づたひ、火の出るやうな訓練をしなければ腕のよい戦闘士にはなれない。

この射撃訓練にはまづ浮標的といふ海上の標的を目標に訓練し、ついで布板的といふ地上の布板に向つて射撃を練り、最後に吹流式的の射撃訓練に入るが、うっかりすると吹流しと正面衝突だ。しかし、目標を出来るだけ近迫しなければ一發必中彈を浴びせることが出来ない。まことに衝突と命中は間一髪といふところ、しかるに自分と目標との關係位置は何百分の一秒かで狂つてしまふ。これを飛行機を操縦しながら照準しなければならぬ。かくして「見敵必墜」の荒鷲が養成されたのである。

爆撃訓練でも同じで、一發の必中爆彈を投下するためには速度、高度、進度を正しく保持しつゝ電鍵を押さねばならない。もし押す時間が一秒でも狂へば一秒間の飛行速度だけ目標からはづれる。これが十メートルや二十メートルではなく、普通の場合で百メートルは目標から外れるのである。

この瞬時をあらそふ爆撃行は、むらがりかゝる敵戦闘機を攻撃しながら、地上砲火の彈幕を冒

しつゝ照準眼鏡をのぞいて行はねばならない。必中彈からして、シンガポール空軍基地や、軍事諸施設を爆破炎上せしめ、高度の武装を豪語せしめたシンガポール軍港をつひに眞ツ裸にしたも同然の大戦果をあげたわが爆撃戦隊は、これらの困難を克服して必爆鐵壁の訓練をつんできたのである。

### (三) 轟沈の驚異

轟沈した米英二戦艦の防禦装甲——不沈戦艦ウエールズ號の正體——米ウエヌト、ヴァージニア號の防禦装置——これからの戦艦

わが海軍が渾然たる精神力と技術とをもつて、不沈戦艦であつた等の英東洋艦隊の旗艦プリンス・オブ・ウエールズ號と戦艦レパルス號と、改装後は防禦能力を一新したといふアメリカのウエスト・ヴァージニア號を屠つたことは、わが海軍力の眞價を發揮したものととして、列強専門家の驚嘆の的、はやくも戦艦無用論さへ擡頭しようとしてゐる。

戦艦ははたして空軍の敵ではないのか。不沈戦艦の正體をあばき、二艦の防禦配置から調べて



ゆかう。

プリンス・オブ・ウエールズ號こそは、英海軍が傳統と誇りをもつて、その技術をかたむけて建造した云はゞ英海軍そのものを象徴する最新鋭の主力戦闘艦であつた。かのビスマルク號の追跡に一役買ったキング・ジョージ五世號とは姉妹艦で、わが昭和十六年四月に竣工したばかりである。

防禦装甲の重量が、排水量の三十パーセントにすぎなかつた英のクインメリー號が、砲塔の天蓋をつらぬいた獨の三十八糎弾一發で轟沈したことから、プリンス・オブ・ウエールズ號は装甲部分の重量配分を四十パーセント程度にたかめてゐる。

その一方、これがために速力や航続力或は攻撃力などを犠牲にしまいと、あらゆる最新の技術をかたむけ、前大戰當時にくらべて艦體では約六%、機關では約四%、計十%以上も重量を軽減した。

またその機關は、比較的新しいネルソン級に比較しても、なほ十五%輕重であるといふ、そればかりではない。この艦が普通なら四十糎砲九門あるひは三十五糎砲十二門積むところをいか

に威力が従來の三十八糎砲にまさるとはいへ三十五糎砲をわづか十門にとどめ、しかも種々の技術的困難を冒して世界最初の四聯裝砲塔を採用したのは、もつばら武装重量を節約して防禦にふりむけようとしたためにほかならないのである。

四聯裝では二聯裝砲塔にくらべて、砲一門あたりの装甲重量が約十五%へつてくる。くはしくいふならこの四聯裝砲塔は側面に厚さ三十八糎前の防楯には、四十糎の鋼板をはりめぐらしてをり、一基の重量は一九五〇噸、もし、このかはりに二聯裝砲塔二基をすえると、その合計が二千三百噸になる。かうして差引き、三百五十噸前後二基の四聯裝砲塔で、合計七百噸だけ重量や容積をへらし、その分は重要な甲板とか艦側の防禦にあてようといふのである。

ちかごろの戦艦は、貫徹力の大きい五百—千疋重爆弾や、三萬メートルの彼方から大角度でおちかゝる重さ一噸以上の砲弾にさらされる。したがつて甲板防禦をとくに重視し、これに割く重量の艦側防禦重量に對する比率は、前大戰當時の三十パーセントからいまでは百%以上にふえてゐる。

プリンス・オブ・ウエールズ號は、甲板防禦に非常に強靱な獨得の鋼板をつかひ、厚さ十六糎



の装甲を幾層にもほどこして砲弾をくひとめ、爆弾なら一噸半のものでもはじきかへすといきまいたものである。

下甲板の装甲は、椀を逆に伏せたやうに機關部、火薬庫を覆ひ、これとV字形に接続してゐる。艦側の防禦は、吃水線附近を前部主砲塔から後部主砲塔にかけて、約百七十米の長さになり、厚さ四十種鋼板をはつて萬全を期してゐる。

このやうにして、甲板と艦側の防禦には約一萬四千噸の装甲を費し、その上、ちやうどバルチを艦の内側へとりつけたやうな工合に、舷側附近の艦内に縦横に幾段もの仕切りを設け、魚雷や機雷にやられた場合、その被害を局限して沈没をふせぐやうになつてゐる。

この不沈戦艦が沈んだのである。ドイツもなしえなかつた戦艦の撃沈だ。

アメリカのウエスト・ヴァージニアはどうかといふと、この艦も、速力を犠牲にして防禦に力瘤を入れる米海軍の傳統をつぎ、主要個所の装甲は、英國の舊式艦よりも五種ほどあつた。

砲塔の要部は四十五種、煙突の附根は三十八種、吃水線附近が三十五種で、さらに建造費以上の費用をもつて改装に改装をかさねてゐる。橋は強固な日本式の檣橋にかへ、水平防禦と水中防

禦とを、とくに強化して、魚雷の被害軽減につとめるといつた工合である。

この改装にとりかゝる前のこと、米海軍當局は高熱爆薬をつめた魚雷や爆弾をつかひ、戦艦の念入りな實地破壊試験をくりかへしたことがある。

その結果からして艦内の隔壁や装甲について特殊の構造を編み出し、戦艦の改装はすべてこの方針に従つたので、いまやいかなる攻撃に對しても絶對の安全を保障出来るやうになつたと揚言してゐたものである。その試験がどんなものであつたか、何を研究してゐたのか、——わが空中魚雷や爆弾や海の荒鷲の前には一たまりもなかつたではないか。

いま、三萬五千噸の戦艦では、いかに技術の粹をかたむけても速力、航續力、砲力の致命的な犠牲なしには、魚雷や爆弾に對して不沈性を確保出来ないといふのが列強専門家の結論のやうだ。

それで、現在の攻撃兵器に對しては、まづ四萬五千噸もあれば、どうにか沈むまいといはれる。この四萬五千噸艦の内譯は、艦體が一萬三千七百噸、武裝が七千六百噸、機關が三千三百噸、



糧食などに九百噸、最後に装甲に對しては二萬百五十噸で、實に排水量の半分にちかい四十%を占めることになる。

なほ、この艦は三十八種の主砲八門を有し、十一萬馬力で二十七ノット、十八萬馬力で三十ノットの高速を出す。

そこで問題は、英ではライオン級、テメリア級、米では新ヴィンソン案によるマサチユセツツやアイオワ級、モンタナ級などの四萬五千噸或はそれ以上の巨艦が豫定をくり上げて着々と建造を急いでゐることである。

いづれも今度の大惨敗によつて設計に大變更を加へることは必定で、數年後にはそろつて太平洋上にすがたを現はし、捲土重來するであらうことをわれらは忘れてはならないのである。

#### (四) 空中魚雷のいつ

英國は世界魚雷界の本山——空中魚雷はアメリカの發明——狙へば巨艦も金縛り——魚雷の走り方

今度の戦争で一躍空中魚雷が、世界の注視をあびるやうになつたが、まづ米英の魚雷から申し上げてみやう。

英のホワイトヘッドといふ會社が世界の魚雷界の本山といふことになつてゐる。一九三九年の三月に英のホワイトヘッドにおける製作その他に關しての記事を雑誌に數回にわたつて詳細に發表してドイツ其の他に大いに宣傳したわけであつた。

ところがアメリカのはうは英とちがつて、魚雷のはうは多少劣つてゐた。従來アメリカの魚雷は、タービン魚雷を使つてゐるが、英のはうでは噴水加熱式といふ内燃機關とはちがふが、一種の蒸氣機關に類似した非常に強力なエンジンを使つてゐる。現在使はれてゐる魚雷の大きさは、大體小さいので十八インチ、それから驅逐艦、潜水艦が使ふのが二十四インチといふ三種類のやうである。

戦闘艦に對しての魚雷としては、二十四インチ・クラスでも、なほ火藥量が足りない。それで火藥の量が五百キロ乃至それ以上ある超大型魚雷もほしいといふやうな意見が一時出てゐたのであるが、あまり大きいものになると、遠距離發射になつて、命中率が少いといふのでまたもとに



戻り、現在のところ二十四インチといふのが、極限になつてゐる。

しからば空中魚雷は——この空中魚雷を考へつたのは皮肉にもアメリカが最初である。一九一二年に、アメリカの海軍少将フィスクといふ人が特許を取つたのである。さうして一九一六年、前大戦の時イギリスが實際にこれを使い、ドイツの商船二隻を沈めたが、ドイツ側でもイギリスの汽船ジエナ號を沈め、商船その他に對しては空中魚雷が相當有效だらうと考へられてゐたわけである。

しかし、軍艦に對しての効力は、十八インチ程度の魚雷ではどうかといふやうな意見があつたが、何しろ二千メートルぐらゐの距離に近づいて落すので、ほとんど軍艦は逃げることは出来ず、約半分ぐらゐは當るといふやうに命中公算がいゝから、各國とも非常に研究してゐたわけであつた。

十年ぐらゐ前までは水面二三メートルぐらゐまで降りて射たぬと、魚形水雷が毀れてしまふといふ缺點があつて、各國ともだいたいぶん閉口したが、研究の結果、現在では大體〇メートルぐらゐの高度から落しても少しも、毀れない魚雷が出来てゐる。今後飛行機の發達につれて、ますます

す盛んに使はれることゝおもふ。

それから魚形水雷を發射すると、航跡が見えるので、その航跡をなくすることについて、各國とも苦勞してゐる。アメリカでは電氣魚雷といつて、直径六十三センチ半、インチでいへば二十五インチ、長さ七メートル六百、火藥を三百二十キロもつて、二萬メートルの距離を走らせることが出来るものを發表してゐたが、その成果はまだよく分つてゐない。

最近イギリスではエレンといふ人が水素原動機を研究して、六百馬力の魚雷用酸水素エンジンをつくつたが、實際にはまだ魚雷につけるまで行つてゐない。

また魚雷の發射距離はどれくらゐがいゝかと云へば、あまり接近すると、深くへ入つてまだ浮上らないうちに、軍艦の底をぬけてしまふといふやうなことがある。日清戦争の時、支那の水雷艇福龍がわが西京丸に近づいて魚雷を射つた。ところがあまり近かつたゝめ豫定の深度に達せず、船底をくゞつて西京丸は沈没をまぬかれたといふ事實がある。

魚形水雷は、飛行機でおとす場合も、あるひは船の發射管から射つても、初めは非常にふかく入り、暫く進んでから豫定の深度になつてくる。だからあまり接近するのはよくない。魚雷は〇、



〇百メートル行つたら、豫定の深度に達する、飛行機に装着する前に深度を調節しておくわけである。それは装甲のないところを狙ふのが目的である。魚雷の走る深度は大體四メートルから十六メートルの範囲で、これは敵艦によつて浅くも深くも調整出来るやうになつてゐる。

### (五) 平出英夫海軍大佐の獅々吼

世界を開く日本——生死超越の戦闘意識——民強くして軍強し——日本軍獨特の自爆——彼我戦闘意識の相違——職域奉公に徹せよ——一勝に安んずるなかれ

大詔渙發の日からあまり月も経たないのに、皇師の向ふところ敵なく、くろがねの護りは東西一萬カイリ、南北五千カイリの太平洋全域に儼としてゆるぎもない。その間、ハワイ海戦の大勝利、マレー沖海戦の大勝利、香港陥落、レキシントン號撃沈、マレー沖、エンタウにおける壯烈な驅逐艦戦における大勝利、蘭印艦隊主力を撃滅したジャバ沖海戦の快勝、シンガポール陥落、濠洲空爆等、今や世界第一海軍の名稱は、燦としてわが軍艦旗の荷ふところとなつた。全世界を

驚倒させ、世界史を書きかへんとする帝國海軍のこの強さの源泉はなにか。大君のしこの御楯として、利己をすて名を求めず、死をおそれず火達磨となつて敵艦とさしちがへる海鷲のこゝろのひろさ、勁さ、黙々として、鮫鰐の淵に挺身する特別攻撃隊乗組員の謙虚さに、その最高の表現があるのである。

ハワイ海戦、マレー沖海戦のうち、大本營海軍報道部課長として、一億の國民にいま問題の人物として名聲噴々たる平出英夫大佐の講演をこゝに掲録して見やう。同大佐の講演は「世界を開く日本」と題して、JOAKのマイクを通じて全國に放送されたものである。

### 世界を開く日本

海軍大佐 平出英夫

海洋國民が一たび海洋に對して重大なる決意をなす場合、それは歴史の轉換を意味いたします。大東亞戦争は正しく、日本民族が歴史の轉換を世界に宣告したものであります。

本日（昭和十七年一月八日）は、その歴史的大東亞戦争が火蓋をきつてから丁度一ヶ月にあ



たります。しかも記念すべき「大詔奉戴日」の最初の日であります。この日にあたり、帝國海軍の戦果の跡を回顧し、國民とともに、大詔にお示しあそばされた、御聖旨を奉戴し、自我功利の觀念をすて、一意盡忠報國の赤誠を新に致したのであります。

皇軍は今や陸に、海に、空に、眞に世界を震撼する大戦果をあげつゝあります。これ偏に、御稜威の賜にしましてまことに恐懼感激に堪へません。それと同時にこの戦果をもたらした陸海軍精銳の勇戦奮闘に對し、無限の感謝を捧げたいとおもひます。即ちわが精銳なる陸軍は、東京から數百哩も離れた香港、しかも全島要塞化され難攻不落を誇つた香港をわづか十二日にして攻略し、また千七百哩を隔てた比島に奇襲作戦を敢行し、二十四日にして首都マニラを攻略し、またはるか二千數百哩のマレー半島、或は英領ボルネオ等に作戦して眞に疾風迅雷、朝に一城を陥れ、夕に一壘を屠り破竹の進撃を致して居ります。緻密なるその作戦の妙、殲滅戰、空中戰、海上機動等戰鬥の巧みさ、將兵の猛勇等米英をして呆然自失せしむる實情で、海軍としても眞に感激に堪へません、かゝる精銳なる陸軍がいつこの國にありませうか。

一方海軍の戦ひぶりについて申し上げますれば、その作戦區域は東はアメリカ本國海岸より、西

は印度洋におよぶ東西一萬哩、實に地球の半周にちかからんとし、北はアリューシャン群島より南は赤道をこえて更に南温帶圈にいたる南北五千哩の海域にわたつてゐます。これは人類が戰場として想定し得た最大のものではあるまいか。かゝる渺茫たる區域に作戦するわが海軍は、開戦劈頭においてハワイにアメリカ太平洋艦隊を壊滅せしめ、またマレー沖にイギリス東洋艦隊の主力を撃滅し、さらに敵の通商も運輸も閉止せしめてゐるのであります。しかも帝國海軍の主力部隊は、開戦以來たゞの一回も敵の攻撃をうくることなく、勿論全然無疵のまゝに、儼然として太平洋上に敵を壓迫し敵を俯伏せしめてゐるのであります。

何故に、かくもわが陸海軍はつよいか、答はきはめて簡單です。御稜威の下、一億國民がつよいからであります。皆様が強いからであります。陸軍も海軍も國民から分離した別箇のものではありません。國民弱くしてどうして強い軍隊が生まれませう。われ／＼日本國民は肇國以來三千年、世界無比の國體の下に、聖天子を家長とする大家族としての強力なる國民生活をおくり武士道をもつて鍛へに鍛へ、一死奉公の精神をもつて一貫して今日に至つてゐるのであります。この無比の國體、この精銳なる國民にして初めてこの陸軍があり、この海軍がある。國



民強うして軍隊強しであります。

しかしながら陸軍にしても、海軍にしても、この驚異的大戦果の陰に人知れぬ苦心と努力、血のにじむ訓練があつたことを見逃がしてはなりません。

私は海軍について、一例を申し上げます。ハワイ海軍については、皆様はすでに新聞、ラジオによつて御存知のことですが、たゞ一つ付け加へたいことがあります。

ハワイ海戦に参加したある部隊の一部が、なつかしい某基地に歸港した時の話であります。それはその市民たちが戦争のはじまるまでといふものは朝となく、晝となく、夜となく、血のにじむ猛烈な訓練をつゞけてゐたのを誰よりもよく知つてゐたからであります。

その飛行場は、摺鉢の底のやうなところであり、周囲は山又山の岬々たる峻嶺があつて丁度眞珠灣のやうな恰好をしてゐます。その峻嶺の上空からまつさかさまに所謂釣瓶おとしに猛烈な急降下爆撃の訓練を毎日々々つゞけてゐた。しかも、この訓練は、朝市民がまだ起き出ぬうちからはじまり、朝食は飛行機の中でとり、午前の訓練がおはると晝食をとり歸つてくる

のであります。

だが、この晝食も飛行機の中でたべます。夕食もまた同様で三度の食事を飛行機でとるといふくらひ時間を惜しんで、たゞ一途に、「敵を叩きつぶすまでは死なぬ」といふ信念の下に、血みどろの訓練をしてゐたのであります。

こゝで一寸申添へますが、「敵を叩きつぶすまでは断じて死なぬ」といふのは實に海軍の傳統的な精神であり、訓練の目標でもあります。そして「この敵をやつつけるまでは死んではならぬ」といふ獨得の訓練が、この度のハワイ海戦の戦果となり、マレー沖海戦の戦果となつて表はれてゐるのであります。

ハワイ海戦で苦心したのは、その攻撃全體の成果を最大に發揮せんとして、當時十七メートルの強風の方向を考慮したことであります。即ちまづ魚雷攻撃からはじめ、それも最も風下にある戦艦からはじめて逐次風上におよぼし、次に急降下爆撃、最後にもつとも發煙量の多い大爆弾による水平爆撃にうつつてゆきました。その間にわが飛行機群は、風下から先に敵の航空基地を叩き、しかも風下にあつた敵の飛行機列線から順次に風上の列線を銃撃して炎焼せしめ



たのであります。

百萬トンに及ぶ石油タンク群はきはめて著明な目標を與へてゐたが、石油タンクは一度これを爆破すると、黒煙天に冲して他の攻撃を妨害する危険があるので、これに手をつけてゐません。

その全般を見て感ずることは、敵弾も何もこない運動場で爆撃訓練をしてゐると何ら異らない氣持であります。しかもその間で皆さん御覽になつたやうな寫眞や、映畫を撮つて來て居ります。勿論撮影のための飛行でなく急降下の實施中にまでも撮影してゐるので、見るものも非常な速度で激動してゐるやうな感じをうけたほどであります。

當時ハワイにあつて、わが軍の攻撃を目のあたりに見、身をもつて體驗したアメリカの一記者は當時の様様をかう語つて居ります。

「眞珠灣に目のあたり見た見た日本軍の威力は、私をしてアメリカの日本認識が半世紀以上おくられてゐることを痛感せしめた。われわれはアメリカ政府要路者と同様過去五年にわたる支那大陸の戦争が、日本の軍事、政治、經濟力に重大な消耗と疲弊をもたらしたと信じてゐたが、事

實はこの五年の歲月こそすくなくとも日本軍勢力を世界無比たらしめたものである。その戰鬥力の旺盛さ、攻撃武器の優秀さ、敢闘的氣魄の充實かうしたものは過去五年支那大陸で鍛へ上げられたものでなくて何であらう。なかでもその敢闘精神は、凄絶といはうか、悲壯といはうか形容の言葉を知らない。

火を吐く機體を繰りながら阿修羅のやうな猛攻をつゞけ、いまは最後と知るや一團の焰となつて目的物に突ツ込んでゆく。日本軍獨特の自爆を満身の血が逆流するやうな氣持で目前に見た。

そして感じた。日本軍自爆は決して生命を輕んずる自暴自棄な猪突でないといふことを。これこそ日輪とともに育つたサムライの國の軍人のみがなし得る崇高にして嚴肅な戦ふ心の現れでなくてなんであらうか

といふのであります。

ともあれ、かゝる沈着、豪膽なしかも勇猛果敢な攻撃は、普通の訓練や教育ではできるものではありません。ハワイ海戦においても、マレー沖海戦においても、



「敵を倒すまでは死んではならぬ」

と紅い頬を緊張させて、一分間何萬發と降り注ぐ彈幕の中へ突入して行つた彼等であり、その翼はとくに傷き、或はその身も彈に射ち抜かれてゐたかも知れません。唯、敵を倒すまでは「一念が凝つて魂だけで突撃したものもあつたことであらう。「死ぬ」といふことは易い。だが敵を倒すまでは死んではならぬ」といふこの精神！崇高と申さうか、莊嚴といはうか、大和民族にして初めてなし得る。そこにこそ我々は日本民族の「強さ」「偉大さ」があるのだと信じます。

また「特別攻撃隊」に参加した勇士達は出發前「必勝」「成功」「敵を倒す」等の文字言葉はしばし用ひて居りますが「決死」「生還」「生死」「生命」といふがごとき文字は全然使つてゐないのであつて、この部隊を「特別攻撃隊」と名づけ決死隊といふ呼稱を使はなかつた所以もここにあります。すべての乗員は生死をはるかに超越してゐました。この勇士たちは、いかにして、敵を倒すかの準備や計畫は周到緻密を極めたのでありますが、歸還の場合の方法とか、約束などは一切うはの空でんで眼中になかつたやうであります。これに較べて敵の戦闘

意識はどうであつたか。

開戦當時上海にあつてわれに降服し、わが軍艦「多々良」とかはりました米艦ウエーキ號にはなんと二ヶ年分の贅澤なる酒が蓄へてあり、またマレー方面においてわが陸軍部隊が一地を占領したときに、樽から水を出して戦塵に汚れた顔を洗はうとすると、それが香も豊潤なウキスキーであつたといふ話、或はイギリス兵が自動車によつてのみ行軍を行つてゐたため徒歩兵戦に失敗した事實、さらにアメリカ潜水艦が乗員たちの平素の贅澤の結果、あの不自由な艦内生活にたへきれず、自然その行動も不活潑となり、單に命ぜられた期間出動してをれば、その義務が終るものと考へてをるらしくおもはれること等の例からしても、彼我の間に雲泥の差のあることをはつきりと知ることが出来るのであります。

また、かういふ例もあります。昨年の秋アメリカの驅逐艦ルーベン・ゼエームス號がドイツ潜に撃沈され乗組員全員が溺死したことがあります。この報が一度アメリカに傳はるや、海軍志願兵は半減するに至りました。しかるにわが國では、開戦ととも海軍志願兵は三倍乃至四倍に激増するといふ頼もしくも力強い傾向を示してゐるのであります。



この戦争のかうした経験から痛感することは贅澤なる生活或は自己の幸福のみを追及する生活態度は戦争にまける有力なる原因となるといふ一事であります。

敵の日常生活に見る戦闘意識と、我軍のそれを比較して、いまさらのやうな感慨を新たにするのであります。贅澤と利己心簡素と犠牲的精神、われ／＼はこの顯著なる對照とを銘記しなければなりません。

かゝる血のじむ猛訓練と、旺盛なる戦闘意識をもつて、緒戦において早くも戦局の大勢を決したかにみえます。さすが傲岸なるチャーチルでさへ「米英兩國海軍の共同作戦の餘儀なきに至つた」と告白してゐるほどであります。聯合軍の弱味は昔から明なる事實であります。もし米英兩國海軍合併して我に襲ひかゝらんとするならば、長期戦を覚悟する帝國としては、この戦争を一舉に勝利にみちびきうる最良の方法を考案してくれたチャーチルに感謝状でも贈らねばならないことになりませう。

イギリスの誇りとせる艦隊をアメリカのハート大將の指揮下におきやがて英海軍が米海軍に吸収せられ、日没することなきを誇つた英帝國のアメリカに合邦せらるゝ端緒をひらくことは

傲慢なるイギリス人そのものは果して何と見るでありませう。

ともかく米英は、つひに西太平洋に三軍を統一提携するに決し、米海軍のハート大將をその海軍最高指揮官に任命したが、當のハート大將は何故か開戦以來杳としてその姿を見せません。わが方は陸軍大部隊の海上輸送を始めとして開戦當時アメリカの沿岸にあつた數隻のか弱い商船でさへ、戦時下の太平洋數千哩を乗切つて、無事歸國して居ります。これは何を意味するか。太平洋の制海權は今やわが手にありといふも過言ではありません。

今次の戦争は國民諸君が一人と一人の相撲を棧敷で見ているといふ生やさしい相撲ではありません。全國民一人残らずが土俵に上つて全體となつて戦ふ相撲であります。言葉をかへていへば破壊戦、消耗戦でなく、國家總力による生産戦であり、建設戦であります。この意味において今後の戦争遂行上銃後といふ觀念は修正せらるべきだとおもひます。その生産のため、建設のため、國民のなすべきことは、一に各自がその職務を遂行すると同時にお互に他の職域職務に對し十分なる理解と尊敬の念をもつて協力し全體の力を十二分に發揮して總力戦の本義を徹底すべきだと考へます。



この一ヶ月のうちに天下の形勢は百年以上の飛躍をなしました。百年前の考へでは萬事手遅れとなります。従来ともすれば、陥り勝ちだった個人を主とした考へ方から氣宇を天下國家に引き揚げてこの一大進運に遅れず、歴史的なこの國家總力戦から取残されぬやう心構へをすることが肝腎であります。

また、警戒しなければならぬことは、次々の勝報に有頂天となつて、南方資源は明日にもたんまり日本に輸入され、物資の缺乏は直ちに解消されるが如き安易な心持に墮してはならぬこととであります。この際は今日の不自由はなほ續くものと覺悟し、不拔の力を蓄へて將來雄飛の下準備をすることを賢明とおもはれます。

帝國海軍は一度正義の御戦發せらるゝや、天佑神助の下この準備とこの訓練とこの信念とをもつて帝國海軍はその分擔する部門においては今日のごとき戦果を擧げ得ることを誰一人疑ふものはなかつたのでありますが、唯一つの心配は武力戦以外の所謂總力戦において帝國國民がいかにか戦ふかの點にありました。しかるに今や大詔は渙發せられ全國民火の玉となつて奮勵し總力戦に關しても何等の心配を必要としない境地に突き進んでまゐりつゝあることはまことに

感激に堪へないところであります。

今や大東亞戦による世界平和確立の大波紋は、米英の世界制覇の總意を擊碎するまでは斷じて收まらないのであります。外敵を打破る部門は我々軍人が誓つて國民の信頼に應へ得ることを信じます。どうか武力以外の部門、ことに生産や建設の雄大なる事業については各々その職域に従つて大いに力を揮つて頂きたい。そしてこの軍事的大戦果を建設戦争の意味において十二分に全うして頂きたいのであります。

「一勝に安んずる勿れ」これが我々の信條であります。勝利の感激の大なることは私共もまつたく同感であります。その興奮も、感激も須らくかゝる建設的方面への献身的努力、己を空うしたる精勵の形によつて強く表現せらるゝことこそつとも望ましいこととあります。

國民の皆さん、假令大東亞戦争が長期戦になりませうとも、その大體の趨勢を決定する極めて重大なる年であります。我々はかゝる神國に生を享けた光榮、かゝる時期に際會したる歡びをもつて、今こそ軍官民の差別なく全てが一つ心にとけあつて大君に歸一し奉らねばならぬ時期だと存じます。軍艦旗の進むところ、そこに大和民族の發展があり、そこに新世界の創造が



あり、世界新文明の出発があります。實に洋々たる帝國の、そして大和民族の將來ではないか。

## 日本と世界大動亂

### 一、獨ソ開戦の真相

#### (一) 獨ソ火蓋を切る

不氣味ならみ合ひ——戦火飛ぶウクライナの宿命——ヒトラーの筋書——獨  
軍の總動員數一千万——獨對ソ宣戦布告——伊も對ソ宣戦布告——ルーマニア  
も宣戦進撃——フィンランドも行動開始——獨空軍大舉爆撃開始。

一九四一年の六月中旬頃から、獨ソ開戦近しとの噂はすでに流布され、續いてドイツ軍隊の東部國境への移動などとともに、獨ソ關係の緊迫化をしきりに傳へたが、ソ聯政府はこれをもつて荒唐無稽の笑ふべき浮説として黙殺して居つたのであつた。すると、六月十三日モスクワの放送局はこの浮説に關するソ聯當局の重大聲明を發表すると同時に、タス通信社を通じて全世界にそ



の内容を打電して、ソ聯の態度も明確にし多大のセンセーションを捲き起したのであつた。その聲明は相當長文のものであるが、「要するにかゝる浮説が全く事實無根で獨ソ兩國は獨ソ不侵略條約を忠實に實行しつゝあり、従つてまたドイツは最近ソ聯に對し何ら新たな要求を提出してゐる事實は全くない」と稱して、すべてをひた隠しに隠してゐたものである。それ故かゝる浮説が立つても誰一人これを事實と信するものはなく、その報道は全く虚偽であり挑發的なものであるとしか考へなかつたやうである。

事實はどうであつたか。事實はそれまで順調に進捗してゐた獨ソ交渉が六月十日に至つて停滯するに至つて實に險惡にして不氣味な空氣がたゞよひ始めてゐたのであつた。ドイツはバルカン作戦を終了した後、現在ドイツの東部及び北部地方に軍隊を移動し、その他の諸行動と共に全く對ソ戰の態勢すら整へつゝあつたのだ。一氣呵成にフィンランドにも獨軍は駐屯した。これと共にフィンランド政府もドイツと密かに機脈を通じ十三日夜より外國人のフィンランド北部國境地域への旅行を制限した。ルーマニア政府も同日一般人は地方警察官憲發給の特別許可證を有するもの以外は、國內を汽車旅行すら出來ぬやうに發令した。かゝる旅行制限は一月暴動勃發直後施

行されたことがあり四月に入つて制限が解かれたものであるから、今度の禁令は雷ならぬ氣配を感じせしめないではゐなかつた。

この間にドイツはもう獨ソ國境に百箇師團の兵を集中し、ソ聯に對して重大要求を提示してゐた。それを消息通は左のごとき交渉内容であつたと云つてゐる。

- 一、穀類ならびに石油の對獨給付問題
- 二、トルコ參戰の場合におけるソ聯の立場
- 三、ソ聯國內における對獨武器通過許可の問題

等で、交渉の結果ソ聯側に悉く否定されたために、ソ聯はその内部的弱點の暴露を意味する大讓歩をするか或ひは武力に訴へてまでも抵抗するかの關頭に立つてゐると傳へられたものであつた。ウクライナ、コーカサスの資源を經濟的に確保することは、歐洲新秩序に絶對的に必要であり、ドイツの理想であつた。しかし、ソ聯の立場から見ればこれが交渉により成立するとは考へられない。獨ソ關係の緊張はこの點から豫想され、今後果していかなる發展を示すかは、ヒットラーの決斷一つに懸つてゐるといつてもよかつた。



獨ソ兩軍が砲火を交へたのは、六月十八日ソ聯西部國境十五箇所において攻撃したのに始まつてゐる。同日、ドイツはソ聯に對して左記二ヶ條を要求せる最後通牒を發した。

- 一、ベツサラビア地方をルーマニアに還付すること
- 二、ウクライナの小麦ならびにソ聯全土の原料品をドイツに供給すること

而してこの最後通牒に對する回答に接しなかつたドイツは、前記の地點に於て一齊に攻撃を開始した。一方ドイツと連絡したルーマニアもソ聯に對してベツサラビア返還を要求し、フィンランドも不測の事態に對處すべく、軍全體は完全に武装して待機の姿勢をとり、獨軍は諸咸西海岸に多數の兵力を集結した。

事態がこうなつてしまつては雨か風か何らかの一大轉回を見なければならなくなる。六月二十一日、つひにドイツ政府はソ聯との外交關係を斷絶、ヒトラー總統は即時全國防軍に命令を發し、獨ソ國境のソ聯軍に對抗する萬全の戦備を整へた旨を發表したのである。翌二十二日の早曉リツベントロツプ獨外相は、ラヂオを通じて、ドイツの對ソ宣戰布告を放送したが、ヒトラーは同時に獨軍に對してソ聯進撃を命じた。

また、ヒットラーもラヂオによつて全世界に向つて布告を放送した。この布告においてソ聯政府を痛烈に非難したのち、

「ソ聯の度重なるドイツ國境侵犯は、もはや默視し得ない。余はドイツの國運を獨軍隊の手に委ねた」

と斷言してゐる。この布告の放送が終つてリツベントロツプ外相が、マイクを通じて對ソ宣戰布告を読み上げた。まづヒットラーの布告内容から掲げて見やう。

英國の對獨包圍政策に對抗して工作するため、モスクワへドイツ大使を派遣することは余にとり厄介な仕事であつた。余は最後には緊張を除去することが出来るものと望んでゐた。ドイツは、リトアニアを占領しようと考えたことなど決してなかつた。ポーランドの敗北に際して余は再び英佛に向つて和平提案を行つた。しかるに英國は歐洲連衡達成の望みを棄て切れなかつたため、余の提案を拒絶した。そしてクリツプス（駐ソ英大使）をモスクワへ派遣したのである。彼は結局のところ、モスクワ政府と或種の協定に到達しようとした辯務官であつた。しかもソ聯はこれらの諸國（明らかにバルチック三國）を保護してゐると常に虚偽の聲明を發表



してゐた。

ソ聯のルーマニアに對する要求とギリシアの對英連携とは新しい廣大な地域を戦火に捲込む危険を増大させた。しかしながらルーマニアは殘餘の領土に對する保障を獨伊から得られるならば、ソ聯の割譲要求に應ずることが出来ると思つた。余は重い心をもつて、この申出に同意した。なぜならドイツがルーマニアに保障を與へなければルーマニアはそれを履行するものと考えたからである。われ／＼はイギリス人でもなければユダヤ人でもない。余はモトロフにベルリンへ来るやうに申込んだ。彼は事態の解明を要求した。彼は訊ねた。

「ルーマニアに對する保障は同時にソ聯に對して備へるものか」

余は答へた。「あらゆる國に對して備へるものだ」しかもソ聯は、ソ聯自體がルーマニアに對して遙に遠大な意圖を藏してゐたことを一度もわれわれに告げなかつた。モロトフは質問を續けた。「フィンランドは又もやソ聯を脅かしてゐるが、ドイツはフィンランドを援助しないことに決めてゐるか？」余の答へはかういふものであつた。「つまりドイツはフィンランドに政治的利害關係は有してゐないが、フィンランドが再び攻撃されるやうなことに堪へられない。殊

にわれ／＼はフィンランドがソ聯を脅かしてゐるとは信じない」

モロトフの第三問は「ドイツはソ聯がブルガリアに保障を與へることに同意するか？」といふのであつた。余は「ブルガリアは獨立國家である。余はブルガリアが保障を要するかどうか知らぬ」と答へた。モロトフ曰く「ソ聯はダーダネルス海峽を通る通路を必要とし、ボスボラス海峽の數箇所に基地を要求する」

それから二、三月後にソ聯はトルコと友好條約を締結した。これはセルビア族の反獨精神を刺戟するためであつた。モスクワはセルビア人軍隊の動員を命じた。余がなほも沈黙を守つてゐる間にクレムリンの者どもはさらに一步を進めた。ソ聯はドイツに敵對する諸國に對し軍需資材を供給せんと申入れた。これは余が松岡（日本外相）に對して日ソ間の緊張を緩和するやう勸告したのと同じ時であつた。セルビア人の士官連はソ聯へ飛びそこで同盟國の將官として待遇された。しかし、バルカン半島において先づ樞軸軍が勝利を収めたため、ドイツを長期戦に捲込んでそれから英國と協力して米國からの物資供給を待みに、ドイツを窒息せしめようとした計畫は空しくなつた。



今や余がかゝる事態の推移を看過し得ない秋がきた。それ以上待つことはドイツに對する罪惡となるであらう。過去數週間にわたつてソ聯はしばしばドイツ國境を侵犯した。ソ聯機は幾度も幾度も國境を突破し、ドイツ領土の上へわがもの顔に飛來した。六月十七日の夜と十八日には大規模な偵察飛行を行つた。ドイツ軍今回の進撃はその規模に於て前例なきものである。フィンランド軍とともにわれわれはナルヴィクからカルパチア山脈に至る擴大な戦線を守つてゐる。ドナウの流れと黒海の岸にはアントネスコ（ルーマニア首相）の上にドイツ軍とルーマニア軍とが團結してゐる。われわれの任務は歐洲を防衛し、かくしてすべてのものを救ふことにある。それゆゑ余は今日ドイツの國民およびドイツ國家ならびに歐洲の運命を再びわがドイツ兵士の手<sup>ゆだ</sup>に委ねるべく決意したのである。

次にリツペントロップ獨外相の對ソ宣戦布告の放送は左のごとくである。

余は今朝デカノゾフ駐獨ソ聯大使を引見し「ソ聯軍によりドイツ國境は侵略の脅威をうけつゝあるにかんがみ、ドイツは軍事的防衛措置を講じた」旨言明した。ドイツは嘗て一九三五年夏、ソ聯と明確なる諒解に達した。主權を有する國家と諒解することは可能であるが、ソ聯は

世界共産黨に所屬する政黨により支配された國家であつた。ドイツの國家社會主義とソ聯のボルシェヴィズムとは水と油のごとき關係にあるに拘らず、ドイツがかゝる對ソ諒解の工作に乗出したのは並々ならぬ苦勞であつたが、ドイツはボルシェヴィズムとユダヤ人の勢力をこれ以上擴大せしめないためには獨ソの諒解が最善の保證であると信じたからである。

そして獨ソ諒解はソ聯内にかゝるドイツの欲するがごとき傾向が現はれたため一層強化されるに至つた。ドイツの政策はソ聯によつて理解されたごとくに見えた。

かくて一九三九年に獨ソ間には二つの條約が締結された。右條約は次の内容を含んでゐる。

一、獨ソ兩國は相互に攻撃を加ふべからず。

二、兩國は相互の利益圏内に干渉すべからざること。

かくてフィンランド、バルト三國、ポーランドの一部およびルーマニアの一部がソ聯の勢力圏内に入ることが宣告され、ドイツは對ソ條約を忠實に履行した。さらにポーランド崩壞の後を通じてドイツのソ聯援助には大なるものがあつた。ドイツはソ聯と善隣關係を結ぼうと希望した。しかし、これはドイツ政府の大なる誤算であることが間もなく明かとなつた。



コミンテルンはます／＼活動を活潑化し、ドイツに對しても働きかけた。しかし、ソ聯は表面上の條約違反を避けるためにその方法を變更した。彼等はドイツの自衛的活動を目して帝國主義的戦争と呼んだ。彼等はドイツ警察の整備せるにかんがみ迂路を選びドイツの崩壊を目指してゲ・ベ・ウは組織的に働きかけ、ドイツ人共産主義者を訓練した。ソ聯の外交官および領事館員はこの惡辣なる仕事に多大の援助を與へたのである。

かくしてソ聯當局も同月二十二日シユールンブルグ駐ソ獨大使が、獨ソ間に戦争状態の存在する旨の通告をクレムリンに示達すると同時に、赤軍に對し「侵略者を阻止攻撃、ソ聯國境より驅逐すべし」との命令を發した。また、モロトフ外相は、ラヂオによつて、獨軍が對ソ攻撃を開始した旨を發表し、同時にソ聯全國民が最後の勝利まで戦ひ抜かんことを要請したる後、次のことく聲明した。

ドイツ軍は二十二日午前五時ソ聯政府に對し何等の理由を説明せず、宣戰の布告もなくしてソ聯國境を幾多の地點において突破侵入を開始し、獨空軍はキエフその他のソ聯都市を爆撃二百名以上の死傷者を出した。ドイツ軍の陸空よりする攻撃は、先づフィンランド、ルーマニア

國境より開始された。この攻撃は獨ソ間に存する不侵略條約を無視したものであり、ソ聯は今日まで同條約を文字通りに遵守してきた。

駐ソ獨大使は今朝午前五時半ドイツ政府はソ聯と開戦決意をなした旨報告し來つた。余はこれに答へて最後の瞬間までドイツ政府はソ聯政府に對して何等の不滿も要求をも提出し來らず、ソ聯の平和的意圖を無視してドイツは攻撃を開始したものであることの想起を求めた。ソ聯飛行機または軍隊が獨ソ國境を犯して越境したなどの事實は全然存しない。ソ聯空軍がルーマニア飛行場を爆撃したなどは事實無根である。ヒットラー總統の布告は全く虚偽であり、挑發である。赤軍の獨軍に對する反撃命令は獨軍の攻撃が始められてのち發せられたものである。ソ聯に戦争を強ひたのは、ドイツ國民ではなく、ドイツの指導者である。赤軍の陸海空の勇士は各々その義務を完遂することを信じて疑はない。ヒットラー總統はナポレオンの運命を想起すべきである。

モロトフ外相はこの演説放送に當つて、興奮の餘りしばらく息切れがして言葉を途切らすのがいかにも痛々しさうであつた。



かくしてつひにソ聯も世界大戦に突入したのである。續いて伊政府も對ソ宣戰を布告し、ルーマニアも宣戰布告と共に進撃し、フィンランド軍も獨軍と協力、對ソ進撃の行動を開始したのである。

## (二) ウクライナ進入と全歐露の情勢

獨軍の先進部隊——覆面戦術の電撃成功——ソ艦隊根據地で殲滅——東プロイセン戦線——ヴィストウラ河戦線——オデッサ猛爆——ソ聯の總動員——リトアニアの獨立宣言——ブラスコウイツ將軍の登場——火の海の國境

獨ソの開戦、つひに來るべきものが來たのである。英獨決戦の息づまるやうな姿勢でドタン場まで押しつまつて來た最近の歐洲戦局の全局面を、グルリとドンデン返しをうつて舞臺を急轉せしめたものがこの一戦である。しかもこれはドイツ一流の「土曜日の電撃」だ。この発表があつたころは、北はフィンランド、南はベッサラビア、既に國境線をさし挟んで對峙してゐた獨精銳部隊は、堤を切つた怒濤のごとく東へ、東へと大進軍を開始してゐたのであつた。さすがに平靜を誇りとするベルリン市民も、少からず興奮してソ聯大使館の前へくると、市民が群をなして窓

を見上げ、拳をふり上げて何か怒號した。ベルリンには全く珍らしい所見であつた。

「裏切もの！」「こんどこそドイツの強さを腹いしばい味はつてくれ」「ユダヤ」口々に叫ぶ憎惡の眸、ドイツ國民はこんどの戦争をこれまでと違つた眼で見えてゐることがこの光景ではつきりわかるのである。

ドイツ空軍はまづソ聯エストン、ツイトミール（モスクワ南方七十哩）キエフ、セバストポール（クリミア半島）の各要衝に猛爆を加へ、死傷者二百名を出す一方、國境に待機中のドイツ軍精銳は、獨ソ國境各所より雪崩をうつてソ聯領に進撃を開始した。かくて戦火はフィンランドよりルーマニア黒海に至る二千五百キロに燃え擴がつたのである。ドイツ空軍もモスクワ始め歐露の全飛行場、要塞大爆撃を開始した。ソ聯空軍も東プロイセン地方に侵入せんとしたが、ドイツ軍の猛反撃をうけ多大の損害をうけ撃退されたのである。

ドイツ空軍は開戦の第一日において早くもソ聯空軍を制壓し、制空權確保に向つてめざましい活動を見せてゐる。これがためソ聯奥地の重要交通線並に連絡線は、廣汎なる地域に互つて破壊され、ソ聯空軍はドイツ軍の電撃的空襲に到底太刀打ちし得ざる情勢に陥つた。優勢なる獨爆撃



機は、ソ聯戦車部隊並びに砲兵部隊に痛烈果敢なる猛爆を浴びせて、その中の若干部隊は殲滅の慘を喫したのみならず、豫備軍を搭乗して前線に急行中の軍用列車は、隨所に爆砕せられ、戦略地點に集積されてゐた軍需品の山及び兵舎は、次々に爆撃粉碎せられ、各飛行場は蜂の巢のごとく爆破せられたのである。

ウクライナ進軍のドイツ軍は、各所においてベツサラビアを横斷突破し、先進部隊はチリグル河、ブダ河を渡河して怒濤のごとくウクライナ中心部を目ざして殺到した。そして早くも要衝オデッサ、ニコライエフ等の諸都市は後方を遮断され、ドイツ軍の包圍内に陥つた。更にバルト海黒海々上では、ドイツ空軍は主に快速部隊と協力して、ソ聯艦隊をその根據地に追込んで殲滅に従ひ、クロンシュニタツト港に逃げ込んだソ聯バルト海艦隊も出動の氣配さへ見せなくなつてゐる。

これに驚いたソ聯は二十二日、二十三歳より三十六歳までの赤軍兵士に對し總動員令を發し、歐露全土にわたる左記の地域に戒嚴令を布告した。

(一)北氷洋より黒海までの國境地帯、(二)モスクワ及びその周邊一帶、(三)シベリアよりコーカサスに至る一帶。

モスクワでは高射砲隊は部署についてドイツ機の空襲に備へた。しかし、東プロイセンでの獨精銳の大進撃は實にめざましいものであつた。二十三日朝までの戦闘において、ドイツ空軍は、空中戦又は地上において、ソ聯機合計五百五十臺を撃墜破したのである。同爆撃行を率ゐた一編隊長は、次のごとく語つてゐる。

「ソ聯空軍はスペイン内亂の際に人民戦線派空軍のそれと何等變りない。ソ聯飛行士の戦闘技術は非常に拙劣で、彼らは空軍技術においては古強者たるわれわれと對峙してゐることを無視してゐる如くであり、空中戦を殆ど一種のスポーツだと考へてゐるのではないかとさへ思はれた」東プロセン戦線及びその北方でも激戦が展開した。ドイツ歩兵部隊は、ソ聯軍のトーチカ陣に對し砲兵隊の掩護なくして、電撃奇襲を試み、見事にこれが攻略に成功したのである。北方戦線のドイツ軍は早くもソ聯軍歩兵部隊の兵舎を占領した。——かくして徒歩或ひは自轉車、自動車戦車、軍馬等を驅りつゝドイツ軍は、廣漠たる大平原をひた押しにすゝんだ。目指すは東方ソ聯國境へ、將兵につゞく將兵、師團につゞく師團、蜿蜒長蛇をなす進撃がつゞく。世界はかつてかくも強力にして精悍なドイツ軍に接したことはなかつた。



波蘭國境からソ領内に進入したドイツ軍歩兵部隊は、空軍掩護の下に怖るべき電撃戦法の威力を發揮してソ軍の抵抗を粉碎した。歩兵前衛部隊は、波蘭國境からブグ河の數ヶ所を、ゴムボートで渡河し、息もつかず約廿五キロを進撃、同地點森林中のソ軍陣地を急襲した。この全渡河に要した時間僅かに五分、そこからソ聯軍陣地攻撃まで十五分を要したのみで、文字通り暴風のごとき凄まじさであつた。

しかも、この猛進撃を阻止すべく、ソ聯軍は重砲、機關銃の砲門をいつせいにひらき、凄絶な反撃を加へたが、ドイツ側重砲の威力はよくこの抵抗を排除、歩兵部隊の驚異的進撃を可能ならしめたのである。

ソ芬國境でも獨ソ兩軍の間に激闘があつた。そして國境守備中の赤軍を十數マイル後退せしめた。また、舊ポーランド東部方面を進撃中のドイツ軍は、スターリン要塞線にまで迫つてゐた。

### (三) ソ聯空軍の壊滅

撃破既に二千機——獨機の奇襲戦法奏功——プレストリウスク占領——リトアニア全土席卷——獨の民族工作——ソ聯の抵抗力——スターリン線の解剖——

ウクライナの獨立工作——一日の進撃五十軒——中部戦線の大激戦

ドイツ空軍の兵力と機甲部隊の兵力は最初のうち不明であつた。しかし五千臺乃至八千臺の空軍と十數萬の機甲部隊であつたことは事實だ。これをもつて空陸一體の電撃的攻撃を行ひ、ソ聯の赤軍は不意を突かれたごとく必死の抵抗をつげながら作戦的退却を行つた。フィンランド戦線では、赤軍も獨機甲部隊に對して、自慢の五十トン乃至百トン級の物凄い超重戦車を出動させ大激戦を展開した。しかし、空軍ではさすがに獨重爆撃機が數千臺一舉に活躍し、ソ聯の重爆撃機を一舉に四十臺以上撃墜した。

赤軍は空軍三千臺乃至五千臺が參加した。赤軍は開戦第一日三十六歳までの赤軍豫備兵を總動員したからその兵力は得意の遊撃隊を加へると、三ヶ月後には一千萬以上の大軍を戦線におくることが出来る。赤軍の戦車師團は二十五ヶ師、その總數二萬臺をこえ世界最強の威力をもつてゐるのみならず、訓練すみの現役落下傘部隊七萬、豫備の空軍歩兵總數五十萬と稱せられてゐる。軍用機の性能はドイツに比較してはるかに落ちるが、その總數は最近一萬二千臺を突破し、操縦士總數は十五萬人に達してゐる。たゞ問題は、先年の赤軍肅清によつて、赤きナポレオンといは



れたトハチエフスキー元帥以下赤軍の首脳部たる將軍ならびに參謀將校六十名以上を失つた、め赤軍の統帥、指揮ならびに作戰力は獨軍に較べて甚だ劣り、到底勝利は望まれなかつたと思はれる。

絶對的勝利の確信がなければ、ヒトラー總統は決して進撃をしないから、獨ソ開戦の裏面には獨戰最高首脳部は十分赤軍の弱點を研究して廣大なる戦線の作戰を採つたとみられる。その證據には、獨軍きつてのソ聯通たるヨハネス・ブラスコウイツ將軍が數ヶ月前より秘かに舊チエツコのブルンに司令部を設置して、永年ドイツ國內で訓練した白系ロシア人およびウクライナ人をまぜた特別軍を編成してウクライナ攻撃の機會をねらつてゐたといはれてゐる。同將軍は常にソ聯攻撃作戰の要諦として「嚴寒の冬期作戰においても赤軍を撃破する訓練を十分重ねてゐた」といふから、ウクライナ攻撃軍はブラスコウイツ將軍の指揮するものであつた。赤軍にとつて何よりも缺陷ともなつたのは高射砲の不足のために獨空軍の爆撃が恐ろしい威力を發揮したことである。

對ソ宣戰布告だけで本當のドイツの開戦理由は擱めないであらう。しかし、その中に少くとも

一面ウクライナ問題ならびにこれについての獨ソ交渉に關係をもつことは疑ひがない。

面積二十六萬マイル、人口三千二百萬、黒海に沿ふ南部ロシア、ウクライナは、西ポーランド及びルーマニアと接し、東と北はソ聯に包まれてゐる。ウクライナ人はロシア人と異つた民族である。この地は歐洲の穀倉といはれ、小麥以下諸穀作、牧畜が盛んで、近年は工業も進み、鐵鋼業、機械、化學工業が勃興し、砂糖、棉、麻、石炭も大分出るのである。このウクライナは二百年前からドイツ人が移植されてゐるところでドイツとは切つても切れない縁があつた。その後ソ聯の領土となつたが、第一次大戦中ドイツはこの地に入り、親獨系政府を樹立して、自由に食糧をベルリンに送つたことがある。ところで今度の大戦が長期戦化せんとする形勢となつて來た今日において、ドイツはどうしてもウクライナの食糧が必要となつた。しかもこれがソ聯の同意を得られなかつたことこそ、局面悪化の重因の一つとなつたのではなからうか。ウクライナの住民はロシアとの分離を望んで、反共工作を續けてゐる。

プレスト・リトウスクの陥落はソ聯にとつて大きな痛手であつた。ここはブグ河に沿ひワルソ1、キエフ、モスクワ、東ブロシアへの鐵道の分歧點に當り、軍事上、交通上の要衝である。赤



軍は獨の戰車三百臺を破壊し、獨機五十一機を高射砲および戰闘機で擊墜したが、つひにコンク  
 リートのトーチカを破壊され陥落したものである。ドイツ軍は歐洲大戰以來未だ曾て見ざる大砲  
 撃を加へ、砲彈は瀧のごとく市中に落下、砲煙は天を蔽つてくらく、加ふるに上空からする雷雨  
 のとき爆撃で、ソ聯側は戰慄のうちに手も足も出ず、その間隙をねらつて、ドイツ歩兵部隊は  
 速射機關銃の掩護の下に、手にく手榴彈を投じつゝ敵堡壘に殺到、次から次と堡壘をうばつて  
 つひにソ聯が新國境の守りとたのむプレストリトウスの要塞を蹂躪し去つたものである。

またこの二十三日までソ聯機の撃破すでに二千機に及んだ。開戦と同時に獨爆撃部隊は舊ポー  
 ランド領及び西ロシア各地の全飛行場に對し、低空飛行で襲撃を行つたが、いづれも敵機の來襲  
 とは氣がつかず、惰眠をむさぼつてゐたので、獨機は地上乃至格納庫にあつた飛行機に思ふ存分  
 爆撃を加へ悠々猛威をふるふことが出來たのである。二千機の撃破におよんで、赤色空軍は無敵  
 獨軍の前にひとたまりもなく壊滅の途上をたどつたのだ。

六月二十四日はバルト三國方面より進撃中の獨部隊はコヴノ、ウイルナを奪取し、二十五日に  
 はリトアニア全部を確保した。赤軍に編入されてゐたリトアニア軍は、開戦とともに赤軍から離

れたので、なんなくリトアニアに進入し、對岸より敵前上陸した部隊と呼應して、リトアニア内  
 の赤軍の大半を殲滅したのである。

(四) ソ聯の長期戰準備

赤軍捕虜六萬餘——ソ聯密集師團——遷都問題——オデッサ陷落——ヒトラー  
 の戰術とナポレオン——ソ聯の怪戰車隊——ミンスク包圍——芬蘭對ソ戰——  
 獨軍の戰果發表——洪國の對ソ宣戰

ドイツ側の作戦は極めて效果的且組織的に進捗して、全戦線にわたつて前進また前進で、ソ聯  
 の陷陣におちいることなく成功した。ドイツ軍を奥地に誘導しつゝその戦闘力の疲勞消耗をはか  
 づつて戦線を膠着せしめ、機會をねらつてヒトラー總統を第二のナポレオンとなす戦略であつたが  
 却つて赤軍首脳部には爆撃によつて少なからぬ犠牲者が出て、これがために、赤軍各部隊の連絡指  
 揮はまつたく混亂に陥つたのである。而して開戦後二日間における赤軍の捕虜將兵二個師團以上  
 六萬五千に達した。そして次々にソ聯の密集師團に對して痛爆を加へて行つた。

遷都問題が起つたのは六月二十五日ごろからである。ソ聯は長期戦になるものと豫想して、政



府の移轉を決意した。スターリンはかねてから獨ソ開戦の場合には、赤軍は歐露において互角の戦争をすることはむづかしいとの見解を、側近の幹部にもらしてゐたといはれてゐるが、獨軍の包圍をさける爲に赤軍主力部隊のウラル山脈線までの後退を準備したのは當然の措置であつた。

獨軍は歐露の軍事的占領、すなはち赤軍主力の壊滅をもつて、一應對ソ戦に終止符をうつ方針で、それ以上ウラルを越えて敗殘部隊を追撃するシベリア遠征作戦を行ふ必要にない。ヒトラーは、共産黨乃至その中核をなす赤軍主力を降伏させれば、殘餘の敗殘部隊がシベリアに述べて行つても、もはやそれは新歐洲を背後より脅威する實力をもたず、従つてかゝる敗敵を相手とせず新歐洲の經濟、治安の確立に邁進するとともにおもむろに英本土への對策に乗出すわけなのである。ソ聯の抵抗も輕蔑したものでなく、なか／＼頑強であるが、ドイツ軍と反對に過失ばかりをくりかへした。しかし、後方戦線は獨軍もまだ獲得が出来ないので、獨空軍もソ聯全領土の制空權は未だしといふ有様であつた。しかし、ドイツはソ聯征服とその再組織、ソ聯内資源の開發權を掌握するにいたれば全勝の地位になることは明らかである。

二十五日にはオデッサも陥落した。こうして次々主要都市が陥落してゆくと、ソ聯は東方に後

退して長期戦の形をとらざるを得なかつた。ドイツはモスクワへ、モスクワへ！と得意の電撃にものをいはせて進撃してくる。かつての英雄ナポレオンが破竹の勢ひで攻め入りながらも、ロシアの焦土戦術に敢なくやぶれ去つたモスクワである。ナポレオンは六十萬の大軍を向けてニーマン河を越えたのがやはり六月であつた。そしていまのスターリン線のミンスクからまつすぐ大口シアに入つたスモレンスクで、露軍を撃破したのが八月、九月にはモスクワ付近のポロヂノでやはり捷つてゐる。しかし、奈翁はやぶれた。焦土戦術にまんまと引つかゝつて、糧食缺乏と寒氣、執拗な露軍のゲリラ戦、ついには退却をよぎなくされて言語に絶する苦難を喫した。饑寒疾病のためにニーマン河に歸つたときは、六十萬の兵が僅に二萬だつた。

しかし、いま考へられることは奈翁には何か缺けてゐるものがあつたことだ。トラファルガルの敗戦から反覆して、ウイン北方のアウステリッツの三帝戦が一生を通じての大捷を博したなど不退轉の意志は大いにみとめられるけれども、惜しいかな、彼の悉くが野望と斷定される事だ。ヒトラーの決意と信念、そこにはこんな奈翁のすべてを咀嚼し克服したものがあつたところに今日の科學があつたのであらう。



案の條、ソ聯の怪戰軍隊も出現した。廿五日の戦闘で獨部隊の前面に現はれた赤軍自慢の巨大型戰車十八臺は、まだ射程内に入らないうちから一齊に砲火をひらいて、その前面にある赤軍歩兵部隊が同志討ちになるのではないかとおもはせた。しかし戰線に魁偉な姿をあらはしたソ聯の巨大戰車も、完全な命中弾を喫して、たちまち火焰をふいてもえあがつてしまつたのはもろいものだつた。そして、次から次の爆撃で、投降者は増加したが、これら投降者の語るところによると、最初の命中弾で赤軍戰車隊長は膽をつぶして茫然なすところを知らなかつたさうである。かくしてドイツ軍の裝備の優秀と、その兵力の優勢とは、十分に赤軍を撃破する可能性を持つものであつた。その國力を擧げてこの一戰に賭けてゐる有様は、壯大であるとともに悲壯なものである。ドイツはそれほどの決心をもつてこの戰爭を開始したのだ。

要するに獨ソ戰爭は、ドイツにとつては一つの重大な資源戰爭があると同時に、世界政策のための戰爭である。これによつてドイツの戰鬥能力と耐久能力を造り出さうとするものである。明確な戰爭目的を遂行するだけに戰爭の科學的操作をわきまへ、眞の戰爭理論と戰爭技術をもつものである。

フィンランドが正式に對ソ宣戰布告を行つたのは二十五日のことであつた。ソ聯がフィンランド領土に加へた違反行爲のため、今後フィンランドはその力の及ぶ限りあらゆる手段をもつて防衛する事を餘儀なくされた旨を言明し、ドイツ側陣營に立ち對ソ戰に加はるに至つたのである。イタリア、ルマニア、フィンランドが參戰したほか、クロアチア、スロヴァキアもドイツ軍占領ソ聯領土の治安に充つべき軍隊を派遣することになり、さらにハンガリアも參戰を宣言した。またデンマークは對ソ非交戰を宣言、スペインは反ソ戰支持、義勇軍派遣を決定し、スエーデンは名目は參戰しないが、ドイツ軍の通過を許すことによつて物的人的にフィンランドを支援することになつて、新秩序建設のための大陸における思想的、政治的統一は反ソ十字軍的色彩を加へて著しく促進されることになつた。ソ聯はかくしてまつたく四面楚歌の聲となつた。

### (五) 東部戰線のドイツ軍

大規模の作戰——ソ聯のルーマニア油田空襲——デンマークと佛の對ソ戰——  
獨機のレニングラード猛爆——赤軍落下傘部隊——ミンスク陥落——獨機甲部  
隊の驀進——ソ聯の宣傳戰——モスクワの護り——獨軍楔形の進出



六月二十六日になつてドイツ軍は東部戦線における陸空軍の作戦は豫定どほり進捗し、ソ聯國境地帯各町における戦闘は有利に發展中で、きはめて大規模にわたる作戦的成功がその全貌を漸く呈示しつゝあるを發表した。獨ソ戦に關しては双方の公式發表以外には見當はつかないものとしてゐたが、ドイツ軍の優勢は覆ふべくもない事實のことであつた。

一應ソ聯もルマニアの首都ブカレスト及び油田地帯の中心地プロエンシチュを爆撃、プロエンシチュ付近の製油諸工場を炎焼せしめたり、ハンガリアにも空襲してカシヤウ、ラオ兩市に爆撃を加へ相當著しい反撃のあつたことは否まれない。

赤軍第一線に敗れるとき果してバルチザン戦術が行はれ得るかといふことは、ソ聯自身ですら問題としてゐたものである。空軍の最も發達した近代戦に於て、これが可能性は考へられない。そのためにスターリンのごときは、逸早くソ聯の重工業基地が南部ウクライナといふ國境地域に偏してゐて、一朝これら重工業地區が敵機によつて潰滅された場合、即時その戦闘能力を喪失することに着眼し、ウクライナのドネツキー、パセイン（略してドンバス）綜合工業地帯に代るべき第二のドンバスをウラルに建設すべく、こゝにウラルクズバス綜合工業地帯の建設に従事した

のである。しかし、たとへウラルが残つたとしても、完全な軍事行動を繼續し得るかについては大いに疑問がある。ソ聯のことであるから、勞農民を動員して、敗退せる赤軍を補強し得るとしても、石油缺乏し武器製造能力をうばはれては對外戦繼續に非常に困難のおこることは明らかである。赤軍の實力に對する夢はウクライナの攻略だけでも決定づけられると云つてよいのであつて、ことにモスクワが陥落し首都が遷つて行けばそれだけでもソ聯敗れたりと稱するも誇張ではないであらう。

ミンスクの激戦もソ聯に決定的な敗戦を與へたものであつた。ソ聯軍も獨軍部隊と激戦を繼續中であつたが特にミンスク及びルツク方面においては死闘を展開した。ソ聯はミンスクの激戦についても誇張した宣傳をつゞけたが、ミンスクは完全に陥落し獨軍の作戦的大成功が世界を驚嘆せしめてゐるに止まつたではないか。その間にも獨機は、レニングラードを猛爆して、航空機金屬、火藥各重要工場を完膚なきまでに爆碎した。ソ聯最大の重工業地帯に致命的損害を與へたのである。ソ聯創案の落下傘部隊もルーマニア首都ブカレストを距る北方五十キロのプロエスチ油田地帯に降下したが、その數二千名に及ぶと稱された。ドイツも白ロシア領内に降下してゐる。



こうして戦車部隊、歩兵部隊並びに急降下爆撃機隊等の協力によるドイツの強靱無比なる鐵環が、中央戦線に赤軍包圍の體形を段々引絞りつゝあるのとならんで、無敵の精強を誇るドイツ空軍は、ソ聯軍の退路を遮斷すべくいたるところの鐵道路線を爆碎したので、隨所に爆撃地獄とも稱すべき修羅場を現出し、算を亂して敗走する軍隊は、もはや軍司令部でも統制收拾し得ぬ状態を呈したのである。ミンスクの陥落はともかく一大打撃であつた。ドイツがスターリン要塞線中央部の最要衝とたのんだミンスク地區、ドイツ軍次期作戦の主要目標ミンスク——モスクワ道路の中間にある最重要都市モレンスクの攻略が控えてゐた。そのモレンスクさへ陥落した。ロシア最古の都市であり、五鐵道の集まる交通の中心、軍事的要衝モレンスクが陥落したら、モスクワの防守は奇蹟以外は不可能とも云つていゝのである。

モスクワ放送が市内に大なる損害はないと稱してゐたのに反して、ドイツ空軍空爆は凄慘極まるものであつた。モスクワ市中心部における果敢なるドイツ急降下爆撃機の爆破状態は豫想以上深刻なものがある。モスクワの敗退と共に、スターリン國防相は七月二十二日付命令をもつて、西方軍司令官パウロフ大將をはじめ、赤軍將官並びに政治委員の主要人物九名を逮捕した。これ

らの將校の多くは、獨ソ國境前線の指揮に當つてゐたいはゞスターリン線の直接責任者であつたが、もろくもスターリン線を抜かれ、爾餘の作戦を全面的攻撃に導いた責任を問はれて逮捕されるに至つたものである。その中には、曾つてノモンハン戦の際、赤軍戦車隊長としてソ聯國民に英雄として祭り上げられたパウロフ大將が眞先に槍玉に上げられてゐるのは注目に價する。



## 二、ロシアの國史と日露抗爭

### (一) ロシアの發祥

スラヴ民族の世界最大の平原征服——カピス海、黒海、バルチック海とロシア民族——ノヴゴロドに都市を築く——リユーリック家の創立——古代スラヴ民族の社會狀態——商業と都市の發達——大公の權限と權利の平等——ノルマン人の來襲——特有の共産的民主政治——聯邦政治の奇觀。

世界近世史上一個の謎であるロシアは、レーニンのプロレタリア革命後、ロシアが持つ謎の度を益々濃くしたやうなもので、専制資本主義の國家より、一足とびに、プロレタリアの獨裁政治を實現したのである。

世界の謎であるロシアは、カルパシアンと、ドニエプルとの間に介在する山地を故郷としたスラヴ民族が、つひに世界最大の平原を征服して、一大陸に帝國を建設した過程即ち過去のロシアを語ることによつて、解釋されねばならぬ。この項では、まづロシアの民族史の梗概から説き出し

てみやう。

ヨーロッパロシアの涯しなき大平原には、三つの大河が貫流してゐる、——モスクワの北西中央ロシアの沃地に、源を發して、その一つは、カスピ海を、その一つは黒海を、そして他の一つはバルチック海を指し、潺々と平原を貫流するオルガ、ドニエプル、ドゥイナの三大流域こそは、ロシア民族のために、彼らが、どこに向つて進むべきかを教へてくれた。——ロシア建設の全歴史は、こうした三個の針路によつて、指し示されてゐるのである。

スラヴ民族の歴史は、九世紀の中葉八五二——八六二年項、ノルマン種族の一種ワリーヤグ族の酋長リユーリックの二弟、シネウス、ツルフォルと共に、勇敢なる手兵を提げて、スエーデンのウブサラ地方より海を越えて、スラヴ民族の住地に侵入し、東バルト海地方（今のレーニングラードの南方約百哩）舊ノヴゴロド附近から、今のモスクワ及そのやゝ東及東北迄に至る一體の沼澤地を占領した時より始まるとされてゐる。

史家の説によると、リユーリックは、八六二年の來襲後、スラヴ民族の間に定住して、之を従屬せしめ、ラドガの町を築いたが、約二年を経て、之に不満を抱く土民らは、彼に反抗せんがた



め内亂を起したけれど、幾ばくもなく、主謀者は死し、同時に、リユーリツクの二弟も没した。め、リユーリツクは全國の主領となつて、イイメン湖の方に移り、ウオルコフ河畔に建てられた小市ノヴゴロド（新市の意）に落着いて、自ら公となり、部下一族に、土地と都市とを分譲して之を管轄せしめた。

その後、凡そ二十年を経て八八〇年頃、リユーリツクの後継者オレグ（八七九年—九一三年）は一族を引具して、ノヴゴロドより、ホエフに移つた。ホエフは、それ以前より北、バルト海と南黒海部の水路に當り、商業都市として、また、軍事上の重要地點として殷賑を極めてゐた。—オレグ、イゴルの諸公は、ホエフに移住後、相次いで、勢力の扶植に努力した結果、キエフは中露の中心としてスラヴは勿論、ワリヤグその他の諸族皆朝宗し、新なるスラヴ、ノルマン、ロシア民族の首都となつたのである。

リユーリツク家は、ホエフのウエリーホイ、クニヤージ（大公）と稱して、近方種族の共同利益を擁護し、着々領土の擴張を計り、租税と貢調とを徴收し、キエフ、ノヴゴロド一體の統治者たる實を備ふるに至つた。大公は租貢の滞納を監督するため、毎年十一月より四月まで、各領土

及附屬地を巡遊し、また、夏の間は、自ら貿易に従事した。

キエフの貿易商は、六日頃、船に乗じて、ドニエブル河を下り、黒河に出で、後ビザンチン（東ローマ）に至つたが、大公は、それら貿易商の首領として活躍し、行政及軍事上の支配者たると共に、戦商の頭目たる一面を備へ、ノルマン種族の本質を遺憾なく發揮した。當時の貿易は勿論物々交換で、通商が完全に行はれぬときには、干戈に訴へても目的の貫徹を計り、十世紀に於て四度もビザンチンに兵を送つた。

イゴルの子スウヤトスラウ（九四二—九七二年）より、ロシアの歴史は二期に入るのだが、その前、古代スラヴの社會状態を少しく述べてみたい。カルパシアンとドニエブル河の間に住んでゐた所謂古代スラヴ民族は、自由に懷れる不羈の民であつたが、組織的活動力に乏しかつた。外部のこの缺陷を補整し、彼らに原動力を與へてスラヴ民族の驚くべき發展を遂げしめる因をなしたのは、實に前記リユーリツク等のノルマン種族であつた。

即ちワリヤグ族は、ロシア全土の統治を掌る諸侯となつて、十七世紀の末に及んだのであるが彼らはスラヴ族の征服者支配者であるよりか寧ろ組織者である。彼らは社會組織の複雑化する



につれて、必然的に發生する生産の組織者ともいふべき役目をより多く勤めたものであつて、それほど、最初の間はスラヴ人の生活を妨げない支配者であつた。

スラヴの民は、半ばはカルパシアの山地より、半ばはドウイナ河の谿谷より水路を辿つて、渾しない平原に出て、ノルマン族の侵入以前ドニエブルの流域を中心に、共產主義的な自治國を形造つた。その結果生産物の交換の欲求にかられ、水路を利用して、盛んに商業を始めるやうになり、輸出入と商業が發展した。商業の發展は、當然、都市の發生を促した。ノルマン人の來襲當時には、ラドカ、ノヴゴロド、ピエロセロ、ムロム、ロストフ、ボロツク、スモレンスク、リユベツ、チエルニゴフ、キエフ等を始めて多くの都市が發達してゐた。

都市には、ノルマン人の首領で市長ともいふべき行政權を持つてゐるクニヤージ（侯）があつて、租税で生活を支へてゐたが、彼らは戦時は兎も角、平時は頗る微弱な權限を持つてゐたに過ぎなかつた。別に、民選議會ウエチエと云ふものがあつて、何か事件が起れば、クニヤージとウエチエの代表者とがこれを決して専制專斷的に事が運ばれてゐた。最初の間、スラヴ民族間には孤立して優越的位置を占むる特權階級の如きものはなく、固有の貴族といふものが全然なかつた。

た。

都市以外の村落には、所謂自治共產團體が組織されてゐたが、これは、始め一家族より發生したもので、父權的首長を代表者と頂き、財産は總て共有であつた。彼らが、ある件を處決する場合には、住民の一致評決によつて定めて、これが勵行は、全體の權力によつて行つた。丁度、各都市が、ウエチエの名によつて政治を行ひ、けつしてクニヤージの獨斷專行を許さなかつたと全く同様であつた。

彼ら住民の上には、ノルマン人であるワリヤグ族の酋長が、やはり侯と名乗つて、彼らを支配統帥してゐたが、それは決して專制的ではなかつた。諸部落の侯を監督するのは、一族中最年長者たる大公であつたが、その權限は非常に制限されてゐた。諸侯も大公の優越性は認めてもこれに従屬することは殆んどなかつたから、行政上の集權制度は行はれなかつたのである。

大公は、始めキエフを次で、ウラジミル及モスクワを封地として、所有してゐたが、領地は凡て諸侯の個有とせず、獨占であつた。また諸侯を取圍む貴族階級に似たベヤールといふ一群があつたが、これは諸侯の戦友、高位者等の少數團體で、一定した階級はなく、一種の特權階級で世



襲的のものではなかつた。この外、ドルジーナと呼ばれる、諸侯の常備守備兵の一種もあつたが、一階級をなす程の數ではなかつた。

以上によつて明かなるが如く、古代ロシアの政治組織は、極めて特有の形式を採つてゐる。このやうな民族聯邦は、同時代の他國には絶對に見られなかつた現象であらう。

## (二) キエフ公朝の全盛期とモスコイ公朝

スウヤトスラウ大公の羅馬征伐戦——ローマの狡猾なる布教政策——露西亞の統治者とギリシヤ正教——キエフ公朝の全盛期——分轄制度と諸侯の勢力増大——  
 弱肉強食の弊が浸潤——南露の草原遊牧民の侵入——貴族地主と農奴制——キエフ大公の追放——ウラジミール、ズウエリリヤザン各地の群雄割據——タタール族の蹂躪時代——モスクワ公朝の勃興

スウヤトスラウ大公は、剽悍を以て聞へてゐた人である。彼は、東羅馬の願望を容れてブリガリアを攻め、その大部分を占領して、首都をダニューブ河畔のペレヤスラーウリに移さうとし九七一年、今度は、東羅馬と戦端を交へ、つひに羅馬をして、讓歩的の媾和を締結せしめた。しかしながら、この事は、羅馬にとつて決して失敗で無かつたのみならず、實に非常な成功であつた。即ち羅馬の狡猾なる布教政策は功を奏し、十世紀末葉に至つて、キエフはギリシヤ正教に歸依した。

スウヤトスラウの子ウラジミール（九八〇年—一〇一五年）が、九八七年頃ビザンチンの一將軍の妹と結婚し、キリスト教徒になつたのを始めとして、ロシア全體がこれに倣つて、キリスト教徒となつた。この時以來、ロシアの統治者とギリシヤ正教とは結びついて、神聖なるロシア國家といふ觀念を作り出すに至つた。滅び行かんとする羅馬帝國にとつて、ロシア勢力範圍に入れたことは非常な勝利であつた。

かくして、ロシアは、半東洋的半西歐的色彩を帯びた獨特の國體を形造るに至つて、治者の勢力が次第に強まり諸侯は各自の封地に於て、行政司法の絶對權を振ひ始めやうとしたが、一二三七年タタール族の侵入迄はともかくも古代ロシアの實質を維持する事が出来たのである。

當時の著しき現象としては、所謂分轄制度と諸侯權力増大とを擧げることが出来やう。分轄制度は、諸侯の封地に對する非世襲制と封地の長弟相續制に起因して發生した。即ち諸侯の土地はこれを世襲せしめず、大公がノルマン系の一族中より、最長年者の順序により、彼らに封地を與



へたもので、従つて諸侯の死亡により、絶えず封地が變り、丁度いまの官吏の轉任めいたことをやつてゐたのである。

しかし長子相續をなさず、一族の最長年者が相續する制度であつたため、つひには私有觀念に囚はれた人が出て、自分の子に封地を相續せしめんとし、諸侯間に争闘が起るやうになつたのは誠に、當然の歸結と云はねばならぬ。

十二世紀末葉までには、キエフ。チエルニエゴフ。ベレヤスラフ。セーウエフ。ガリチ。ウヲルインスク。ピンスコ。ツロフスク。ポロツコ。スモレンスク。リヤザン。ムロム。ロストフ。スズタリ。ノヴゴロドの名侯地が、それ／＼長弟相續制により圓滿に相續されてゐたものが、十二世紀末になると、オルガ河上流のセーウエル侯地では、アンドレー・ポゴリユーブスキー侯が、長弟や甥に領地を與へんとしないのみか、自ら侯の權力を増大せしめ、絶對權を振はんとし、茲に端無くも、長弟相續は破れて、諸侯は各自封地の私有を計り、手兵を蓄へて、これより諸侯間には封地の奪合ひが始まつたのである。

この結果、小侯は、大侯に併呑せられる傾向を生じ、漸く勃興の緒にあつたモスクワ侯は自己

の握れる手兵の勢力と、キリスト教僧侶の策計と、豊富なる物質力によつて、附近にある小侯の封地を併せた。

こうしてロシアが、弱肉強食の弊を生じ、内部的の崩壞作用を營みつゝあつた時、南露は草原の遊牧民のために苦しめられ、北部に移住し來る者が増加したが、遂に一二二四年から一二四〇年に至る約十六年間に、タタール族は、南露一帯を席捲し、キエフを陥れ諸侯の封地を没してしまつた。

封地の住民は難を、沼澤森林の多いロシア北東部に逃れ、政治的中心地はかくしてキエフよりロストフ、スズダリ、ウラジミル等の諸都に移つた。タタール族は北方迄侵入しなかつたので、難を逃れたスラヴ族は、森林を開拓し、原野を拓いて耕地を作り農業を營むに至つた。當時の農民は、諸侯附屬の土地に土着し、人頭税を拂つて耕作に従事するか、各地を轉々して、日傭ひの農夫となつて働いた。

かくして諸侯は、遂に一種の地主と化し、所謂貴族のバヤールは、土地を取得して、これまた地主となつて、農奴を蓄へるに至り、これより次第に農奴制が確立されるやうになつた。キエフ



の大公が、タタールに追はれてから、ウラジミル、ツウエリ、リヤザン各地に、大公が割據し、互に土地を私有して相譲らなかつた。

一二四三年より一四八〇年に至る約二百四十年間は、タタール族の蹂躞時代で、ロシアの諸侯は、毎年タタールの領地である所謂ザラターヤ・オルダーの首都サライに赴き、タタールの汗に拜謁し、貢物を捧げて、領土の支配を許可する旨のタタール汗の書「イルルイク」を受取つて、歸つて来たものである。

かゝる屈辱と忍従を餘儀なくされた諸侯を尻目に向け、一人モスクワ侯のみは、密かに實力を養つて、他日の大成を期し、モスクワ公朝の基を築くべくその努力を怠らなかつたのである。

### (三) イワン烈帝の暴虐政治

モスクワ公朝の領土擴張——反軍大討伐と諸侯地の併呑——イワン四世皇帝の出顯——モスクワ公朝の威令露西亞全土に及ぶ——階級制度の劃立——イワン烈帝の暴虐政治——ロシア革命の端緒——革命軍の敗北と國民の不安動搖——ロマノフ王朝の創立——皇后を七度變へたイワン烈帝。

モスクワ侯が起つたのは、十二世紀末で、場所はスズダリ地方の南部である。此地はオルガ、西ドウイナ兩河とノヴゴロドとリヤザルガ地方の交通路に當り、タタールの侵略地より離れて、頗る地の利を占めてゐた。

それ故南部より追はれた住民は、多く茲に集まり、相次いで侯となつた人々が、皆策謀家であつた。ゆゑ忽ち領地は増大し、經濟力は豊かになつた。まづアレキサンドル・ネーフスキーの子であるダニール侯は、ベレヤスラーウリを併せ、その子孫殊にユーリイ及イワン・カリータ(一三二八年—一四一年)は、領土の侵略に努め、モジヤイス、コロムン、ガリチ、ペロオゼロ、ウグリチ等各地を併せ、ツウエーリの諸侯と戦つて之に勝ち、カリタは、自らモスクワ大公と稱して、一族を長幼の序に従つて各地に分封し、一門の結束を強固にした。

ドミトリ・ドンスキー侯(一三三六三年—一三八九年)は、一三八〇年クリコフの野で、タタール族と戦つて之を取り、次いでリヤザン、ツウエーリ諸侯の同盟軍や、リトワ侯オリゲルドを敗北せしめ、ウエレー、メシチエラ、カルギ、ドミトリエフ、ウラジミル等の諸侯地を併呑して、愈々權勢を延ばした。



彼は自分の息子に領地をわけ、長子ワシーリエには、舊ウラジミル大侯地を次子以下には各地に散在した小地を分與した。かくしてワシーリエの孫イワン（一四六二年—一五〇五年）の世には、リヤザン侯地の一部分を奪ひ、ヤロスラウリ、ロストフ、トウエーリ諸侯地を併せ、一四七一年より七十九年間、ノヴゴロド侯と干戈を交へて、遂に之を屈服せしめた。

一四八〇年には、モスクワは、タタール族の羈絆を脱して、二百四十年の長きに亙る蒙古族の専制より逃れ、かくしてロシアは、再びスラヴ族の支配に復歸する運命に會つたのである。

モスクワ公朝は、益々強勢に赴き、各諸侯地を併呑し、各地に侵略の手を延し、リトワ、リウオニア瑞典とも一戦を交へ、自らイワン四世は帝と名乗つて、權力を振ふに至り、公朝の威令は殆んどロシア全土に及ぶに至つたのである。

外的に膨脹したモスクワは、内面の施設にも力を用ひた。朝廷は、まつさきに階級制度を決定した。イワン四世の時、昔の貴族はその領地を没收されたが、これに怨を抱く小數の貴族達は、イワンに復讐を企てたので、彼はモスクワ公朝の専制を強めるためフブリチーナと稱する護身兵を置き、隠謀の勦滅に努めたのである。

しかるに、烈帝とまで呼ばれたイワンの慘酷なる振舞と護身兵の傍若無人的行動は、却つて人民の反感を買ひ、納税を怠る者多く、被搾取階級にも軍務を拒み、密かに任地を迹れて草原地方に走り、コサツクの群に投じ、自由の天地に彷徨する者が續出した。かくして十六世紀末より十七世紀初頭にかけて、モスクワ公朝は、各種の方面に、異常な進展をなしたけれど、その裏面には漸く根本的の不安がつり、その後のロシアを鮮かに特色づけた革命の端緒は、この時代に發したのである。

一六〇〇年頃、國民の不安は、全國的に瀰漫し、暴動一揆がいつ起るとも計り難かつた。聖ウラジミルの後を次いで、皇帝の位に即いたボリス・ゴドウノフ（一五九八年—一六〇五年）は、この不安を一掃する力なく、國民の大衆は、モスクワの専制に反旗を翻して立つた偽ドミトリエに加擔し、モスクワに、押し寄せた。

しかしこの計畫は、失敗に終り、次いで反軍の統領になつた偽ドミトリエ二世も、大衆を統帥する才能に缺け、折角の運動も、無秩序極まる無政府主義的な色彩を帯びるのみで、國民の不安動搖は益々につのるばかりとなつた。



この時に當つて、民衆の革命的一揆を平定し、民心に安定を與へたものは、ミハイル・フョードロウイチ・ロマノフである。

彼は、一六一三年衆望を荷ふて、皇帝の位に即いたが、彼ミハイルこそは、その後ソヴエート大革命まで、綿々と続いたロマノフ王朝の最初の皇帝で、彼の即位より、ロシア歴史は、ロマノフ王朝の時代に入るのである。

モスクワ公朝は、イワン烈帝を、最後の夕映として、四百五十年に至る輝しき支配の幕を閉じた。武勇傳の幾つもの展開ともみるべき榮華の跡は、物語的に薄霧を透して、いまもなほ我らの想像をたのしませしめる。

半野蠻的な戦争上、侵略的な領土擴張に伴ふ幾多の挿話や、皇后を七度び變へたといふ慘虐無道なイワン烈帝の多くの挿話は、ロシア史上の慘虐史ともいへる。いま、さうした外史的方面に筆を進め得られないのを非常に遺憾とする。

#### (四) 闇黒時代とペョートル大帝

ロマノフ皇帝と貴族僧侶商人農民各階級の代表者——農奴制度からモスコ一揆

——有名なステエンカ・ラージンの亂——ロマノフ王朝の戦争的失敗——精力と  
 叡智の人ピョートル大帝の大改革——領土擴張と國威の發揚——エカテリナ二世  
 女王の反動政策——農民の危険思想と政府倒壞熱——アガチヨフの叛亂——エカ  
 テリナ女王の淫奔な日常生活

ロマノフは、その息アレクセイ帝（一六四五年——一六七六年）は、モスクワ公朝時代に召集した地方會議を、屢々召集して、重大問題を民論によつて、解決する方針を取つた。地方會議には貴族、僧侶、商人、農民等各階級の代表者が集つた。——しかし、政治は、中央集權的色彩を濃厚に帯び、施政は貴族的となり、地方政治は、所謂地方長官の專横に委ねられることになつて人民の有産階級に對する反感は、一層甚しくなつた。

それに加へ一方では、農奴制度が、愈確立し、農民塗炭の苦は、益々その度に加へて遂に一六四八年モスクワの一揆となり、また、一六六七年より七一年にかけ、ステエンカ・ラージンはオルガ河岸に蜂起した農民コサツクの頭目となり、地主貴族の壓制に反逆し、ロシア史上に名高いステエンカ・ラージンの亂を捲き起した。

これと同時に、外患は、恰もモスクワ公朝からの連結的場面として展開し、まづ瑞典と戦つて



一六一七年ストロボーフスキー和を結び、ノヴゴロドは、ロシアの有に歸したが、バルト海沿岸は瑞典に奪還された。

續いてポーランドと戦ひ、デウリンスキー及ポリヤノーフスキーに於ける媾和談判の結果、スモレンスクとチエルニゴ、セーウエルはポーランドに取られた。一六五四年小ロシアはロマノフ王朝に合併されたが、その後再び瑞典及ポーランドと戦ひ、リウオニアの領地は、全部奪取されてしまった。その後、一六六七年アドルソーフスキーの媾和で、スモレンスク、北部地方、キエフ及ウクライナの左岸は、漸くロシアに還つたけれども、十七世紀に於ける戦争は、ロマノフ王朝にとつて寧ろ失敗であつた。

しかし、アレキセイ・ミハイロウイチ皇帝は、ロマノフ王朝の確立者として、立派な功績をのこしてゐる。一々數へ來れば頗る多い、戦争の失敗も、一揆の暴動も、王朝の興隆に影響に及ぼさなかつたのは、アレキセイ皇帝の人物に歸せねばならぬ。

ロマノフ王朝の最初の皇帝として、従来のロシアを根本的に改革し、凡ゆる文物制度を一新して、ロシアの存在を世界に知らしめたのは、人も知るペョートル大帝(一六八九—一七三五年)

である。彼の改革は、餘りに物質的との批難もあるが、瑞典との戦争の際、ナルワ方面の戦闘に破れたため、陸軍正規軍編成の必要を痛感した結果に依るものと云はれてゐるが、動機は何れにあるにせよ、兵戈の巷を奔走しながら、あれだけの改革を斷行した精力と、叡智の程は、誠に感服の外はない。

一労働者として、一六九八年最初の外遊を終つたペョートルは、仇敵瑞典王に對する復讐の念に燃え、一七〇〇年ナルワ附近の戦闘に破れたがつひに一七〇九年ポルタワの一戦に、見事瑞典王カルル十二世を破つて、一七二一年ニシダートスキーの媾和條約で、リフリヤンジア、エストランジア、インゲルマンリヤンジア、ブイボルグスキー縣を譲り多年の宿望であつたバルト海進出を實現した。

それより直ちに都をモスクワより、ネワ河口に移し、名も「ペョートルの都」即ちペテルブルグと名けて、大抱負大經綸を行ふことになり、これよりペテルブルグは東方影暗きロシアが、西歐文化の光を攝すべき窓となつたのである。

ペョートルは、全露の皇帝として、西歐諸國の帝王と、對等に位するを得、フィンランドを略



奪し、續いて南方ベルシアを襲ひ、沿カスピ海地方を奪つて、實に、一萬平方哩の領土を擴張し國威を發揚したことは、建國以來前代未聞であつた。

ロシアは、ベヨートルに至り、國家的生活の面目を一新したけれど、只一つ舊來の傳統を墨守したことは、一般國民殊に農民に對する政府の態度であつた。農奴制度は、ロマフ王朝の初期に至り、多くの弊害を醸したが、ベヨートルは、この積弊を矯めんとせず、かへつてこれを助長した。

かゝる狀勢の裡に、ベヨートルの後繼者は、彼の衣鉢を繼いで、外征を事とし、官僚政治の完成に腐心したが、ベヨートルの没後は、主權者が相次いで變り、近衛聯隊の將校貴族の助力により、政務をとらざるを得ぬ主權者も出てきた。これがため、朝臣や、近衛將校の權力増大し、やゝもすれば、皇帝の絶對權を制限せんとする傾向を生じた。

これらの弊害を打破して、ロシア内政を整理し、外部進出を計つたのは、女帝として有名なエカテリナ二世（一七二九年——一七九六年）である。ベヨートル一世の改革が、ドイツを基準として行はれたに反し、女帝は、専らフランス文化に傾倒し、自ら自由思想を鼓吹し、數ヶの劇を

書いた。ロシア文學は、漸くこの時代に目醒めた。

しかし、彼女は、ロシア生活の實際と、農奴制度の壓迫による農民の反政府熱を感知するに及び、次第に、保守主義に傾いた。自由思想家を遠ざけて、所謂危險思想の根絶に努めるやうになつたのである。

これがため彼女に對する怨嗟の聲は、段々甚しくなつて、農民の政府倒壞熱を激成し農奴制度の撤廢を高潮せしめた。一七七三年、南東ロシアの一帶を席捲したプガチョフの叛亂は、即ち反政府、反エカテリナ、反地主熱の現はれと見ることが出来る。

淫奔な日常生活をした彼女も、ポーランドの分割を斷行し、トルコと戦つて勝ち、瑞典と戦つて戦勝した。

### (五) ロシア最後の大革命

パーウエル皇帝暗殺さる——アレキサンル二世の反動政策と十二月黨亂——ナポレオン軍の侵入を撃退す——ニコライ一世と峻嚴な警察政策——苛酷な檢閲制度と慘憺たる闘争——バクーニンとヘルツェンの追放——十二世紀後半の煩悶と



苦惱と自覺——アレキサンドル二世の地主救済——虚無主義思想の擡頭——逮捕  
 監禁、追放、死刑の連鎖——一少女のトレポフ將軍狙撃——アレキサンドル二世  
 テロリストの爆弾に倒る——ロマノフ王朝最後の皇帝ニコライ二世——大統領と  
 革命の機運——内務大臣ブレヅエフ暗殺さる——レーニン倒策の大革命——世界  
 大戦の勃發——ニコライ二世の悲惨な最期。

十七世紀は、パーウエル皇帝（一七九六——一八〇一年）の短かい治世を以つて終つてゐる。惨酷にして猜疑深い彼は、一八〇一年三月十一日、何者かのために、殺害されたのである。

パーウエル帝の後を襲つたアレキサンドル一世は、始めは自由主義者であつたが、一八二〇年頃より反動思想に傾き、彼の保守主義は、十二月黨亂の一素因をなした位である、しかし内政政策は事毎に效を奏して、將來の膨脹と發展のために、必要なる方向轉換を行つてゐた。有名なるナポレオンの侵入を撃退した彼の功績は、偉大である。

次に即位したニコライ一世の治世は、保守反動の色彩を帯びた干渉政策で、言語文章の自由は極度まで壓迫を蒙つた。彼の治世に於て文教の進歩は、著しき程度に達したけれど、峻嚴なる警察政策と苛酷なる檢閲制度と、之に對する自由の熱情と憧憬とは、慘憺たる闘争を惹起し、一種

悲壯の空氣は、智識階級の生活に横溢した。——壓迫政策の結果として、思想の争ひは、却つて政治的傾向を帯び、つひには革命的色彩を帯ぶるに至つたのである。彼のバクーニンを追放し、ヘルツェンを追ひ出したのは、實にニコライ一世の治下であつた。

かくて十九世紀後半のロシアは、舊き秩序と、新興の社會的勢力との、猛烈なる闘争の歴史に外ならない。

當時のロシアは、既に版圖を擴張し、征服し得るだけの領土を征服し、もはや領土膨脹の必要はなかつたのである。

ニコラス一世の後を嗣いだのは、アレキサンドル二世であつて、その比較的寛大な自由主義の政策は、ロシアの進歩に新たな出發點を與へた。一八六一年に行はれた、農奴解放によつて、ともかくも新らしい時代に入り、農民に對する國家統治權を確立して、ロシアの基礎に一段と強味を加へたのである。

而して言論自由の壓迫緩和と共に、自由急進の思想は勃然として起り、自由主義、社會主義と共に理智以外の一切の傳統、因襲、信仰を否定する虚無主義思想は、鬱勃として、春草の如くに



萌え立つた。そこで政府側が反動政策を取るに至つたことは、すこしも怪むべきことではない。一八六六年、カラカゾフの皇帝狙撃と共に、反動時代の幕は開いた。言語集會出版物の壓迫は再び倍加と總督の警察權は擴張されて多くの青年男女の學生は、人民の中へ、と叫びつゝ、農民の教化に盡力した。

政府の逮捕、監禁、追放の手の益々峻嚴を加へると共に、政治的革命の焰は、愈々熾となり、人民の中へと叫んで往つた青年男女は、農民に、一揆を教へるため、彼らの中に往つた。

一八七六年には、農民革命を目的とする暴力的革命團體が出現し、一八七七年には、一少女のトレポフ將軍狙撃となつて、革命的精神は、澎湃として、根柢よりロシアを震撼した。

こゝに於てアレキサンドル二世は、再び、進歩的政策に返つて、憲法制定を計つてゐたところ、一八八一年、惜しや恐怖主義者の爆弾にたはれて、あへなき最期を遂げた。

アレキサンドル二世の後を繼承した三世は、極端な壓迫政策を取つた。

しかし彼が警察の力能く天下の事を定むべしとしたのは、不幸なる誤謬と云はねばならぬ。彼の反動政策が、祖國を社會的動搖の中より救ふことに、何らの貢獻をも爲し能はなかつたのは、

寧ろ當然である。

次に立つたニコライ二世（一八六八——一九一八年）こそロマノフ王朝最後の皇帝で、その治下に於ても、革命的思想は、滔々としその進路を近せず、幾百萬の農民は、生活難の鐵鞭に打たれ耕治を棄て、新經濟政策によつて勃興せる新工業地に、滔々として集注し、彼らの往くところ、必らずや労働問題を伴つた。

しかも地方に於ける人口の増加は、農奴解放令によつて割り當てられた耕地の不足と、狹隘とを感じしむるに至つて、農業地方も、また深刻なる社會的不安に襲はれた。學生と農民は、社會主義者化し、一八九二年の大飢饉と共に、革命の機運は、將に、その高潮に達したのである。

更に、地方に於ては、商工業の勃興に伴ふ經濟狀態の變化の結果、主として、農民を主題とした社會主義の理論と運動とは、こゝに一轉して、工業労働者を目的とする社會民主黨の出現を見一九〇二年には、社會革命黨が起り、恐怖主義者も、また潑刺たる活動を起すに至つて、政治ひたすら高等警察の事務に忙殺せられざるを得なかつた。

一九〇五年、内務大臣、ブレエヴェの暗殺によつて、一點の燈火を認めた労働者の革命運動は



同年七月二十二日の所謂「血染めの日曜日」に於ける労働者虐殺によつて、一齊に爆發し、八月に於ける全露に亙る總同盟罷工に於て、その極に達したものである。

一九〇五年十一月、ニコライ二世は、自らその政權を限定し、人民の自由を認め、國會を開くの宣言を發したが、皇帝の専制は、これによつて矯められざるのみか、益々激甚となり、人民に對する壓迫は、巧妙慘虐を極めた。

極度の社會的不安、經濟的動搖、工業労働者の擡頭、革命家の秘密運動と、議會制度の失敗とは、ロシア革命勃發の機運を刻々と醸成しつゝあつたが、一九一四年の世界大戰開始と共に、外國亡命ロシア革命家の積極運動は、つひに功を奏し、一九一七年十月、レーニンの畫策した十月革命によつて、ロシアは、全世界に、まつたく類を見ないソヴェート新政府を實現するに至つたのである。ロマノフ王朝のニコライ二世皇帝及其の皇族は、いづれも凶徒の魔手に倒れしまつたが、いまさうした悲惨な物語に筆を進め得られないのを非常に遺憾とする。

(六) ロシアの領土侵略史

ワシリー三世——イワン三世——ワシリー四世——イワン四世——フョードル一

世——ゴツノフ——ワシリーシユスキ——ミハイル——ビョートル大帝——カ  
チリナ——イワン——カテリナ二世——パーウエル一世——亞歷山——支那全土  
及び印度への野心——ソヴェートの目標と世界赤化の國是——沿海洲はもと滿洲  
の領土

次にロシアといふ國がいかに領土侵略の野心を持つ國家であるかを證明するためにロシアが一四二五年ワシリー三世以降、一八五八年頃に至るまで、僅に六十年間に、他國の領土を奪略し、而して自己領土を擴張したる、その國名及び侵略者の帝王名について、左に分りやすく記載してみるとしよう。

ロシア侵略領土名及帝王名表

國地名	皇帝名
ウイアトカ國	ワシリー三世
ノヴゴロツト	イワン三世
アルバンケルスク	同
ブストオセルスク	同



ペレソ

同

ヤルマ

同

ブスコフ共和国

ワシリー四世

カザン

イワン四世

アストラハン

同

烏拉山以東エニセイ河間一帯の廣漠なる地

フョードル一世

サライ

同

西伯利亞の北方とウルハンスク・マンガセヤ・エニセイ半島

ゴヅノフ

クツネーツク一帯ノ地

ワシリシエイスキ

東方西伯利亞太平洋沿海の領土

ミハイル

ブラツコトオスログ。イリムスク、ウストクツク、キレ、ンツク、ウイテムスク、オレクミンスク、ヤク、ウーツク、オホツク、タウイスク、アナデキルスク、ゲイデナ、カヴァーロウイ、ウコンシヨラヤ等東北西伯利亞の面積二百八萬七千六百餘方里を併吞し、西

同

伯利亞全土を横断して太平洋上のベーリング海峡に出でたり

バルチツク海沿岸の地方、黒海及び裏海沿岸地方、芬蘭土

カムチャツカ半島

ピョートル大帝

カルコラリンスク、トルガイ、デミルスコエ等一帯の地即ち裏海の東北地方

カテリナ

バルチツク海沿岸波蘭土の一部なるコトカ、コウオラ

イワン

波蘭土の分割併呑

カテリナ二世

ジョールジャ國併呑

パーウエル一世

バクー、クーバン、デルベンドの各地

亞歷山

イメリチヤ、ミンダレリヤ、ダゲスタン、シルバン、バクー、カラボイヤ、フアリシエーの各地

同

裏海の東岸アストアルト

同

北米アラスカ(一八七六年アメリカに賣却せり)

同

アナバ、ボチの兩港、及びアカルジク、アカルカラキ等黒海に濱する樞要の市府城塞

同

ナキラバン、エデンアジン、エリバン、アラツト等を波斯より奪取

同



キ ル ギ ス

ア ム ー ル 侵略

中央亞細亞の侵略

樺 太 の 侵略

同 同 同 同

列記するがごとく、ロシアは僅に四百六十年の間に於て、歐亞の諸國を併呑し、その奪略せる領土を合せての總面積は、實に八百六十六萬三百餘方哩である。蓋しロシアは、彼のジンギスカンの故智に倣つて、支那の全土及び印度を網羅し、中央亞細亞一圓の地を併呑するに非ざれば、どうしても承知をするのではない、といふのがロシア式の國是であり、又世界赤化を目標とするソヴェートの國是である。

ソヴェート政府が事毎に神經を尖らせる沿海州も元來滿洲の一部分であつて、遠き昔ロシアに侵略されたものである。大體、沿海州方面には、ロシア人が漁民として移住に適せず、農民としては幾多の理由により、必ずしも適當せず、或ひはその必要すらないのである。

これに反し日本人、朝鮮人、滿洲國人は、同地方の露人の總人口に超過し、その活動力に至つ

ては、いづれも、地方開拓の第一義に屬すべき漁業、航海、農業等に於て、獨創的且現に中心的地位を占めつゝあることを見て、これら隣接の東洋人か、沿海地方の開拓に對し、いかに、甚大なる功績を爲しつゝあるかを知るのである。事情かくの如くであるから、これらの東洋人殊に日本國民が各々斯業を繼續して、それより生ずる結果の利益を享受し得るのは、もとより當然の權利ではなからうか。

(七) 日露戦争

日露の衝突——北清事變の終局——ロシアの滿洲占領計畫——無辜の支那人五千を黒龍江に投ず——暴虐なるロシアの通牒——露支密約協定——日英佛獨の協同警告——名のみロシアの撤兵——朝鮮國境を脅かす——朝鮮龍巖浦に砲臺を建設す——小村壽太郎とローゼン公使の第一回會見——ロシアの大軍滿韓を壓す——我が日露交渉斷絶の公文電訓——露國駐日公使に撤退要求——仁川及旅順沖の日露兩艦の衝突——日露兩國の宣戰布告——日露戦争始まる。

明治三十七八年の日露戦役を説くには、日露の衝突から説き出さねばならぬ。

明治三十三年の北清事變が終局しても、東洋の大事局は、決してこの事變に止まらず、ロシア



の滿洲經路に至つては、大いに列國の膽を寒からしめたものである。はじめ、拳匪の起るや滿洲にもまた馬賊の匪徒が蜂起して、頗る不穩の狀があつた。ロシアは、その野心を滿たすべき好機到來として、北京救援のごときは、むしろこれを眼中に置かず、滿洲占領の大計を畫策して、太沽の攻撃開始の時から、シベリア總督陸軍中將クロデコーフに内命を下し、總督は司令部をウラジオストツクに進めて、旅順及ウラジオ方面の警戒を嚴にして、船舶の出入旅客の往復貨物の運搬——等に一々點檢を行つた。

ウラジオの海口には、水雷を布設し、臨時將官會議を開いて豫備兵の徵集、駄馬の徵集をし、運送船をあつめて戰需品を購入し遙に當時北清の戰場に在つた關東總督陸軍中將アレキシーフと氣脈を通じてゐた。

それから遂に遼東方面の保障を名として、山海關、北載河を占領し、はじめは馬賊に對して守備の態度を取つてゐたのだが、中頃より變じて攻勢的態度を取るやうになつた。

同年七月下旬より八月上旬に亘つて、多數の兵士を派遣し、北方にあつては、ブラゴエシチェンスクに於て、無辜の支那人五千を黑龍江に投じて、血の河とし、黑龍江の首府たる愛琿を占領

した。——露支韓三國の境上に於て、琿春を奪略し、次いで露支鐵道の要地たるハルピンを撃ち三姓をたひらげ、南方にあつては、遼河邊の要地たる牛莊を脅し、大石橋、熊岳城を略有し、海城をとり、金州城を奪ひ、つひに遼陽奉天に迫り、ベキン陥落の頃には、滿洲要害の地が、悉くロシアの占領するところとなつたのである。ロシアは、明治三十三年八月二十五日、一の通牒を列國に送つて、「滿洲に於て鞏固なる秩序確立し、鐵道の保護に關して必要なる手段を採らるゝに於ては、他國の動作が障害を與へざるにかぎり、ロシアは支那の版圖内より軍隊を撤去するを躊躇しない」と、宣言した。

この年十一月、露都に於て、外務大臣ラムスドルフと、清國駐露公使楊儒との間に露支密約草案を協定したが、その協定は、一、ロシアの兵を滿洲にとりて鐵道を保護すること、一、當分撤兵せざること、一、支那の出兵は協議を経るに非ざれば許さざること、一、支那將軍大臣は、ロシアの求に應じて革職すること、一、支那は金州の自主權を拋棄すること、一、滿洲、蒙古、新疆、伊犁の鑛山を外國に與ふるを得ざるのみならず、支那また自ら利益を占むるを得ず、一、牛莊の外は外人に租借せしめざること、一、東支鐵道の損害は支那朝廷より賠償すること、一、滿



鐵の枝線を北京に延長するを許す。——等々で、ロシアは、事實上滿洲を占領するほか、多くの特權を獨占したのである。

こゝに於て日英獨米は、國力均衡上、固より傍觀して、默視すべき事ではなかつたので、相率ひて、支那に警告を發した。よつて支那は、その調印を拒み、ロシアもその不利を悟つたものかその態度は一變して、自らこれを撤回した。

しかし、それは表面上の事であつて、その後徐々として軍備を増加し、旅順大連は儼たる軍港となり、ハルビンをもつて軍備の中樞とし、東はウラジオストクと呼應し、南は、朝鮮の境をを壓するに至つた。

愈々日英同盟成るに及んで、ロシアは、一大障礙に遇つたが、陰然明治三十五年三月、露佛同盟を宣言し、四月八日をもつて、露支間の條約を締結して、これに調印した。

その要領とするところは、第三期に分つて、軍隊を滿洲の地より撤退することだが、半歳の日月を経て撤兵の第一期になつても、わづかに少數の部隊を撤兵せしめたにすぎなかつたのである。

その第二期に際しても、ロシアは依然これを占領して、毫も撤兵の形跡なきのみならず、その五月支那に對して、七ヶ條の要求をすらしした。

その要領は、ロシアの權利を認めよといふもので、それに據れば、ロシアは殆んど全く滿洲より撤兵するの意志なきのみならず、その地の開放に、全然反對せるものである。

こゝに於て、日英兩國は、直ちに支那に警告し、アメリカもまたこれに與して、ロシアに嚴重抗議した。ロシアは止むを得ず、また、その要求を撤回して、滿洲の開放を宣言した。

しかしながら、撤兵は固よりその權利すら翫断して顧みず、その後は秘密策略をとつて清廷に清國駐劄露國公使レツサルが追つて盛んにいろんな要求をしたのである。

この年六月、露の陸軍大臣クロボトキンが日本に來朝した。その來朝は、他日の開戦を豫期して軍事的視察にやつて來たのであらうといふ噂が高かつた。果して、クロボトキンは、歸國の途旅順に至つて、極東駐在の各國武官の列席を求めて、一場の挨拶をしたが、席上に於てロシアは滿洲より撤兵せずと發表したので、大問題となつた。

こうしてロシアは全く滿洲を占領してから、明治三十六年には、さらに力を朝鮮に盡すやうに



なつた。ロシアは、我邦と結んだ日露協定の条件を無視して、兵を韓國にどん／＼送つた。同年八月には、龍巖浦に砲臺を建設し、旅順大連と呼應して、黄海渤海の主權を占斷した。それに對して清韓兩國は、どうも微弱で如何ともすることが出来なかつたのである。

こゝに於ては日本政府は、これを對岸の火災視することは出来なかつたから、八月十二日、露國駐劄栗野公使をして、次のやうな提案をロシア政府に送達せしめた。即ち、韓國を當初の状態に復し、兩國ともにその限界を踏えざるを主とするのであつた。

この提案は、ロシアに送られて、直接協商を望まれたが、ロシア政府は皇帝の外遊を理由として毫も談判を開始する模様はなかつた。そこで遂に談判地を東京に移して、九月六日、外務大臣小村壽太郎は、露國公使ローゼンと第一回の會見をした。ロシアは傲慢不禮の態度をとつて、日本政府の望むところを悉く否定した。滿洲は愚か、韓國さへ占領しかねまじき有様であつた。

こゝに於て我が政府は、直に修正意見を提出して、曰く、

一、若し露國にして滿洲にして滿洲併呑の意思なくば、何故に清國の主權及領土保全を尊重するがごとき約款に反對するの必要あらんや、是れ吾が日本の解する能はざる所なり、故に露國に

して之を拒絶するならば、吾が日本は益此約款を挿入せしむるの必要を感じるなり。

二、且日本帝國は滿洲に於て現下既に商業上の必要を感じるのみならず、將來益發達すべき筈なり、しかのみならず、政治上に於ては、其韓國との關係上緊切なる利益を有するを以て、全然之を我が利益の範圍外とすること能はず。

三、若しそれ中立地帯を設くるならば、滿洲韓境界の兩側に跨り、一定の距離を劃するを至當なりとし、各五十キロメートルに亘る地幅を以て之に充つるの議を提出す。

爾後東京に於て、數次折衝の結果、十月三十日に至つてわが政府は確定修正案をロシア政府に送つたが、その回答は、遷延に遷延をかさねて四十日後に至つて、漸くわが政府に到達した。

その回答に於て、ロシアは滿洲に關する條項を削除して、本協商をもつて全然韓國に關するものと韓國領土を軍略上の目的に使用すべからざること等を以てした。滿洲に對するわが提案をもつて、審議するに足らずとして、全然没却したのである。

日本政府としてはいかに軟弱と雖も、こんな要求を容るゝことは出来なかつた。こゝに於て十月二十一日、ロシア政府に再考を求めた。之に對する回答は、前項同様で、之後重ねて再考を